朽ちた楽園のエルフ

志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
朽ちた楽園のエルフ

【Ｎコード】
Ｎ５３７４Ａ

【作者名】
志信

【あらすじ】
成り上がり貴族の娘アイナは、豪華客船での旅行中、何者かの襲撃を受ける。船は潰され、乗客はアイナ以外全員が死亡。海に投げ出されたアイナは、偶然にも小島に漂着する。意識を取り戻したアイナを待ち受けていたのは、巨大な石人形の化け物だった。

プロローグ

どうしてですか、母さん。

あなたはあの日、はっきりと言いました。
私とあなたは母娘ではないと。赤の他人同士なのだと。
あなたと私は別の道を選んだのです。
他人なのです。食い合う仲なのです。もう頼りにされる筋合いはないのです。

わかっていたはずでしょう。私などより、ずっと。
わからないはずはないのです。
そんなこともわからないで、どうして私と別れるような真似ができるでしょうか。

あなたは、もうこの世にはいないでしょう。
しかしそれならば、天から見守るくらいのことはしてくれても良いのではないですか？
『恋は盲目』とはよく言ったものです。
娘を守るという他者に任せられない重役を、あなたは他人任せにするつもりなのですか？
娘に課せられる過酷な運命を予想しておきながら、結局は知らん顔をするのですか？

どうなのですか、母さん。

いいでしょう。
あなたが何を考えているのかは知りませんが、いずれは知ることができる。この場はそう信じておきます。
少々腹は立ちますが、今はあなたの思う通りに動いてあげましょう。
実のところ私も、少なからず日常を退屈に思っていたところです。

願わくばこれが、凡百のそれよりはずっと面白い物語の始まりであることを祈っています。

第一話「沈没」

ぎぃぃ……

木材のきしんだ音でアイナは目を覚ました。
寝ぼけまなこで辺りを見回し、寝起きの頭でしばし黙考し
ここが自分の部屋ではなく、大陸へと向かう船の上であることを思い出した。体を起こす。
「ん……」
可愛らしい声をあげて伸びを一つ、ベッドを抜け出して着替えを物色し始める。

彼女が着ていたパジャマの素材は薄紅色の絹、
船の揺れで暴れないよう床と壁に固定されたクローゼットから取り出したブラウスも
純白の絹を仕立てた高価なものだ。これ一着を買う金があるなら、二月は食っていけるだろう。
そしてアイナは、そんな衣装を身にまとうに相応しいだけの美しさを持った少女だった。
やや吊り目だが顎のラインは丸く、きつい印象はない。
パジャマを脱いで外気にさらした身体は
日焼けもしていない肌には似つかわしくないほど筋張っていた。明らかに自然とついた筋肉ではない。
もともと痩せ型なのかも知れないが、それを差し引いても
つけるべくしてつけた、訓練で鍛え抜いた筋肉という雰囲気がある。
貴族の少女にしては珍しかったが、だからこそ護身術の一つも習っていておかしくはないだろう。

少しくらい筋肉質でも、それは彼女の可愛らしさを何ら損ねるものではない。

耳を覆い隠して腰まで届く栗色の髪に、アイナは慣れた様子で赤紫のリボンを巻く。

同色のケープを羽織り、やはり同色のスカートにベルトを締めたところで

部屋の扉が控えめにノックされた。

「アイナ・コンフリー様。朝でございます」

扉の向こうの男の声に、アイナは昨日、朝は七時に起こしてくれるよう頼んだことを思い出す。

「お客様」

「起きています、もう少し待ちなさい」

「かしこまりました」

船の使用人であろう男を堂々と待たせ、アイナは素早く手ぐしで髪を整えた。

顔を洗う暇がなかったことを気にしつつも扉を開ける。外には、やはり使用人の格好をした中年の男がいた。

「待たせましたね。聞きたいのですが、朝食はどういう風に取れば良いのでしたか？」

「はい、食堂で他のお客様と取っていただくようになります。

その間にベッドメーキングを致しますので」

「わかりました。それと、今日の新聞はあります？」

「申し訳ございません。まだ港に寄る前ですので……」

「ああ、それもそうですね。では、昨日の夕刊でも良いのですが」

「かしこまりました。すぐにお持ちします」

「お願いしますね」

恭しく礼をして去って行く使用人の背中を見送り、アイナは扉を閉めた。

とくにすることもない。せっかく海の上にいるのだしと、窓のカーテンを開けてみる。

良い天気とは言えなかった。煙にまかれたような灰色の空と、それを映して暗い荒れた海。
昨日までは揺れもしなかった船がぎいぎいきしんでいることから見ても
航海をするのに良いコンディションではなさそうだ。詳しいことはわからないが。
雲一つない青空と穏やかな海を期待していたアイナは、軽い落胆を感じながら洗面所に向かった。
濡らしたタオルで顔を拭き、鏡を覗き込んで髪形を修正する。
せっかくの船旅なのにこの天気では気分が滅入るというべきか、
常に良い天気とは限らない旅暮らしの気分を味わえたことに興奮するべきか、
そんなことを考えながらリボンを巻き直していると、波の音に混じってノックが聞こえた。
新聞が来た。食事までの時間が潰せる。アイナは少し表情を和らげて部屋に戻った。

数分後、アイナは甲板に出ていた。
手には色とりどりの花を集めた花束。
海上の潮風は強かったが、周囲の人込みと低い身長のおかげか、あまり寒さは感じない。
人々のざわめく中、代表者らしい黒い背広の男が声を張り上げた。
「えー、それでは皆様、『エルフの領海』に呑まれた人々へ
　哀悼の意を込めまして、黙祷と花束を捧げたいと思います」
花束を持った人々が海へと近付くのを見、アイナはそれに習った。

部屋に来た使用人は、新聞とともに頼んでもいない花束を持って来ていた。
「あの、これは？」
「はい、もうすぐ『エルフの領海』を通過致しますので
供養のための花束を配っております。お客様は参加なされますか？」
「あ……、はい」
アイナは納得したように頷いた。

『エルフの領海』とは、だいぶ昔から通った船が沈んでしまうというジンクスのある
この海の近辺に住む者なら誰でも知っている海域だ。
当然、通った船が全て沈むわけではないのだが
この海に沈んだ船の大半は、この海域で沈むのである。
沈んだ船のわずかな生き残りが「エルフに沈められた」と錯乱したように話すこと、
実際にこの海域の近くには、かつてアイナの故郷と戦争し、敗れ、海に逃れたエルフ達の子孫が暮らすと噂される島『クロノガルデニア』があることから
いつしかこの海域は『エルフの領海』と呼ばれるようになった。
かつての戦争で数多くの先祖の命を奪ったとされる忌むべき種族、エルフの名をつけることで
人の命を奪う海域、という意味を持たせたらしい。

アイナの父も、この海域で船を沈められたことがあるそうだ。
小競り合いの戦で名を上げて傭兵から貴族に上り詰めた父は、体力は人一倍ある。
陸地が近かったこともあり、父はどうにか泳いで助かることができ

たが
ともに乗船していた戦友を何人か失ってしまったのだそうだ。
死者には敬意を払わねばならない。父の教えだった。

そしてこの船は、そんな『エルフの領海』の犠牲者へ哀悼の意を捧げるために
現代の最新技術を惜しみなく投入して作り上げた、世界最初の客船だ。
船名をレクイエム。外海を渡れば二割ほどの確率で船が沈むと言われる現代において
金持ち貴族が命の心配をせずに乗ることのできる船。画期的な発明である。
アイナもこの船に乗り、『エルフの領海』を通過して離島へと観光に向かっている途中だった。
彼女は『エルフの領海』に感心がない。船に乗ったのは純粋に後学のためである。

投げ入れた花束は風に乗り、思ったより遠くまで飛ばされて落ちた。
波に弄ばれ、あっという間に呑み込まれた花束に
この海に沈んでいった者を連想する。なんとなく寂しくなった。
今際の際に、何を思ったのだろう。
アイナは特別感傷に浸るタイプでもないが、雰囲気が雰囲気だったせいか、いろいろと考えてしまう。
失ったのは肉親か、恋人か、とにかく大事な人だったに違いない。
感極まったように泣き出す人も多かった。
どうか安らかに眠って欲しい。アイナがそう思って黙祷を捧げる。
目をつむって数秒。一際大きな波の音を聞いた、その時だった。

――っごおおおおおおおおおおんっ！！！

「……っ！？」
あの暗い空模様が嘘のように明るい。あの強い潮風が嘘のように熱い。
寂寥感にあふれていた船上は一瞬にして大混乱に陥った。
木造の船が炎に包まれていたのだ。
紅蓮の炎は舐めるように燃え広がり、煙は同じ色の雲に溶け込もうとばかりに空を目指す。
「えっ……なっ……何！？」
アイナの叫びに答えてくれる者などいなかった。
すでに船上は紳士淑女達の悲鳴がこだまし、少女の声などかき消されてしまう。
「何が起こったの……？」
船員さえも慌てふためいている中で、アイナはかなり冷静だったと言える。
パニックを起こしかけながらも実際に混乱したりはせず、何とか状況を掴もうと視線を巡らせて
特に火の巡りが激しい船首付近に、人影があることに気がついたのだから。

その炎を台風の渦と例えるなら、人影は台風の目の中で逃げ場を失ったように立っていた。
直立不動のその姿勢は、危機を感じていないようにも、パニックを通り過ぎて呆けているようにも見える。
逃げ遅れたとしか考えられない。
「そこの方！逃げて！」
アイナは人の流れに逆らうように踏み止まりながら、必死に叫んだ。
しかし影は動かない。
光の加減で真っ黒なシルエットに見えているが、もしかして、もう

黒焦げになってしまっているのではないか。
そんな馬鹿馬鹿しくも嫌な想像が頭を駆け巡る。意を決してアイナは走り出した。
「逃げてっ……！聞こえないのですか！？」
一歩近寄るごとにシルエットは色と光を取り戻していく。
アイナと同じく、腰まで伸ばした長髪。恐らく、色はそんなに濃くはない。プラチナブロンド、あるいはブロンド。
背はアイナより頭一つ高かったが、それに似合わず線は細い。男とも女ともつかない体付きだ。
「逃げて！お願いですから……っ！」
駆け寄るアイナに気付く様子もなく、シルエットはゆっくりと右手を持ち上げる。
五本の指を開いた手の平は逃げ惑う乗客と船員達へ向けられていた、何をしているのかとアイナが顔をしかめた瞬間、

ごうっ……！！

シルエットの右腕から炎が噴き上がった。
腕が爆発したような錯覚を覚えたのは間違いではない、
事実、シルエットの右袖は燃え尽き、吹き飛んでしまっている。
右腕にびっしりと描き込まれた、くさび形の紋様がはっきりと見えた。
「刺青（いれずみ）……？」
腕を燃え上がらせながらも平然としているシルエットに、アイナは足を止めた。
右腕の炎はみるみる勢いを増し、周囲の炎とも同化して、そしてアイナは悟る。
この火事の原因は――
「やめっ……！！」

ごあああああああああっ！！！！

右腕から放たれた炎の濁流は、船の全てを巻き添えにして虚空に消えた。
大量の木片とともに吹き飛ばされていくアイナは、炎に焼き尽くされていく人々を見ていた。
どうすることもできなかった。呪うような鬼気迫る視線で火元となったシルエットを睨む。
人は――死ぬ直前のような――危機的状況に陥ると、潜在能力を限界まで引き出すことが可能になると言う。
アイナもそういう状態になっていたのだろう。先ほどは気付かなかった単純なことに気がついた。
ほとんど人間のそれだったシルエットに、一箇所だけ人間と違う個所があったのだ。
シルエットの頭部の両脇、耳のある位置。シルエットの耳は、人間にしては不自然に大きく、そして尖っていた。

アイナは叫んだ。
人の命を奪い続ける海に名付けられた忌むべき種族の名を、全力で叫んだ。
大きな水音を聞き、刺すような冷たさを感じ、意識は途切れる。

第二話「遭遇」

なんだかベッドがひどく揺れている気がする。それに、硬い。
まるで石のようだ。船の上にいるのだから揺れるのは当然かも知れないが
どうしてこんなにベッドが硬いのだろう。昨日までは普通、いや、むしろ家のベッドより柔らかかったのに。
アイナはゆっくりとまぶたを開いた。
「……え？」
青空が見える。どうして空が見えるのだろう。自分は確かに屋根の下で寝た。
混乱しかける思考をまとめるうちに、
こんな風にパニックを起こしたことがついこの間にもあったような気がしてきた。何があったのかと考え、
「……あ！」
自分の乗っていた船は沈んでしまったことを思い出した。
慌てて飛び起きる。体の節々は痛んだが、動けないほどではない。
続いて辺りを見渡し、自分が寝ていた石のようなベッドの正体を知る。
「……は」
腕だった。傭兵あがりの父も体は大きかったが、そんな父の腕よりも大きく太い。
石のように硬かったことも納得できた、その腕は石なのだ。
比喩ではない。青みがかった角の丸い石柱達が、人間の腕と手指の形に組み合わされて動いている。
頭では納得した。しかし、心が納得しない。石で作られた腕が動くはずがないではないか。
アイナが腕の付け根へと視線を巡らすと、

「……き」
自分を覗き込んでいるサッカーボール大の宝石と目が合った。
家のメイド達によく「何事にも動じない」と評されていたほど、自分でも不思議に思うほど、
それほどいつも冷静な頭が、ようやく自己の置かれた状況を理解し、説明してくれる。
どうやら自分は、石の人形にお姫様抱っこで運ばれているらしい。

「……きゃあああああああっ！！？？」

じたばた暴れて悲鳴をあげるアイナ。助けを求めようと思ったが、自分が――否、この石人形が歩いていたのは文字通りの獣道で
それを一歩でも外れればうっそうと生い茂る緑の森。とても近くに人間がいるとは思えない。
そもそも人がいたところで、この現実の出来事としてナンセンスな石人形に臆せず屈せず、自分を助け出してくれるのか。
だいたい何でこの石人形は自分を運んでいるのか。やはり化け物のセオリーとして、食べるためだろうか。
でもこの石人形、頭らしい円柱形の石には眼球らしい青色の宝石が一つあるだけで、口がない。
さっぱりわけがわからない。自分はどうなっていたのだろう。船から海に落とされたまでは覚えている。
自分はどうなってしまうのだろう。生き残れるのか。死ぬのか。
どうせ死ぬにしても食べられるなんて嫌だ。一思いに殺されるのが一番良いのだが。
涙目でもう一度石人形と目を合わせる。命乞いが通じる相手だろうか。やはり死にたくない。
「あああああああ……ら？」
アイナの顔から恐怖が消え、瞳に涙が引っ込んでいった。みるみる気分が落ち着いていく。

石人形は、アイナ以上に慌てていた。

暴れていたアイナが腕から落ちてしまわないよう細心の注意を払っていたようで、
アイナが暴れることをやめると、安堵したように強張った肩の力を抜く。
青い宝石がついただけの一つ目の顔にはその他のパーツがなく、従って表情もないのだが
石人形がどういう状態にあるか、アイナには一発でわかった。アイナに怯えている。
言葉を発せない人間は、話す以外の行動で感情を伝えることに長けると言うが
この石人形はその良い例らしい。もっとも、どう見たって人間ではないが。
石人形はゆっくりと道に膝をつくと、両腕を降ろし始める。若干左腕――アイナの足側が先に地につくように。
足が柔らかな土を踏み固めるや否や、アイナは素早く走り出した。
七歩走って振りかえる。石人形はしばし呆然とし、慌てて両手を振った。
「勘違いしないでくれ。自分はあなたに危害を加えたりはしない」
そういうジェスチャーに思われた。アイナもそう思うが、警戒を怠るわけにはいかない。

数メートルの距離を置き、少女と石人形が対峙する。
離れてみると、石人形がどのようなものなのか良くわかる。
胴長短足で、背丈は二メートルほど。その割に頭身が頭六つ分であるというのは

石人形の頭が人と比べ、かなり大きめであることを意味している。
腕は直立しながら指先が地面に触れそうなほど長い。
何型かと説明するなら人型なのだろうが、人とは明らかに体のバランスが違った。

緊張した面持ちでアイナがつぶやく。言葉が通じるのかは知らない。
「……あなたは、何者ですか？」
心配そうにアイナを見下ろしていた石人形は、アイナがしゃべったのを聞いてまたも肩を縮こまらせた。
「何者ですか？」
石人形はしばし硬直した後、ふいに傍らの木の枝をへし折った。
とてもアイナの腕では持てないような太いものだ。警戒したアイナが一歩あとずさると
それを見た石人形がわかりやすく慌てる。空いた手を顔の前でぱたぱた振った。
「違う。武器にするつもりじゃない」
そういうジェスチャーに思われた。アイナもそう思うが、警戒を怠るわけにはいかない。
アイナが逃げようとしないことを十二分に確認したらしく、おどおどと木の枝を土に突き立てる石人形。
がりがり枝が動かされれば、へたくそな文字がつづられていく。
無論、向かい合わせの位置にいるアイナには逆さに見えていたもののどうにか読むことができた。枝の動きを目で追いつつ、アイナは文字を読み上げてみる。
「あ、ぽ……アポロン？」
石人形はこくこくと頷いた。
「……あなたの名前、ですか？」
石人形は頷くことをやめない。なるほど、何者かと聞かれたから名前を答えてくれたようだ。
そういう意味ではなかったのだが、この際良しとする。

どこか満足そうに石人形――自称アポロンは枝を捨てた。武器は持たないという意思表示なのだろうか。
「じゃあ、その、アポロン……さん。質問しても良いですか？」
アポロンは首を縦に振る。名前を文字で伝えた時からわかっていたが、言葉を話せないらしい。
「えっと、ここはどこなのですか？」
そう、言葉を話せない相手にこの質問はまずかった。アポロンは両手で頭を抱えてしゃがみ込んでしまう。
「あっ、いや、その、えっと！　はい、いいえ、で質問しますから！　それなら答えてくれますよね？　ね？」
ようやく親に見つけてもらった迷子の子供のように顔を上げ、こくりと頷くアポロン。
決めつけてしまうのはまずいとわかってはいるものの、命の心配だけはしなくても良さそうだ。

字が書けるならそれで答えても良さそうなものだったが、アポロン自身がそうしなかったのだから、どうやら自分の名前以外は書けないと見ていいだろう。
半分土に埋まっていた岩に腰を降ろしたアイナは、おとなしく地べたに体育座りをしていた――アイナの座る岩の上の砂を払うという紳士ぶりを見せた――アポロンへと問いかけ始めた。
「……ここは、ウィナリスという国ですか？」
『ウィナリス』とはアイナの故郷である島国だ。船はまだ比較的島に近かったから
国のどこかに流れ着いた可能性もある。しかし、アポロンは首を横に振った。
少しだけだが期待していたゆえにため息をついてしまう。しかし、ここで落ち込んではいられない。

「あなたはウィナリスを知っていますか？」
アポロンは首を縦に振る。地理的な知識はあるらしい。
アイナはほっとした。とにかく、現在地を知らねばならない。
「では、ウィナリスはここから遠いですか？」
今度は首が横に振られた。
「近いのですか？」
次いで縦に振られる。
「……そうですか、良かった」
希望はある。故郷が近いなら、帰れないこともなさそうだ。
アイナが胸をなでおろしている内に、アポロンは指で地面に線を引き始めた。
何事かと見守っていたアイナだったが、すぐにそれがウィナリスの地図であることに気付く。
簡略化されてはいるものの、地理学の教科書に載っていた白地図と何ら変わらない正確さだ。
アイナは思わず「上手ですね」と賛辞を呈した。
アポロンは照れたように後頭部を掻く。外見の無骨さに似合わず、仕草の一つ一つが可愛らしい。
頬杖をついてなごむアイナの前で、アポロンはウィナリス島の近くに十字を描き加えた。
四つの先端のうち、一つを選んで矢印にする。これはすぐにわかった、東西南北を示す記号だ。
最後にアポロンは小さな丸を描き込んだ。アポロン画の略地図で言うと、ウィナリス島の東。それを指差す。
「その島が、現在地と言うわけですね？」
アイナの言葉にアポロンは頷いた。
ウィナリスの縮尺から見るに、この島が近くに位置しているのは間違いないだろう。
こんな形の島が地図に載っていたのを見たことがある。他にもたくさんあるので、名前は一致しないが。

「では、もう少し良いですか？　失礼ですが……あなたは、その。
　私を殺したり、食べたりは……しません、よね？」
先ほどより控えめなアイナの言葉に、アポロンは憤慨したように首をぶんぶんと横に振った。
そして少しの間固まったあと、慌てて首を縦に振る。
「殺さないか」という質問を否定したら「殺すかもしれない」という返答になることを懸念したようだ、
アイナは質問が悪かったかと頬を掻いた。
「ごめんなさい。あなたが助けてくれたんですよね？」
今度は頷くアポロン。さっきから肌が少しひりひりして口の中がざらつき、どこかしょっぱい。服も髪も痛んでいる。
海に落ち、この島に漂着したところを彼が――男とは限らないが――助けてくれたに違いなかった。
とりあえずこの人の良さそうな非人間は、自分を悪くするつもりはないらしい。ついて行ってもいいだろう。
「ありがとうございました」
アイナが頭を下げると、アポロンも会釈を返す。
そしておずおずと両腕を差し出してきた。アイナの後ろ頭にそっと右手を触れ、
左腕を膝の裏に持って行くと、膝をかくんと折らせる。アイナの体が再びお姫様抱っこの姿勢に収まった。
「自分で歩けますけど……」
アイナの言葉は初めて無視された。アポロンはアイナの戸惑った表情を見ても構わずに歩き始める。
「……優しいんですね」
アポロンの肩が強張った。思わず笑みがこぼれる。

「これがあなたの家なのですか？」
アイナの問いに、しばしアポロンは虚空を見やり――こくりと頷いた。
玄関先で降ろされたアイナは珍しいものを見たようにその家を眺める。
家は全てが石で作られていた。
外観で木材が使われているところは扉や窓を除けばほとんどなく、背景の森とはお世辞にも調和しているとは言いがたい。
がっしりとした造りで、ウィナリスの一般住宅よりも一回り大きい気がした。アポロンが住むためだろう。
四角い石を積み上げた煙突がもくもくと煙をあげていた。
玄関のドアを開けて中に入ったアポロンが、顔と手だけを出して手招きしている。
「あ、お邪魔します」
少しばかりの気後れと、かなりの好奇心を持ってアイナは家の中に入っていく。

内装におかしなところはない。ときおり半開きのドアから部屋の中を覗けば、
フローリングの床には少し年季の入った木製の調度が並び、
ところどころに細かな模様の美しいカーペットが引かれていた。
自宅の華やかな装飾にはない落ちついた雰囲気に、感嘆の声を漏らすアイナ。
アポロンの後ろについて歩きつつ、廊下の窓からふと外を覗く。
良い天気だ。空の青と森の緑をバックに従えて、
「……」
女物の洋服が物干し竿で揺れていた。
「……あの。あれ、アポロンさんの服ですか？」
振り向いたアポロンが首を横に振った。

彼は服らしい服を着ていない――というか彼には服を着るという概念がないらしい。真っ裸だ。
それに、干されている洋服は明らかにアポロンの着れるサイズではなかった。誰か一緒に住んでいるのだろうか。
そう言えば、「これがあなたの家なのか」と聞いたとき、アポロンは少し答えるのが遅れた。もしかして、居候か何かなのかも知れない。
そんなことを考えているうちにもアポロンはのしのし歩いて向かって左のドアに消えてしまう。慌てて後を追った。

その部屋はキッチンに隣接したリビングだったようだ。
広い部屋には食事用の足の高いテーブル――椅子は標準サイズと巨大なものの二つがあった――に
ガラスのはめられたシンプルな食器棚。木製の器が控えめに整頓されている。
赤いカーペットの上には、尻を乗せる場所から背もたれにかけて布の張られたロッキングチェア。
失礼かも知れないが、アポロンが座ったら確実に壊れる。
アポロンの他に誰かがこの家に住んでいるのは間違いないようだ。
静かに普通サイズの椅子を引いたアポロンが不思議そうにこちらを見ている。
うながされるままに座ると、アポロンは袖もないのに腕まくりの仕草をしてキッチンへと入っていった。
「……」
テーブルの位置からはアポロンが何をしているのか見えないが、何かの爆ぜる音とほんの少しの煙たさで、火を起こしたことはわかった。
ふいに船上での悪夢が蘇る。

一瞬で焼かれた乗客達。

成すすべなく燃え上がる船。
炎を操る、腕に刺青をした人影。
耳が長く尖っていた。あれは間違いなくエルフだ。
『エルフの領海』の伝説が本当だったことはわかったが、いったい
どうして船を沈めていたのだろう。
いや、そんなことはどうでもいい。
今はどうやって仇敵を討つか。あのエルフに、どうにかして罪の償
いをさせねばならない。
でも、どうしたら良いのだろう。奴にはどうやったら会えるか。

こと。

うつむいて考え込んでいた眼前に、スープの深皿が置かれた。
「え？」
太陽の位置加減から見て今はお昼過ぎ、きっとスープもまだ冷め切
ってはいなかったのだろう。
ほかほか湯気を立てるそれを木のスプーンとともに運んできたのは
アポロンだ、
いつの間に身につけたのか、妙に似合うふりふりのエプロンと三角
巾姿で
「食べてくれ」とでも言いたげにこちらを覗き込んでいる。
「食べていいんですか？」
こくり。
「ありがとうございます。頂きますね」
どうもさっきから考え事をしていると、この石人形に邪魔されてば
かりいる気がする。
苦笑まじりにアイナはスプーンを手に取った。
スープは素人にもそれとわかる、野菜と雑穀を煮て塩で味付けした
だけの簡素なもの。

しかしそれが意外と美味しい。胃の内壁を熱がなぞる感触。空腹に今更気付いた。
そう言えば最後にものを食べたのは船が沈む前の晩の夕食だ、
今の天気は快晴だから、少なくとも一日以上は何も食べていなかったことになる。
さすがは貴族の娘、上品に――それでいてハイペースにスープを口に運ぶアイナの横から
アポロンはいなくなってしまっていた。向かいの椅子の背もたれに、エプロンと三角巾が引っかけられている。
「……あら？」
しばらくしてアイナはそのことに気付くが、心細さに空腹が勝ったようだ。手は止めなかった。

アイナが必死に食事を続けるアポロン宅のすぐ脇には崖がある。
幅は大人四人が両手を広げた程度だが、とにかく深い。
落ちたら即死は免れないだろう。下には川が走っていたものの、流れが速い。
水が澄んでいるからわかりにくいものの、生半可な鍛え方でこの川を泳ぐのは難しそうだ。

がさがさ、がさっ。

細長い草の茂みを掻き分け、人影はひょっこりと顔を出した。
細い身体と長くて薄いブロンドが印象深い美しい女性だ。
どう見積もっても二十代の半ばには届いていないはずだが
蒼の瞳は妙に老成した輝きを持っており、正確な年齢が掴みにくい。
腰にはかなり細身の長剣を帯び、背中には小さな狩猟用の弓と矢筒を背負っている。

「おー、風呂沸かしとる。毎度ながら気が利くもんじゃ」
妖艶さと無邪気さを併せ持った薄い唇が嬉しそうに言葉を紡いだ。
崖を挟んだ反対側には、ところどころ木々に隠れたアポロンの家が見える。
煙突はもこもこと煙を吐き出し続けていた。女性は少女のように屈託なく笑い、ひとりごちる。
「帰ったらエプロンでも繕ってやろうかの」
にこにこと笑顔を浮かべながら森の中へと戻る女性。
流れる金髪は木々の緑に隠れ、やがて見えなくなった。

アイナは目を輝かせていた。
彼女の視界には湯煙が立ち込めて白く煙る板張りの部屋が、
その中でなみなみと湯を湛える木製の浴槽がある。風呂場だ。
期待に満ちた目でアポロンを振り返ると、彼も満足そうに頷いてくれる。
「ありがとうございます！」
髪や服の中に砂が入り込んでじゃりじゃり言い、気持ち悪いことこの上なかった。
できれば風呂、せめて真水で洗い流したいと思っていたところだったのだ。願ったり叶ったりである。
さっそくアイナは汚れた絹のブラウスの襟元に手をかけ、
「……あー……」
アポロンを見上げた。そのはにかんだ視線の意味するところに気付いたアポロンが
両腕をぶんぶん振り回し、どしんどしんと石造りの家を揺らして走り去っていく。
苦笑するアイナ。やはり彼は『彼』と呼称して問題ないようだ。

ウィナリス島とその周辺の島国は、四季の移り変わりが激しい。
夏は湿気がこもって蒸し暑く、逆に冬は乾燥した寒波が雪崩れ込んで来る。
そのためこの地方には、垢を落とすため、体を温めるため、熱い湯に体をつける習慣があった。ウィナリスの都市に行けば公衆浴場も多い。

「――っ……う～っ」
髪と体を洗い終え、アイナはゆっくりと体を湯に沈める。
最初こそ潮に焼かれた肌がひりついたが、すぐに全身を何とも言えない快感が包んだ。アイナは風呂好きだった。
長い栗毛は器用に結い上げ、湯船につからないようにしている。
「……色々あったなあ」

楽しみにしていた自分一人の観光。
大陸の文化を学び、最新鋭の客船で船旅を満喫する予定だった。
それがどうしてこんなことになってしまったのだろう、
船はエルフに沈められ、自分は名前を忘れた島に流れ着き、石の人形に世話を焼いてもらっている。
ぼんやりと考え、そこでようやくアイナはアポロンが石人形であることを思い出した。
あまりに人間臭く動き回るから忘れていた。最初は心中で『化け物』などと罵っていたが
むしろ今の『世話好きの純情な紳士』という認識より、そっちのほうが正しい気がする。
彼はいったい何者なのだろう。自分を助けてどうするつもりなのだろうか。
助けると言えば、船に乗り合わせた乗客や船員達だ。

彼らは助かったのだろうか。可能性は低い。乗客達が焼かれるところは見てしまっている。
自分が、あの乗客達が、船員達が、いったい何をしたというのだろうか。
突如現れ船を燃やして沈めた、あの右腕に刺青のあるエルフ。奴を許すわけにはいかない。
そう言えばあの海域は『エルフの領海』と呼ばれていた。それと何か関係が。
そもそもウィナリスの歴史ではエルフは悪しき種族として、かつて先祖達にウィナリスを追われた。
その子孫達は今、『クロノガルデニア』という島に集落を作っているという噂で。
クロノ。時。そう言えば、今何時だろう。そう言えば総入れ歯。くだらない。
なんだか考えがまとまらない。

「……。……」
いつしか、風呂場に規則正しい寝息が響くようになっていた。

優しげな声が聞こえた気がする。
体がひどく火照り、尋常でなくだるい。
見渡す限り辺りは真っ暗だったが、目の前に人影がある。
耳は大きく尖り、右腕にはくさび状の刺青。船を沈めたあのエルフだ。

許さない。奴だけは絶対に許さない。

「おんし、これで九度目じゃぞ。いいかげん起きてくれんかの」

はっきりと目の前から女性の声がした。しかし、姿は見えない。
当然だ、目をつむったままだった。気だるい。
自分はどうしたのだろう、確かアポロンに風呂に案内されて、入浴して、あがった記憶がない。
浴槽の中で眠ってしまったのか。しかし、その割に今は肌が冷たい
――

「お、気がついたかの？」
アイナが睡魔の誘惑を振り切ってまぶたを開くと、鼻の触れ合いそうな位置に人の顔があった。
「……きゃあああああああっ！！？？」
「ほ、ぉお！？　ぁだっ」
目の前の人は驚いたように尻餅をつく。膝を抱えて顔を覗き込んでいたらしい。
女性だった。その身体的特徴に、何とも言えない違和感がある。

歳は二十代の前半。長い金髪は洗濯バサミのようなヘアピンで横にまとめられ
青い瞳がぱちくりとこちらを見つめていた。
全裸でいるところから、どうやら風呂に入ったところで自分を見つけたということなのだろうか。
あらためてアイナが自分の状況を確かめると
体は湯から出され、浴槽に寄りかかるよう座らされていた。
パニックに陥りそうになりながら実はギリギリでパニックにならない自らのそんな冷静さを自己嫌悪しつつ、アイナは女性をしっかりと観察する。

女性はほっそりとしすぎていた。とくに病弱な印象はないのに、肉がない。
胸のふくらみなど十四歳のアイナにすら劣るほどであった。
次に、耳が大きい。大きいだけでなく尖っており、微妙にぴこぴこ動いていた。
文献のさわりを読んだだけの知識だが、
耳が尖っていて体付きが異常に細いというのがエルフの特徴であることは知っている。
違和感の正体はこれだったらしい。人だと思ってエルフを見れば、それは違和感も感じるだろう。

「お、おんし、どうかしたのかの？私の顔が怖かったか？
　これでも結構、自分じゃ美人じゃと思っとったんじゃが」
若い女性は、似合わない老人言葉で気遣いの言葉をかけてくる。
エルフは人間などよりずっと長寿だ。見た目の年齢が正しいのか、口調の年齢が正しいのか。
「あ……いえ、そうじゃなく」
驚いてしまって、と続けようとしたアイナの言葉が、急に途切れた。

尻餅をついたとき、後ろに倒れないよう突いていた腕は
体の陰に隠れて良く見えていなかった。
女性があらためてその場に膝を折ると、その腕も自ずと体の前に出て来てしまう。

刺青があった。
女性の右腕にびっしりと、くさび型の刺青が彫り込まれていた。

「……」
どうやったら会えるか。そんなことを考えていた。必要なかった。
船を沈め、船員を殺し、乗客を殺したあのエルフは、目の前にいる。

ばあん！　　……ずしぃぃんっ！

風呂場のドアが乱暴に開け放たれる。悲鳴を聞きつけたアポロンが駆けつけたらしい。
しかし悲しいかな、その頼もしき石人形は少女と女性の裸を拝み、ばったり倒れ込んでしまった。
「あ、アポロンっ！？　ええい、おんしはいっつもいっつも！
　女子の裸を見たくらいでオタオタするんじゃないわ！
　この娘は私が見るからの、おんしは着替えを用意しとけ！二人分じゃぞ！」
女性の呆れたような声を右から左に聞き流し、
アイナは恐怖で見開かれた瞳に女性の横顔を映していた。
「……どうした？　顔色が悪いぞ。湯冷めしたかの」
「ぁ……あ、あっ……あ、あな、あな……あなた、は――」
「私か？　名前はフェンネルじゃが。――こら、アポロン！いつまで寝とる！早くどかぬか！」

フェンネル。
すっかり紫色になった唇が、音もなくその名前を繰り返す。

第三話「歓迎」

こと。

木製の皿の上に、やはり木製の小さなカップが置かれた。
風呂を出たアイナはリビングの椅子に腰かけていた。普通サイズの方である。
着ていた絹の衣服はどこかに持っていかれ、
代わりに少し大きめのシャツとスカートを着せられた。袖と腰をまくって調整してある。リボンはない。
カップの中に入った黒っぽい液体を飲んで良いものか逡巡していると、
「……飲まんのか？　美味いぞ」
向かいに座ったエルフが、きょとんとこちらを覗き込んで来た。
「ふもとに――ああ、ここはちょっとした丘の上なんじゃが、
ふもとに一応人間の集落があっての。定期的にウィナリスと船で品物を行き来させとるから
こういうウィナリスの品物も手に入るんじゃよ。
お財布にかなり優しくない、とっておきのコーヒーなんじゃがなあ」
そう言ってエルフ――フェンネルは困ったように笑った。しかしアイナはくすりとも笑えない。
黒い水面に映った自分の唇が、小刻みに震えているのがわかる。
目の前に一瞬にしてたくさんの人々を焼き殺したエルフがいるのだ、冗談でも笑えるはずがなかった。
「もしかして、コーヒー嫌いかの？
すまんが、私の顔を立てて一口は飲んでくれると助かるんじゃが」
「……」

「ほれ、おんしの後ろ」
フェンネルがカップを口に運びつつ、アイナの背後を左手で指差す。
示される前に振り向いてみれば、背後に青い縦線を背負った石人形が嘆くように顔を手でおおってしゃがみ込んでいた。やや声を低くするフェンネル。
「アポロンが落ち込むでな。頼む」
「おお、お、美味しいですよ、アポロンさん！」
無論、本当にコーヒーが嫌いなわけではない。慌てて温かなそれを口に含み
必死に笑顔を取り繕った。ふりふりエプロンに三角巾のアポロンがようやく嬉しそうに立ち上がる。
アイナがほっとしていると、苦笑いのような表情を浮かべられた。
「すまんの、許してやってくれんか。こいつが私以外と顔を合わせたのは十五年ぶりでな」
「十五年！？」
思わずテーブルに身を乗り出すアイナ。フェンネルはコーヒーをすすりつつ頷いた。
客人のことかコーヒーのことか、「久しぶりじゃなあ」とつぶやいて続ける。
「私はエルフじゃからの、おんしら人間とは時間の感じ方が違う。もちろんアポロンだってそうなんじゃが、私ほど寂しさに慣れてはおらんもんでな。
海に釣りに行かせたんじゃが、そこで偶然おんしを見つけたらしい。
たぶんむりやり連れて来られたんじゃろ？　許してくれんか」
「あ、いえ……むりやり連れて来られたわけではないんですけど」
「おお？　だって、言葉が通じなかったんじゃ」
「何も言ってくれませんでしたが、何を言いたいのかはわかりました」
「……なるほどの。上手いこと言う娘じゃな」

楽しそうに破顔するフェンネルを、背中のアポロンはどこか恥ずかしそうに見ていた。
釣られて笑ってしまいそうになったが、こらえた。気を許すのはいろいろと良くなさそうだ。
第一印象が良くても、このエルフは間違いなく大量殺戮を行っているのである。

今となっては後悔するしかないが、どうして自分はもう少し地理を真面目に勉強しなかったのか。
アポロンの描いた地図に描き込まれた、この小さな島。
ウィナリスの人間達が禁忌として触れようとせず、
地図には適当に描いていた島をアポロンが正確に書き記してしまったせいもあるのだが。
どうして思い出せなかったのか。ここはウィナリスを追われたエルフの隠れ里『クロノガルデニア』だ。
「ここは……クロノガルデニアという島ですか？」
何から説明すればいいかの、などと首をひねっているフェンネルにアイナは言った。頷かれる。
「良く知っとるの。その通りじゃ」
あまり嬉しくないが、裏づけは取れた。
アポロンに命じてお茶請けを持って来させているフェンネルの耳を睨みつつ、アイナは脳内検索をかける。

エルフ。この世界のあちこちに存在する、亜人の一種である。
人間と同程度に世界に分布しており、当然生活様式や細部も居住地によって違うが
共通している性質はいくつかある。

身体的特徴として、エルフ族の耳は大きく尖っており、
体はぜい肉がなく、やせ細っている。

不老不死と噂されるほど寿命が長く、いつまでも若々しい姿で生きることも有名だ。
そして何より、魔法を操る。人間にはどうやっても扱えない人知を超越した技術が
エルフの社会では体系化されているのだ。船を焼いた炎も魔法の力だろう。

ウィナリス、及びその周辺の島にエルフはほとんど存在せず
数の少ないエルフ達は皆、クロノガルデニアに隠れ住んでいるともっぱらの噂だ。
「……」
アイナは視線でフェンネルを舐め回す。
この地方独特のエルフの特徴として、背が低く、余所者を拒む性格があるらしいが
フェンネルにはそのどちらも当てはまらない。
背丈は１７０センチ前後といったところだろうか、やせてこそいるが、小柄ではない。
閉鎖的でもない。アイナを家に招き、からからと笑顔を見せている。
演技という可能性は捨て切れないが、それはないだろうとアイナは思っていた。

さっきの話が正しいなら、この家にはフェンネルとアポロンが二人で暮らしているのだろう。
誰もいないはずの風呂を警戒する者はそうそういない。誰か入っていることに気付かず
服を脱いで風呂場へと入っていくくらいはするかも知れない。
しかし、いくらアイナが子供だったとはいえ、女同士であったとはいえ、
見知らぬ他人がのぼせないよう気を使って、相手を風呂からあがらせたりするものだろうか。

しかもフェンネルは全裸のままアイナが目覚めるのを待っている。
自分だったら対処は服を着てから、百歩譲ってタオルを巻いてからにする。
フェンネルがかなり社交的――というか、末恐ろしいまでに他者に気安い性格なのは間違いない。
根拠はないが、やはり演技でだけはない気がする。

その印象は船を沈め人を殺す冷酷なエルフとはかけ離れていた。
しかめっ面で頭をフル回転させているアイナの前にクッキーが置かれ、
「どれ、他に聞きたいことはないかの？」
さっそく手を伸ばしたフェンネルが、頬杖をついて尋ねてきた。一番の疑問をぶつけてみる。
「私は……ウィナリスに帰れるんでしょうか？」
「帰れるぞ」
それは待ち望んだ答えであるはずなのだが、あまりにあっさりと口にされたので
理解するのに数秒かかってしまった。
「ど、どうやって」
「さっき、ふもとに人間が住んどると言ったじゃろ？
貿易で来る船に乗せてもらえば、三日くらいでウィナリスに着く。簡単じゃ。
まあ、金はかかるが……おんし、いくらくらい持っとる？」
首を横に振るアイナ。持ってきた路銀は今頃海の底だろう。
「やっぱりの」
誰のせいだと思っている。というアイナの心中の罵声は、当然フェンネルには届かない。
「まあ、ふもとの連中とは仲が悪いがの、
だからこそおんしをエルフから引き離すのに協力は惜しまないはずじゃ。

今はゆっくり休むことじゃな。大丈夫、怖いことはないぞ」
大ありだ。というアイナの心中の罵声は、当然フェンネルには届かない。
毒づきながらも、ふと思ったことを口にする。
「その船って、いつ頃来るんですか？」
アイナの質問に、フェンネルはクッキーを頬張りながら腕組みしてうなり、やがて言った。

「二ヵ月はかからんじゃろ」

お互いがお互いの人生に大きな影響を及ぼし合うことになる三人の、初の共同生活の始まりであった。

その日の夜。窓の外を見ると、空に空いた穴のような満月がこちらを見ていた。
アイナは用意された部屋のベッドに座り、真剣な表情でほのかに輝くランプを睨んでいた。
お題は、逃亡の手順である。

フェンネルは船が来るまでこの家にいるといいと言ったが
殺人犯と同じ家で生活などできるはずがない。いつ殺されるかわかったものではない。
そう考える割にはその殺人犯と夕食のテーブルをともにしてしまった自分を責めつつ
アイナはどうにかしてこの家を抜け出す方法を考えていた。
まず真っ先に窓から出ようと考えたのだが、ここは二階だ。

アポロンに合わせて天井が高いこの家だから、普通の家の二階より高さがある。飛び降りるのは気がひけた。
駄目押しとばかりにちょうど真下が石畳になっている。洗濯物を干すためだろうか。
シーツを切ってロープにできないかと考えたものの、この部屋のベッドにシーツはなかった。
頑丈に作られたタオルケットと毛布は、彼女の細い腕では破れそうにない。

家の中をうろうろしていても庭をうろうろしていても特に何も言われないのだが、
家を離れようとしようものならアポロンが走って来て
「森は危ないから、目の届くところにいてくれ」
とでも言いたげなジェスチャーを繰り返し、涙も流せない眼で泣きそうになってこちらを見るのである。
悔しいが、あの瞳を踏み越えることはできそうになかった。

そんなこんなで夕食を食べた後、部屋にアポロンがやってきた。
胸に『何かあったら遠慮なくこいつに言うこと　ｂｙフェンネル』
と書かれた紙が貼ってあったので
ついつい「新聞が読みたいです」と口走ってしまい、
頭を抱えて苦悩するアポロンをなだめ、そのまま他愛もない会話を始めてしまった。
言葉が話せなくとも、意外に意思の疎通は楽であった。思いがけず会話は弾み、
アポロンが一礼して部屋を出て行く頃には、辺りはすっかり暗くなってしまっていたのである。
仕方なく眠いのも我慢し、夜更け時に逃走方法を考えているわけだ。

「んー……」

ふとすれば落っこちそうになるまぶたをこする。眠ってしまいたい衝動を必死にこらえる。
アイナは自分の部屋の柔らかなベッドを思い出してため息をついた。家にいたなら、今頃は夢の中にいるであろうに。
そこまで考えて唐突に思う。

今なら、フェンネルも寝ているのではないか？

思いついたら行動は速かった。持って行かねばならない荷物など何一つない。
アイナは音が立たないよう慎重に扉を開き、辺りに人影がないことを確認して部屋を出た。
ランプは持っていかなかった。漏れ出る明かりで気付かれる可能性がある。
暗闇に十分目を慣らし、抜き足差し足で階段を降り始める。
広い家ではあったが、アイナの自宅はまだ広い。間取りを覚えるに苦労はなかった。
何の妨害もなく最後の段まで降り終え、アイナが静かに顔だけを出して廊下を覗き込み――

「……」

絶句した。
廊下では、アポロンが崩れていた。

どういう理屈でくっつき、関節としての役割を果たしていたのかは知らないが、
とにかく磁石のように吸い付き合って体を構成していた大小の石が廊下に足の踏み場もないほどばらばらに散らばっていた。
踏まないように注意を払いつつも急いで駆けより、眼球になっていたらしい顔の

青い宝石を抱え上げて揺すってみる。反応はない。
「アポロンさん！？アポロンさんっ！？しっかりしてください！」
さっきまであんなに元気だったのに。どうして。
ぴくりとも動かない宝石に知らず涙がこぼれ落ちそうになる。
アポロンが助けてくれなければ、自分は今頃どうなっていたのだろう。死んで欲しくない。
「アポロンさん……っ！」
「どうかしたかの？できれば夜中に大声は出さないで欲しいんじゃが」
振り向くと、眠そうに目をこするフェンネルの姿があった。
柔らかそうな金髪のてっぺんが軽く跳ねている。仇であることも忘れ、アイナはフェンネルに飛びついた。

「フェンネルさん、アポロンさんが、アポロンさんが！」
「アポロンがどうかしたかの」
「見てわからないんですか！？」
顔面に叩きつけるような調子でアイナが宝石を突き出す。
フェンネルは眠気も吹き飛んだようで、しばし宝石とアイナの泣き顔を交互に見比べた後、
「ああ……驚いて当然かの。ちょっと待っておれ」
宝石をアイナからひょいと奪い、返す腕で天井高く放り上げたフェンネル。
アイナが目をむくのを横目に見やりつつ、重力に引かれる宝石に向かって右手を突き出した。
五本の指が、まるで影絵をするようにデタラメに曲げられていったかと思えば、

きいいいいいいい……！

青い宝石が内部から白い光を放ち、ぴたりと空中に静止した。

「！？」
「……魔法を見るのは始めてかの？　いや、そうじゃろうな」
驚くアイナの目の前で、今度は散らばっていた石達がかたかた震え出す。ほどなくして浮き上がった。
真っ先に浮き上がった石には、大きな穴が空いていた。アポロンの頭だ。
ふよふよと漂い、浮いている宝石を穴に収めた石に続いて
胸、肩、二の腕と同時に腹部、肘と上から順に石が組み合わされ、かちんかちんと人の形を取っていく。
数秒もしないうちに完全な人型となったアポロンは、言葉もないアイナと平然としたフェンネルに小首を傾げた。
「……」
「簡単に説明するとじゃな、アポロンは太陽の出ている明るい間しか動けん。
　曇り空や部屋の中が暗い分には問題ないのじゃが、夜になるとああして崩れる。
　私が魔法をかけるか、朝になるまではただの石じゃ」
フェンネルの説明に、アポロンは納得したように頷いた。そしてその場に寝転んでしまう。
「というわけじゃ。別に病気じゃないから安心して良いぞ。
　それじゃアポロン、騒がせたの。おやすみ」

……がららっ。

いきなり崩れたアポロンの前で震えているアイナの肩をぽんと叩き、
「おんしも夜更かしはいかんぞ。トイレは突き当たりを右に行ってすかさず左じゃ。おやすみ」
フェンネルは何事もなかったように自室らしき部屋へと消えて行った。廊下にアイナだけが残される。

次の日の朝。エプロン姿もすっかり見慣れたアポロン手製の朝食で空腹を満たし、
アイナはぼんやりとリビングの空間に目をやっていた。
思い出すのは昨晩の魔法と今後への不安、逃亡方法が見つからないことへの焦り。
逃げたところで、無事にふもとに辿り着けるかどうかもわからない。
考えたくはないが、ふもとの人間が自分を受け入れてくれるとも限らない。
さんさんと光を放つ青い空を恨めしげに見つめていると、
「耳がー、耳がー、エルフの尖ったみーみーがー、あらよいしょ、かーゆーいー、っとくりゃあ」
妙な歌を口ずさみながらフェンネルがやってきた。
アイナが身を強張らせたのを悟ったのか、「まだ眠いかの？」と軽口を叩きつつ揺り椅子に座る。
手には細長い棒が握られていた。銀色の輝きから金属製だろうと悟ったが、細部まではわからない。
視線にも頓着せず、フェンネルはそれを尖った耳の中に突っ込んだ。
耳掃除だろうか。綿棒のかわりにしては、あの棒は硬くて危なそうだが。
「消耗品を買いに行くのが面倒での。なに、慣れればこっちのほうが気持ちいいぞ」
しまった、とアイナは眉をひそめた。疑問が声に出てしまっていたらしい。
猫のように目を細めたフェンネルが気持ち良さげに耳を掘る様子を、見たくもないのにじっと見つめてしまうアイナ。
人の目は動くものを捉えるようにできている、と自分への苦しい言い訳を考えていたら
フェンネルが片目を開けてこちらを見ているのに気がついた。

「……何ですか？」
「いや、こっちの台詞だと思うんじゃが。見てたじゃろ？」
それを言われると返す言葉がない。
「ひょっとして、やってみたかったりするかの？」
純粋なフェンネルの問いかけに、アイナは顔を青ざめさせ
栗色の髪の上から両耳を押さえた。
冗談ではなかった。自分の耳は。
「ち、違いますっ！」
「何じゃ、別に構わんぞ？痛くせんしの……ほれ」
フェンネルは椅子を立つとカーペットの上に正座し、細いももをぽんぽん叩いた。
その様子を蒼白になって見ていたアイナが、バランスを崩しながらも後ろ歩きで扉に辿り着いた。
「からかわないで下さい！失礼します！」
「からかってなど……あ、おーい」

アイナは耳を押さえたまま脱兎のごとく走り去り、
洗濯物を取り込んできたらしく、布製品満載の木のかごを持ったアポロンとすれ違った。
アポロンはアイナの背中を目で追い、それから不思議そうにリビングを覗き込む。フェンネルと目が合った。
「……私、なんか言ったかの？」
アポロンは何も言わなかったが、フェンネルは軽くうなずく。
「もちろんじゃ、別に怒らすようなことを言ったわけじゃないんじゃぞ。
何って、『耳掃除してやろうか』って。そう言っただけじゃ。嘘じゃないぞ。――何？」
フェンネルの話し方は、独り言とは明らかに違った。この二人は会話ができるらしい。

「何じゃ、そういうことか。変だとは思ってたんじゃが。――いやなに、こっちの話。
しっかし、おんしも知ってたなら言ってくれれば良かったものを……
あ、すまんの、冗談じゃて」
アポロンが憤慨したように拳を突き上げ、フェンネルは冷や汗を流しつつ頭を下げた。

庭には切り株があった。正確には、土に埋められた太い丸太である。
アイナはちょうど良いとばかりにそこに腰を落ち着けていた。
フェンネルが追いかけて来る様子はない。ほっと一息、耳から手をどける。
「ふう」
外の日差しが心地良かった。別に日焼けをするのが嫌いなわけではないし、
室内でじっとしているよりは庭にいたほうが楽しいかも知れない。
木から木へと飛び歩く鳥の一羽を適当に選び、気まぐれに目で追っていると
背中のほうからのしのしと土を踏みしめる音が聞こえてきた。アポロンだ。
目が合うと軽く会釈し、家の陰へと消えて行く。そしてすぐに戻ってきた。
右手には自らの体よりも角張った石、左手には彼の図体にあつらえた巨大な斧。
アイナが自分を見ていることを察し、慌てて首を横に振ったが
「大丈夫ですよ、武器ではないんですよね」
いい加減アイナもその気弱さに慣れ始めている。
軽く微笑んでみせると、アポロンも安心したようにアイナの隣に腰を下ろした。

どうやら、石は砥石だったらしい。しょり、しょりと小器用に斧の刃を研ぐアポロン。
「何の斧なんですか？」
眺めていたアイナが口を開く。アポロンは家の陰を指差した。
ちょっとした後付けの屋根の下に、手頃な太さの丸太が大量に積んである。
「……ああ、薪割り用ですね」
アポロンは頷いた。そうしてよそ見をしている間にも、刃物を扱う手を止めない。
間違って刃に触れても、彼の指は傷付きそうになかった。そういう余裕があるのかも知れない。
石はあらかじめ濡らしていたらしい、しょり、しょりと水研ぎを続けるアポロンを眺めていたアイナが
「私にも何か手伝えることはないですか？」
言った。言い、言った自らが一番驚いたようだった。両手で口を塞ぐ。
そんなアイナをアポロンはゆっくりと見上げたのち、少しして薪置き場を指差した。
「え……あ、薪？」
戸惑うアイナに、足もとに落ちていた小枝を拾って、丸太の上に置くアポロン。アイナが手を打つ。
「……ああ、持って来いってことですか」
こくり。
「わかりました」

どうしてこんなことを言い出したのかはわからないが、どうせ退屈していたから構わない。
深く考えず、低い背をめいいっぱい伸ばしてアイナは薪を掴む。

とりあえず手頃に五本ほどを抱え、アポロンの元へと歩いていく。
家では元傭兵の父に簡単な体術を仕込まれていたアイナは、貴族の娘にしては力がある。
五本程度なら軽いものだった。指示された場所に薪を並べ、次を取りに走り出す。
「……やはり、五本くらいは大したことないですね」
今度は十本を胸に積み上げてみた。重さはさほどでもないが一本一本が不ぞろいのため、
積み上げた薪を運ぶにはバランス感覚が要求される。
「お……っとと……と」
先ほどよりもたついたが、どうにか運ぶことができた。小さな達成感がこみ上がってくるのを感じた。
えへへ、と笑いつつ、三たび薪置き場の前へ。慎重に十五本を抱え込む。
「うわ……」
今度はさすがに無理をしすぎたか、とアイナは自分の失敗を悟る。
高く組まれた薪は不安定で、重さもそこそこになっていた。酔ってもいないのに千鳥足になるアイナの足取り。
あわわわわ、と上だけを見つめて歩いていれば、それは当然下への警戒も薄くなる。
お約束とばかりに石につまづくアイナであった。

がらごと、ごと、ぼとっ……

「あうっ……　？」
つまづきはしたが、転びはしなかった。
人として有り得はしない傾き加減で、それでもアイナは立っている。
胸の辺りが締めつけられていた。
「大丈夫かの？　無理をするものではないぞ」
首だけを回して後ろを見れば、いつの間に家から出てきていたのか

フェンネルが両手でアイナの後ろ襟を掴み、体重を後ろにかけて支えていた。
妙に腰が入っている。やせ細った体を見たときから思っていたが、非力なのかもしれない。
「あ、ありがとうございます……」
「なに、気にするでない。――アポロン、私は狩りに行って来るからの。アイナを頼むぞ」
言葉通り、フェンネルの背中には弓と矢筒、腰には剣が取り付けられている。
複雑な表情をしているアイナの横で、几帳面にもアイナが落とした薪を拾い集めていたアポロンが頷いた。
「……ごめんなさい」
手伝おうと思った頃には、アポロンは全ての薪を拾い終えている。
頭を下げたアイナに「気にするな」と言った様子で首を振り、アポロンはちょい、ちょいと丸太を指し示した。
何をしてほしいかは予想できる。
「薪割りのお手伝いですね」
アイナは詰んである薪のそばに屈むと、一つを丸太の中心に立てた。
屋敷で見たことがある。
アポロンは嬉しそうに頷き、研いだばかりの巨大な斧を軽々と振りかぶった。
ぱこーん。

第四話「困惑」

割り終えた全ての薪を所定の位置に収め、アイナは満足げに作業の成果を見つめていた。
整然と並べられた、四つ割りの木。割ったのはアポロンだが、運び並べたのは自分だ。
こういう達成感を味わったのは久しぶりの気がする。
「頑張ったなあ」
笑顔でうんうん頷いているアイナの肩に、ごつい手がぽんと置かれた。
「……あ、アポロンさん」
終わりましたよ、と続けようとしてその言葉は途切れた。
アポロンは長い棒を差し出していた。材質は細い竹で、先端に糸が取り付けられ
他のものに絡まないようぐるぐる巻きつけられている。糸の先には湾曲した針。釣り竿だ。
もう少し太目のものをアポロンは逆の手に持っていた。使えということだろうか。と、いうことは。
「釣り、ですか？」
こくり。
アポロンは頷き、そして「行きたくないか？」というジェスチャーか、可愛らしく小首を傾げた。
「い、い、行きます！」
鼻息荒く宣言するアイナ。釣りに誘われるなんて、十四年生きてきて初めてだ。

器用に岩壁を削り上げて作られた大きくて急な階段を、慣れた様子でのしのし降りていくアポロン。

自分の釣り竿と二人分の荷物を持ち、その代わりアポロンの肩に乗せられているアイナ。
「家の近くにこんな谷があったのですね」
くるくる辺りを見渡しているうちに、崖の底――澄んでいるが流れの急な川に辿り着いた。
海に行くものかと思っていたが、ここで釣るらしい。

肩からそっとアイナを降ろし、アポロンはてきぱきと準備を始める。
アイナが危なっかしく竿から針を外し、巻きつけた糸をほどくうちにアポロンはさっさと竿の準備を済ませて荷物から餌(えさ)取り出していた。
「あの、餌は……」
アポロンが差し出したのは、昨日のスープに入っていた小麦だんごだ。小麦粉を練って丸めたもの。
ミミズか、虫か、とにかくそういうものを想像して顔をしかめていたアイナは
その生き物ですらない餌にきょとんとしてしまう。
「それでいいのですか？」
こくりと頷いたアポロン。見本のつもりか、率先して小麦だんごをちぎり
曲がった針の先に、粘土を盛るように刺しつけた。
アイナが見よう見まねで同じようにすると、アポロンがそっと手を取ってくれる。
「え？」
アイナの取りつけた餌の位置を微妙に調整し、針の先端を隠す。
なるほどとアイナは感心した。針が見えていては、釣り餌だと魚にばれてしまう。

ぽちゃっ、ぽちゃっ。

水面に二つの細長いウキが浮かぶ。

アイナは胸の高鳴りを抑えるのに必死だった。釣りなど初めてだ。
釣れるだろうか。釣れないだろうか。
手近な丸石を腰かけに、どきどきする胸をかきむしるようになでていると、
「……？」
ウキが沈んでいる。半分ほど水につかっていたウキが、今は先端まで呑まれていた。
何か壊したのだろうかと首をひねっていると、隣のアポロンが慌てたように自分の釣り竿をくいくい揺らしている。
「え……あ、ちょっ、まさか、かかってる！？」
まさか、こんな簡単に釣れるものなのか。
その様子に当たりが来たことを察し、さらに大慌てでアイナが竿を引き上げるが、
「……あ」
手元に戻ってきた針には、餌がなかった。
アポロンがかいがいしく世話を焼こうとするが、それを丁寧に断って自分で餌をつけてみる。
「針先が、見えないように……と」
今度は上手くいった。見ていたアポロンも頷いてくれる。再び水に放った。
「ごめんなさい、今度は釣りますから」
申し訳ない気持ちを感じてうつむくと、アポロンはアイナの頭をそっとなでる。
硬く、冷たく、痛みさえ感じる手であったが、その優しさが嬉しい。
そう言えば、アポロンが自ら触れて来たのは、自分を運んで移動する時だけだった気がする。
「ありがとうございます、頑張ります」
アイナがアポロンに馴れ始めたように、アポロンもアイナに馴れ始めてくれたのだろうか。
そう考えると少しだけ嬉しくなり、少しだけ不安になる。

そんな人間――もといエルフではないと思うが、もしフェンネルが船を沈めたあの時のように
何らかの方法で自分を殺そうとしたなら、アポロンはどうするのだろうか。
どう考えてもアポロンはフェンネルにつくだろう。付き合いが違う。この者達はいつ自分をどうしようとおかしくないのだ。そんな者達に心を許していいものだろうか。

ばしゃ、ばしゃしゃっ――

ふいに聞こえた激しい水音に顔を上げると、アポロンが糸を手元に寄せていた。
その糸の先に、手のひらより一回り大きな魚がぶらさがっている。
さっきまでの暗い考えも忘れ、アイナは歓声をあげた。
「すごい、釣れた！すごいですね、アポロンさん！」
アポロンは一瞬ぽかんとしていたが、すぐに照れたように頬を掻いた。
「すごいな……入れ食いなんですね、ここ」
昔、本か何かで、釣り人が多いと大きな魚の警戒心が強まると読んだことがある気がした。
その通りだとしたら、ここの魚は本当に餌を警戒していないのだろう。
そしてそれは、釣り人が極端に少ないことを意味している。
この竿はフェンネルの使うものに違いないだろうから、恐らくアポロンとフェンネルだけのはずだ。
興奮を伝えるように竿を握り直すアイナ。こうしていると、水底に映る影が全て魚に見えてくるから不思議だ。
今にも餌に魚が食い付いている気がする。落ちつかねば。もう失敗はしたくない。

「……」
アイナはウキを睨みつける。ウキは動かない。
「……」
それでもなお睨みつける。やはりウキは動かない。
「……」
負けずに睨みつける。ウキは揺れたが、沈まない。
「……釣れないですね」
簡単ではない、とアイナは苦笑してみせる。ウキが沈んだ。

ちゃぷん。

アポロンが再び慌て出す。今度はどうしたとウキを見れば、ウキの先端は引っ込んだり出たりを繰り返していた。
「うわ、うわわわわわ、よそ見してる時にぃーっ……」
今度は落ちついて、慎重に糸を引き上げる。
意外にあっさりとそれは顔を出した。アポロンの釣ったものより小さかったが、魚が一匹かかっていたのだ。
「っ……！」
びちゃりと河原の石の上に落ちるや否や元気良く跳ね始めた魚を、アイナは頬を紅潮させて観察していた。
「……釣れた」
アポロンが釣れた時にはあんなに喜んだのに、今はどう騒いでいいかわからない。
唇をわなわなと震わせながらアポロンを見る。アポロンはうんうんと頷き、アイナの魚に手を伸ばしていた。
針を外そうとしているらしい。片手で制して自分で魚に触ってみる。ぬるぬるしていた。
「うー……」
口元を押さえつけ、一生懸命針を外そうとするが
そもそも釣り針とは外れにくいようにできているものだから、素人

がそう簡単に外せはしなかった。
両手の指をしばしわきわきさせていたアポロンは、それを手伝ってやるかどうか逡巡し、
やがてやり場のなくなっていた手を自らの釣り竿に戻した。
針が外れる頃には魚はすっかり生気を失い、そうしている間にアポロンは五匹ほどを釣り上げていた。

「おー！大漁じゃのー」
夕刻。オレンジ色の光に目を細め、ロッキングチェアに揺られていたフェンネルは
バケツの中の大量の魚に目を丸くした。
「これだけあると腐るの、あとで燻製にでもしておいてくれ、アポロン」
台所にバケツを置いたアポロンが、何か言いたそうにフェンネルを見下ろした。
するとフェンネルがそっぽを向いてしまう。何事かと見守るアイナの前で、
「……その、じゃな。強く引きすぎて弓がぶっ壊れての。――いや、もう直したぞ。
本当じゃってばな、確信犯とは人聞きの悪い……
私だって本気で力いっぱい引けば弓くらい壊すわ！……何？うるさい、魔法は疲れるんじゃ。
剣は手入れが面倒だしの」
うそ臭いほど老いた口調に反した子供っぽいしぐさで言い訳をつぶやくフェンネル。
勝ち誇ったようにアポロンが腕を組んだ。夕日の中でもそれとわか

るくらい、みるみるフェンネルの顔が赤くなっていく。
「何じゃと！？」
そのトマト顔はぐり、とアイナに向けられ、
「おんし、魚釣ったのか？」
「え？　……ええ、五匹くらいですけど。小さいのを少し」
「五匹……」
スポットライトに照らされ、ずるずると崩れ落ちるフェンネル。腰に手を当ててふんぞり返るアポロン。
何を言っているかはわからないが、予想はできた。
「ええい、うるさいの！　そうじゃとも、私は狩りも釣りも下手じゃとも、えーそうじゃとも！
　文句があるなら態度で示せ！なんなら私を煮込んで食うか！？」
アポロンは手の平を上に向けて「やれやれ」のジェスチャーを作った。かぶりを振る。
「……やかましいっ！　誰が食べるとこ少なそうじゃと！？
　ゴーレムの分際でマスターにふざけた口を聞くな！」
腕をばたばたと振り回すフェンネルをとうとう無視し、アポロンは夕食の準備を始めてしまう。
エプロンをつけ始めた石人形に「無視するなぁ……」とつぶやいた後、フェンネルはうらめしげにアイナを見た。
「……なんじゃ、おかしいなら笑えば良かろ。おんしまでそんな顔するか」
言われて初めて、アイナは自分が笑いをこらえていることに気がついた。

台所ではアポロンが武術の演舞のような動きで料理の仕込みを続けている。
うっかり手伝おうとすれば殴られてしまいそうだ。仕方なくエプロンのフリルを眺めていたアイナを

手招きで呼ぶ人物がいた。当然、フェンネルだ。
「アイナ、ちょっと来てくれんかの」
アイナは身を固くする。とうとう自分を殺すのだろうか。
できればアポロンの近くにいたいのだが。特に理由はないが、フェンネルと二人きりになるよりは安心できる。
「……何となく私を嫌ってるのはわかるがの、別に取って食いはしないから。
　来てくれんか？プレゼントじゃ。悪いもんじゃないぞ」
そう言ってフェンネルは手に持っていたものを差し出してみせた。
洋服だ。アイナが船で着ていたものに近いデザインの、白いブラウスに赤紫のスカート。リボンもある。
「おんしが着てたのを参考にしたんじゃ。それだと大きかろ？こっち着てみんか？」
「……それなら、ここで着ても良いのでは」

がたーん！

アポロンの手つきが目に見えて狂った。フェンネルが笑う。
「と、言うわけじゃ。信用してくれないならそれでも構わんが、
　ここで着替えたほうが危険じゃぞ。コショウとか油とかがわんさか飛んでくる」
「……」

そして通されたフェンネルの私室。アイナは少なからず感心していた。
家ではドレスを一つあつらえるだけで、職人がせっせと寸法を測って回るというのに
フェンネルはアイナの着ていた洋服を少し測量しただけで
そんな職人の作とさして変わらない出来映えの服を繕ったのだ。

絹の滑らかな肌触りとは違う、少し固めのごわごわした感触が新鮮で心地良い。
「どうじゃ、ぴったりじゃろ？　百歩くらい譲って狩りも釣りも下手かも知れんがな、
裁縫だけはそこらのエルフにゃ負けない自信があるんじゃよ。
ま、貴族のお嬢様に木綿の服をあつらえるのは抵抗があったがの」
「……あれ？私が貴族の生まれだと話した覚えは」
「何百年と生きておるがの。
絹のブラウスなんぞ着ている奴を見たのは、私はおんしが始めてじゃ」
「――なるほど」
鏡を見つつケープの位置を直し、リボンを結んでいたアイナは後ろでからから笑うフェンネルを鏡ごしに見やった。

「そう言えば、ゴーレムって何ですか？」
「ほえ？」
「さっき言ってたじゃないですか、アポロンさんに『ゴーレムの分際で』って」
「あー……なんて言えばいいのかの。魔法で作った擬似生物、かの？それをゴーレムと言うんじゃ」
「擬似生物……？」
「うむ、生物であって、生物でない。ごくごく簡単に言えばそんなところじゃ。本当はもっと面倒な定義があるんじゃがの」
「魔法で作ったってことは、アポロンさんの生みの親はフェンネルさん？」
「そいつは違うの。アポロンは私の母親が作ってくれたものじゃ。誕生日のプレゼントにな。
……いつの誕生日だったかは忘れたがの」
「へえ……」
「あいつがいなければ、今頃私は飢え死にしとる。

狩りも釣りも母に教わったんじゃが……どうも覚えが悪くてのお」
神はニ物を与えないらしいからの、と笑うフェンネル。
笑い声に少し自慢げな響きがあった。
「良い母君だったのですね」
「ああ……　ときどき私やアポロンを困らせてくれたがの、いい人じゃよ。
私にはもったいないくらいじゃった」
「母君は今どちらに？」
「死んだよ」
あまりにさらりと出た発言だったため、アイナにはその意味を理解するのに時間がかかった。
フェンネルは薄ら笑いを浮かべたまま――そしてどこか寂しそうに――窓の外の空を眺めていた。
橙と藍が絶妙な色合いに交じり合った空が切り取られ、壁に飾られている。
「正確には、死んでいるだろうって決めつけておるんじゃがな。私が」
「……生きてるかも知れないんですか？」
「限りなく可能性は低いがの。『せめて好きなことをして死にたい』っつって
寿命もつきようって老体でこの家を出て……それっきりじゃ。どこぞでくたばっておるんじゃろ」
「……」
アイナの複雑な表情に気付いたのか、フェンネルは肩をすくめて人当たりの良い笑顔を作る。
「暗い話になってしまったの、許してくれな。さ、戻ろう」
柔らかい金髪をとかしながら部屋を出て行くフェンネル。アイナがぼそり、とつぶやいた。
「……生きてるかも知れないなら、それでいいじゃないですか」

家のことが恋しくなってきたのだろうか。
「お父様……？」
父に起こされた気がして、喜んで目を覚ましてみれば夢だったらしい。
二度寝をするのもなんだったので窓を開けると、下ではフェンネルとアポロンが庭に出ていた。
早起きなものだと思いつつ、外に出ることにする。今日も天気は良い。

「おお、アイナ、おはよう」
「おはようございます」
フェンネルが陽気に笑い、アポロンが手を振った。
アイナは複雑な顔で挨拶を返す。この二人を心から信用することも、嫌いになることもできずにいた。
「何をしているのですか？」
「アポロンはこれから水を汲みに行くところ。私は朝の体操じゃ」
歳を取ると朝が早くての、平然とそう語るフェンネル。
いかにエルフが見た目で年齢を判断しにくい種族とはいえ、とてもそんな長生きをしているようには見えないのだが。
アイナの姉と言っても通じそうな、若々しい見た目なのに。
「どうかしたかの？」
「いいえ……　ずいぶん年寄りくさいことを言うな、と」
「長生きはしとるからの。まだ若いのも事実じゃが」
「矛盾してますね」
「それを言うな。……これでも、おんしらの年齢に換算したら二十歳よりちょっと上程度なんじゃぞ？」
「そうなんですか？」

「そのはずじゃ。――えーと、おんしらが百年生きるとして……二十歳なら五分の一か。
私らがざっと二千年生きるから……うむ、二十三歳くらいじゃな。って、何じゃ、私もまだまだ若いのお！」
一人で嬉しそうにフェンネルが手を叩き、
アポロンが何か言ったらしく「何じゃと！一の位は切り捨てがセオリーじゃろう！」と食ってかかられていた。
「……でも、そのくらいの歳にしてはそんな喋り方なんですね」
「ま、それでも四百年は生きとるからな。
最初は冗談半分で始めたんじゃがの、今ではすっかり慣れてしもうた」
「え？　歳をとったら、自然とそういう喋り方になるのではないのですか？」
「いや、それはないと思うぞ。個人差はあるじゃろうがの」
フェンネルはおかしそうに笑った。頭では「笑ってばかりいるエルフだ」などと思っているが
体のほうは照れたような笑顔を返している。どちらが自分の本心なのだろう。
「どれ、おんしも私に付き合わんか？　さすがに今回は、アポロンの手伝いもできんじゃろ」
アポロンは鉄の六尺棒の両端に巨大な陶器の水がめをぶら下げて肩にかけていた。
あのような圧倒的物量にアイナができることなどたかが知れている。
頷くしかない。

仕方なくフェンネルに付き合い、その動きを真似て柔軟体操を行っていると
「……ずいぶん、柔らかいんじゃな。体」
前屈を終えたところで声をかけられた。アイナはぺたりと手の平が地につくが

フェンネルは指先を触れさせるのがやっとのようだ。少し優越感を抱く。
「何か運動でもしてるのかの？」
「父に剣術を教わってました」
「剣術？――ほお。そうか、剣術か」
腕を組んで頷くフェンネル。しばらくそうしていたのが、何を思ったか急に腰の剣を抜く。
「！？」
ついに殺すのか、と身構えるが、フェンネルは気にした様子もなく近づいて来る。
アポロンのような配慮がない。突然信用していない相手に武器を抜かれたらどうなるか、考えたことはないのか。
「のお、アイナ。これの使い方を教えてくれんかの？」
「――え？」
アイナの足が止まった。怯えが驚きに変わる。
「知らないで持ってたんですか？」
「かっこいいじゃろ？　……でも高い金を払って買った剣じゃからな。
　いつまでも我流で振っては手入れだけ繰り返す、ってのも面白くないんでの」
「なるほど」
アイナは剣を受け取った。凝った装飾の施された、かなり細身のバスタードソードだ、
本来この剣は腰に差すのではなく背中に負うものなのだが、剣についての知識がないのだろう。
一応真剣だが、アイナが訓練に使う木剣より軽いかも知れない。
刃を活かせずに棍棒（こんぼう）として使うのであれば、これ以上ないほど威力のない武器だ。
使い方を覚えたいと言うのもわかる気がする。
「軽いんですね」

「非力なもんでの。こればかりは仕方がない、血の成せる技ってやつじゃ」
「エルフが非力って本当だったんですね。
――それでは。両手で握る時は、左手の小指と薬指に力を入れてですね」
剣を構えてみせるアイナ、それを真剣に見つめるフェンネル。
水がめを冷たい水で満たしてようやく帰ってきたアポロンには、さぞ仲の良さそうな二人に見えたことだろう。

フェンネルは一人庭に残って
「剣先が地面を向かないよう振りかぶって！真っ直ぐ振る！
右手を肩の高さに！左手を胸の高さに止める！
ほんで左手をへそから拳一つ離し！剣先を敵の喉に突きつけて構える！
剣先が地面に向かないよう振りかぶって！真っ直ぐ――」
もくもくとアイナに教わった基本の型を繰り返していた。
いちいち大声で復唱する声がとても嬉しそうである。新しい遊びを教えてもらった子供のようだ。
「……元気ですね、フェンネルさん」
リビングの窓からそれを見たアイナが言い、アポロンが自分の頭を指差した。
人差し指を『くるくる』と回し、ついで五本の指を伸ばして『ぱー』を作る。
「くるくるぱー……って、いいのですか？」
アポロンは「聞こえてないなら何を言っても良いのだ」と主張するように力強く頷き、アイナに茶を出す。
木製のソーサーに乗せられたカップには、覚えのない香りの茶色いお茶が入っていた。

親切なアポロンがミルクと砂糖を忘れるはずがない。そのまま飲むのだろう。
ぬくい茶を口に運ぶ。不安そうに首を傾げるアポロン。
「……ん、美味しいです」
率直な感想だったが、アポロンは嬉しそうに頭を掻いた。
少々渋みが強く、砂糖を入れない紅茶のようであったが、不思議と飲めないことはない。
のんびりと味を楽しんでいると、汗をふきふきフェンネルがリビングへと戻ってきた。おかしいくらい晴れやかな笑顔だ。

「ああ……なんだか百年分くらい強くなった気がするのお。今なら熊にも勝てる気がするわ」
恍惚(こうこつ)とした表情で怪しい笑いをするフェンネルに、またもアポロンが何か言ったらしい。
「ええい、気のせいなのはわかっておるわ！いちいちツッコミいれるでない！」
のっしのっしと石造りの床を踏みしめてフェンネルの剣から逃げ回り始めた。
斬られても剣のほうが折れるだけだろうに。こんなやりとりで日常を過ごしているのか。楽しそうだ。
「……覚えておれ、いずれお前を真っ二つに切り伏せてやるからの。さて」
フェンネルはアイナの向かいに座り、人差し指を招くように動かした。
「何ですか？」
「なに、私だけ教わりっぱなしと言うのは何だか悪い気がしての。ひとつ面白いことを教えてやろうと思ってな」
断る間もなく、フェンネルは自分の右手の指を複雑に曲げて差し出した。
「やってみよ」

「……？」
「違う、もうちょい中指が下じゃ。そうそう。それじゃ、次はの」
わけもわからないままに指を何度も曲げさせられ、変な形を作らされた。

薬指を手の平と垂直に、中指を手の平と平行に曲げ、他の指を伸ばす。
次に親指を折り、その上に人差し指と中指をかぶせて薬指と小指をそろえる。
今度は握った拳の中指だけを立て、続けて人差し指もそろえて立てる。
最後に、五本の指を勢い良く全て伸ばす。
「……あの、これ、何のおまじないですか？」
「まあ見とれ。今のは全部覚えたの？それを繰り返してやってみるんじゃ」
有無を言わさぬ口調。憮然としながら教わった通りに繰り返すと、もう少し速くと注文をつけられた。
それならと素早く指を動かすと、その調子じゃとほめられた。少し嬉しいと思ってしまう自分に嫌悪感を覚えた。
一連の動きをニ、三度繰り返させられたところでフェンネルがにこりと笑う。
「うむ、筋がいいぞ。それじゃあ仕上げじゃ、左手を出してみよ」
「……？」
「その左手を良く見て意識を集中させると同時に、右手に神経を集中させるんじゃ。
特に重要なのは右手に集中することじゃぞ。そしてそのまま、さっき教えた通りに指を動かしてみよ」
「はあ。……左手に意識を集中させて……右手に神経を集中させて……」
つぶやきつつ、先ほどの手順を繰り返してみる。

薬指を手の平と垂直に、中指を手の平と平行に曲げ、他の指を伸ばす。
次に親指を折り、その上に人差し指と中指をかぶせて薬指と小指をそろえる。
今度は握った拳の中指だけを立て、続けて人差し指もそろえて立てる。

きいいいいいいい……！

最後に、五本の指を勢い良く全て伸ばす。
変化はすぐに現れた。握り拳を作っていたアイナの左手が、まばゆい光を放ったのだ。
「きゃあああああああっ！！！？？？」
悲鳴をあげてひっくり返るアイナ。背中をしたたかに打ちつけたが、痛みを感じている場合ではない。
左手がランプの火のように輝いている。痛くもかゆくもないが、握っても開いても振っても何をしても消えない。
どうしたのだ。左手はどうなってしまったのだ。自分がやったのか。
「そう驚くこともなかろうに……ほれ」
フェンネルが物凄い速さで右手の指を動かしたかと思えば、光は消えた。
興奮のために息を荒くし目を丸くし、どうにか右手でスカートを押さえてひっくり返っていたアイナをそっと抱き起こす。
「面白いもんじゃろ？」
「なっ、なっ、なっ……な、な、なんなんですか、今のは！？」
「魔法じゃよ」
大したことでもなさそうに言うフェンネル。アイナは愕然とした。
魔法とは人間には使うことの出来ない、亜人と怪物にのみ許された技術ではなかったのか。
「わ、私、人間ですよ？」

「おんしらは人間には魔法が使えないと思い込んどるがの、
たまにおるんじゃぞ、才能のある人間が。
魔法の才能がある人間に、人間に魔法を教えるような酔狂な亜人がおれば
人間にも魔法を使うことができる。まあ、酔狂な亜人も魔法の才のある人間も少ないんじゃが」
言われてみれば大陸では人知を超えた能力を持ち、
それで数々の奇跡を起こしてみせる超能力者の存在が玉石混交に確認されている。
魔法の才のある人間が、師となる亜人に出会って手に入れた魔法。
それが超能力の正体なのか。
「……私に、才能があったと？」
「飛び切りじゃな。なんでおんしが人間の世に生まれたのか不思議でならん」
朝食を運びながら気遣わしげにアイナを覗き込むアポロンと二、三言葉を交わして
すぐに言い負かされたらしく、フェンネルは面白くなさそうに椅子を直し始めた。
「どれ、ご飯が終わったらもう少し教えてやろう。
今のままじゃ、光らせることはできても消すことはできんからなあ」
差し伸べられた手につかまって立ち上がったアイナは、呆けたまま頷いた。

第五話「来客」

草の陰に身を潜めて弓に矢をつがえたアイナは
ぴょこんと顔を出し、獣道を挟んだ向かいの草むらを覗き込んだ。
ブラウスの上に簡単な上着を羽織り、下はスカートではなく裾の長い頑丈なズボン。
リボンも普段とは巻き方を変え、薄い栗毛をポニーテールにまとめている。
反対側の草むらでは、同じような格好をしたフェンネルが
やはり同じように弓の準備をしていた。
親指と人差し指で輪を作って小首を傾げるアイナのサインに、親指を立てて返答する。

天を覆う大量の木の葉が、その隙間から光をたらす裏山の獣道。
草木が深くなり、自然と道が途切れた突き当たりにその者はいた。
ずんぐりとして、それでいて曲線的な印象を抱かせない筋骨隆々とした体、
針のようにちくちくと生え揃った毛並み、豚を思わせる大きな鼻。
音を立てないよう慎重に草むらから体を出し、アイナとフェンネルは弓の弦を引き絞る。
「……1」
アイナの声に反応したのか、その者は草を食むのをやめた。
「……2の」
フェンネルの声に反応し、その者はくるりと尻を向けていた方向に
――アイナとフェンネルに向き直る。
「「……3っ！！」」
二人が同時に右手の握力を緩める。弦が唸りをあげ、空気を切り裂いて二本の矢が放たれた。

矢の一本は狙い違わずその者の脇腹へ、もう一本はその者の背後の木へ突き刺さる。
肉をえぐられる痛みにその者は悲鳴をあげたが、対峙する二人からしてみれば
それは自らに傷を負わせた者に対する、怒りの雄叫びにしか聞こえなかったに違いない。

――ぶもおおおおおおっ！！！

背を向けて走り出したアイナとフェンネルを憤怒の形相で睨みつけ、その者――体長二メートルを超える巨大なイノシシは、足元の草を勢い良く掘り返した。

アポロンは薪割りの台にするために埋めてある丸太に腰を下ろし、スープに使った雑穀のもみがらを庭にまいていた。
こうすると、もみがらを食べるために小鳥達が寄って来る。
餌付けの習慣をつけておくことで、家の食べ物を荒らされるのを防ぐ――とフェンネルには説明しているが、
実際は取り立てて趣味のないアポロンの暇潰しだった。
アイナが手伝ってくれるようになってから、釣りが普段より早く終わってしまうようになっていた。

ちちち、ちちちち、ちちちちち、さえずりながら細かな食料を突っ突く小鳥達に
友達の少ないアポロンがその切ないロンリーハートを癒されていると、

――ぶもおーーーーっ。

裏山のほうで妙な鳴き声が聞こえた。そこそこの音量だったため、小鳥はあっという間に飛び去ってしまう。
小さな羽を無数に浴び、アポロンはしばしあっけに取られたようにそちらを見て
やがて納得したように手を打った。フェンネルが何かやったのだろう。
今日は狩りにアイナも連れて行っていた。彼女が怪我をしなければ良いのだが。
危険がないことを悟って舞い戻ってきた鳥達にたかられつつ、アポロンはぼんやりとそんなことを思った。

「フェンネルさんっ、少しは当ててください！」
「おんし、必死に頑張ってるエルフにかける言葉がそれか！？」
言いながら放った矢は、まるで見当違いの方向にすっ飛んでいった。
舌打ちまじりにアイナが矢をつがえ、足を止めて振り向く。

――びょう、どっ！

矢はイノシシの太い前足を捉えたが、イノシシの突進が弱まる気配はなかった。
乱立する木々が横幅のあるイノシシの通行を邪魔し、二人に味方してはいるものの
それで二人が有利になっているかと言えば、そうでもない。ハンデがあって互角の勝負である。
イノシシはやじりが肉を抉る痛みも意に介さずに突撃を続ける。慌てて走り出したアイナに、フェンネルが叫んだ。

「アイナ！見えたぞ、目印じゃ！」
嬉しそうなその声に、やっと見えましたかとアイナも安堵する。
細い木の枝に、遠目にもそれとわかる鮮やかな赤の布が結んであった。
二人は矢筒から新たな矢を取り出しつつ、ぎりぎりまでイノシシを引きつけて左右に飛んだ。
何も考えていなさそうに勢い余って若木を踏み潰したイノシシがゆっくりと振り返り、
自らを狩りに来た人間とエルフを見据えた。

ぶもおおおおおっ！！

果たしてイノシシとはこんな声で鳴くものなのか、
アイナの知るイノシシとは違う種類なのかも知れない。巨大すぎる。
そんなことを考えつつ狙いをつけていたアイナの耳に、フェンネルがやや緊張したつぶやきが入ってきた。
「うう、怖いのお。私の人生はこれまでかも知れんな、
最期に恋愛くらいはしてみたかったわ」
「フェンネルさん、あなた週に五日は狩りに出てたんじゃないんですか？」
「射っても射っても矢が当たらんからの、みんな怒ったりなんぞせんでな。
矢が落ちたり刺さった音で、さっさと逃げてしまうんじゃ」
「……」
黙ってしまうアイナをフェンネルはひとしきり眺め、やがて言った。
「ふむ。ここは一つ、極限状態の中、新たな嗜好（しこう）に目覚めてみるかの」
「黙れ」
「そんな口調を変えて怒ることもないじゃろ、きれいなお姉さんは嫌いか？」

「ここできれいなお姉さんの首を差し上げれば、イノシシさんも私を許してくれるかも知れませんね」
「すまん、私が悪かった」
「よろしい。――では、真面目に狩りに戻りましょう。私はこんなところで死ぬ気はありませんので」
「私だってないわ。……アイナが本当にお嬢様なのかどうかを疑ってしまった
クロノガルデニアのフェンネル、ときに四百六十と少しの冬であった」
「今は初夏です」

びょうっ！

二人が図ったように同じタイミングで矢を射るが、やはりフェンネルの矢は外れる。木の欠片を散らした。
「ええい！ズルじゃ！ひいきじゃ！インチキじゃ！
どうして私の矢だけ当たらんのじゃあっ！」
「騒いでる暇があったら早く次の矢を射ってくださうひゃあっ！」
間一髪でかわしたアイナの衣服を、イノシシの硬い毛がかすめていく。
イノシシの体当たりそれ自体はかわしたアイナであったが、土から気まぐれに顔を出す木の根に足をとられ
その場に尻餅をついてしまう。ついでに尻を落としたところに石が顔を出していたから大変だ、
飛び上がるような激痛に悲鳴をあげるアイナだったが、実際に飛び上がれはしない。
そうなったらどれほど喜んだだろう、飛びかかってきたイノシシにのしかかられてしまったアイナ。
「きゃああっ！？」
「おのれ、イノシシのくせに馬乗りになるとは！アイナを放すんじ

や！」
フェンネルが鋭い瞳で弓を引くものの、
びょうっ――がすっ！！
放った矢はアイナの耳元をかすめ、地に突き刺さった。アイナの顔が青ざめる。
「フェンネルぅーっ！！」
「すまん！ホント申し訳ないっ！！」
平謝りを呪いの言葉でもって掻き消し、アイナはもがきにもがいて腰からメイスを引き抜く。
棒の先に攻撃用の突起を取りつけた殴るための武器、戦槌とも書くそれは
年端もいかぬ少女であるアイナが振り回すには違和感があるごつい装備だ。
しかし所詮は田舎の島、武器屋に行けばこれしか売っていなかったのだからしょうがない。
不自然な態勢から精一杯の力を込め、右手の槌を叩きつける。鈍い感触が腕をしびれさせた。
――ぶもおおおおっ……！
当人はあまり期待していなかったのだが、意外にもイノシシはもんどりうって倒れた。
アイナが知るはずもない知識だが、彼女の殴った耳の下――こめかみの位置は
痛覚神経の集中するイノシシの急所である。倒れるのも無理はなかった。
「こっ……やあああっ！！」
どうしてイノシシが倒れたのか、深く考える余裕などない。

さっさとマウントポジションから脱出したアイナは
勇ましくも立ち上がりかけたイノシシの眉間めがけてメイスを打ち下ろす。
両手に感じる確かな手応え。やったか、と気を緩めてしまったアイナのメイスを

ぶもおおおっ！！

イノシシは鼻で払いのけてしまう。目をむいたアイナは、次の瞬間
強烈なタックルを見舞われ
有無を言わさぬ低空飛行を味わうこととなった。
数メートル吹っ飛ばされ、地に触れてもなお転がり、木の幹に体を打ちつけてしまう。

ぼすっ。

「っ……」
呼吸を詰まらせたのはフェンネルだった。背中に感じる柔らかさに振り向けば、エルフの苦悶の表情が目に入る。
木とアイナの間に割って入り、アイナにかかる負担を軽減させたのだ。その分、フェンネルにダメージがくる。
「フェンネルさん！？」
「ぉ……おおっ……け、怪我はないかの」
「は、はい、ありがとうございま――　っ！？」
飛ぶがごとく迫るイノシシの足音に気付いたアイナ。
痛む体を叱咤し、フェンネルを抱えようとするが、うまくいかない。
イノシシがその隙を見逃すはずもなかった。
「くっ……」

ぶもおおおおおっ――！！

手負いの獣の恐ろしさを噛み締め、アイナは覚悟を決めて目を閉じる。

ぶもおおおおお――おおおおおおおおっ！！？？

まぶたを閉じた暗闇の中、アイナの耳に響いたのはイノシシの咆哮ではなかった。

聞こえたのは木々を組み、草を敷き、土をかぶせてカムフラージュしておいた古典的な罠の作動音。

――めき、めきゃきゃきゃっ……ずんっ。

「……」

「……」

イノシシは落とし穴を踏み抜いた。

ぶもー、ぶもー、と叫びつつ、かなり深く掘り下げてある穴の底から脱出しようと必死にもがく。

恐る恐る覗き込み、それでも勝利を実感できずに首をひねっていたアイナは、

背中側でフェンネルが立ち上がる気配を感じた。何やら怪しい笑い声が耳につく。背筋が寒い。

「ふっふっふっふっふ……」

フェンネルは剣を逆手に構えていた。穴の底を突く気なのは明白であった。

「本当に、死ぬかと思いました……まさかここまで使えないとは」

「これアイナ、エルフを物みたく言うでない」
ことこと、ことこと。台所からイノシシの肉の煮える音がする。
アポロンに女連中の肌が見えないようキッチンの陰に座り込み、
フェンネルとアイナは怪我の手当てを行っていた。
ぐったりした様子で尻をさするアイナの厳しい感想を、フェンネルは陽気に笑ってごまかす。
「人には得手不得手というものがあるじゃろ？エルフも一緒じゃ」
「限度があります。あの程度の腕で罠も使わずに、獲物が狩れると思っていたことが恐ろしいですよ、私は」
「おーおー、あれは見事じゃった。落とし穴というのがあそこまで効果のある罠だとは
　四百六十年生きてきて初めて知ったぞ」
「腕がないならないなりに、知恵をしぼってみようとは思わなかったのですか」
「そう怒るな、お互いに命は助かった、久々の肉料理も食える。万事ＯＫではないか」
「結果論にすぎません」
「そんな一刀両断にしてくれるでない。落ち込むじゃろうが」
唇を尖らせて腕の湿布の上に包帯を巻くフェンネル。見え見えの芝居であった、目が笑っている。
こめかみに青筋を立てて拳を震わせていたアイナだったが、しばらくすると深く息を吐き
救急箱から大きめのビンを取り出した。ふたを開けるとツンとする臭いが辺りに漂う。
「服を脱いでください」
「ほえ？」
「私をかばった時に背中を打ったでしょう。薬塗りますから」
「……ああ。それじゃ、お願いするかの」
頬を赤くしての申し出にフェンネルは優しげな笑みを返し、もぞもぞと背中の布をまくりあげた。

アイナは面白くなさそうにため息をつく。その表情は程なくしてはにかんだ苦笑いに変わった。

アイナがフェンネルとアポロンとの共同生活を送るようになって、二ヵ月が過ぎた。
「エルフが来たのは嫌だが、だからと言ってわざわざ生まれ育った島を出て行くのも癪だ」と言って
この島で暮らしている人間の集落にも何度か訪れ、次の貿易船でウィナリスに帰れるよう手配もつけてある。
集落はエルフの頼みを聞くことが不満そうであったが、フェンネルが問答無用とばかりに金を詰むと渋々承諾した。
その金の出所はどこだと聞けば、企業秘密と答えられた。その謎は今のところ解決していない。

最初の頃こそ疑ってかかっていたアイナだったが、今はフェンネルとアポロンを家族のように感じていた。
アイナは幼い頃に母を亡くしており、兄弟姉妹もいない。使用人も多いわけではない。
貴族であるがゆえに一般市民の友達はおらず、成り上がり貴族ゆえに貴族の友達もいない。
父親に愛されている自信はあったが、それでも寂しさを感じていたのかもしれなかった。
今やフェンネルとアポロンは時に親のように知らないことを教えてくれ、
時に兄や姉のように頼り甲斐のある存在であり、
時に弟や妹のように自分を頼りにしてくれる、大切な仲間だ。
ただ、そういう思いが強くなるにつれて、自然と疑問もふくらんでしまう。

どうしてフェンネルはあの時、何の罪もない人々を巻き込んで船を焼いたのだろう。

くつくつと煮えたぎる鍋に大きなさじを入れて、自分のぶんを取り分ける。
リビングのテーブルをアイナ、フェンネル、アポロンが囲んでいた。
アポロンは食事をしないものの、食卓には同席する。
木製のスプーンで肉を口に運び、ゆっくり味わって飲み込む。やはり美味しい。
「美味しいです」
いつものように素直な感想を言うと、アポロンは後ろ頭を掻いた。
はにかんでいる時の仕草だ。
そしてテーブルを人差し指でとんとんと小突く。にこにこ笑顔で鍋の実をよそっていたフェンネルが頷いた。
「残さないで食べてくれ、だそうじゃ。そうでないと、殺されたイノシシに申し訳ないからの」
「わかってますよ、感謝しないといけませんね」
アポロンは生き物を料理した日は決まってこう言う。
以前フェンネルに「植物は生き物扱いせんのかの？」と指摘され、頭を抱えていた。
「ま、ここまで美味ければ残しようがないがの。久しぶりの肉じゃー、幸せじゃー」
「私はこの家に来てから初めてです」
アイナが意地悪く言うとアポロンも面白がって何か言ったらしい、フェンネルが「何じゃと！ウサギくらいは獲ったことがあるぞ！」と騒ぎ出した。
「いいなあ、アポロンさんと話せるんですよね。それも魔法なんで

すか？」
「いんや？　何て言うかの、ほとんど何となく『そう言ってるんじゃないか』って思うだけなんじゃな。
　おんしもアポロンと二百年くらい顔を合わせてれば、そのうちわかるようになるぞ」
「そんなに生きられませんよ、私」
「わからんぞ。あれだけ正確にイノシシを射抜く化け物じゃからな、おんしは。
　案外エルフより長生きして、いずれは世界を破滅に導く大魔王に変身」
「しません。あれはフェンネルさんが下手なんですよ。
　剣だけじゃなく弓も教えましょうか？」
「つつしんで辞退するかの。おんしの訓練は厳しすぎるわ――」
フェンネルがそう言い、少し考えて首を振った。
「――あ、いや。受けようかの」
「あら？どういう風の吹き回しですか？」
アイナは面白そうに聞くが、フェンネルの表情は曇っていた。
「だっての。おんし、もうじきいなくなるじゃろ？」
アイナの微笑みが固まった。

二ヵ月はかからんじゃろ。
アイナがウィナリスにどれくらいで帰れるかと聞いたときの、フェンネルの返答だ。
その言葉の通り、もう一週間もすればクロノガルデニア＝ウィナリス間の貿易船がやってくる。
そうなれば、アイナがこの島に滞在する理由はない。

「思い出は欲しいしの。おんしがいなくなってから、肉が食えなくなるのもつらいところじゃし」
「……ええと、その」

「なんじゃ？」
アイナは少し言いにくそうにしていたが、意を決したように話し始めた。
「もう少しここにお世話になることって、できませんか？」
「……」
フェンネルは何も言わなかったが、話し始めて調子が良くなってきたのか
普段のおとなしい態度には似つかわしくない饒舌さでアイナは舌を回し続けた。
「もちろん、働きます。狩りもしますし、釣りもします。
洗濯も掃除も覚えます。何でもします。ですから、もう少しだけ置いてもらえませんか？」
「……ウィナリスには、おんしを心配してる人がいるんじゃろ？
確か、父親がおるんじゃなかったのか？」
「ですが……」
「おんしを死んだと思っておるか、生きておると思っておるかは知らん。
だが、どっちにしても悲しんでおることに違いはないぞ。
まずはそういう人を安心させてからじゃ」
「では、帰ったら改めてこちらに」
「来るな」
やや明るさを取り戻したアイナを、フェンネルは一言で切って捨てた。
息を呑んだ少女を見据えるその瞳はいつもの気安い印象がまったくない。
眼光の鋭さは、船を焼いた邪悪なエルフにこそ相応しいとすら思えてしまう。
「おんしの居場所はここではない」
「……」
「いずれ、おんしが人生に絶望するようなことがあれば、そのとき

は迎えてやる。
　しかしの、今のおんしには帰る家があり、待つ人があるんじゃ。
　……本当なら、エルフと人間は他人と称しても親しすぎる、食い合う仲じゃ。
　おんしを私のそばに置くことはできん。私がおんしのそばにいることもできん」
「……どうしても、ですか？」
「ああ」
「……そうですか」

それっきり、二人は黙り込んでしまった。
アポロンがおろおろと見回す中、無言で食事を続ける。
鍋の煮える音だけが、リビングに小さくこだましていた。

「本当に行くんですか、長老」
暗がりの中、低い男の声が聞こえた。
夜の闇に包まれた中でもそれとわかる白い肌、大きく尖った耳。エルフだ。
人数は三人。その全てが若い男だったが、エルフならば当然だ。年齢を外見から掴むことはできない。
「ああ。とりあえずはその存在を確かめなければならない。
　それには正面からがもっとも手っ取り早い」
長老と呼ばれたエルフが口を開いた。他の二人に比べて、表情が落ちついている。
「しかし、相手はあのフェンネルですよ？」
「だからこそ、いきなりこちらを殺すような真似はしない。命の危険だけは考えなくていい」
そう言ったエルフの長老は、背中に二人を従えて歩き出した。

視線の先にはこの暗闇にあって光を放つ唯一のもの――フェンネルの家がある。

夕食が終わっても、気まずい雰囲気は去っていなかった。
アポロンは二人の様子を気にしつつ洗い物をし、
フェンネルは愛用の揺り椅子に揺られ、
アイナはその傍らに腰を落ちつけて本を読んでいる。
離れようとしないのがお互いを嫌っていない証拠だが、沈黙は続いていた。
「……んしょ」
フェンネルが一際大きく椅子を揺らし、棚に置いてあった耳掻き棒を取った。
無意識に一連の動きを目で追うアイナ。
そのことに気付いたのかそうでないのか、フェンネルは手にした耳掻きを自分の耳に差し入れず
くるくると指先で回しながら、独り言のように言った。
「おんしも掃除するかの？」
「え？」
口調はともかく、フェンネルの目は明らかにアイナに向けられている。
今の発言がアイナに対するものだとは明らかだ。
驚き戸惑うアイナの頭をそっとなで、椅子を立って正座するフェンネル。
「ほれ、寝てみよ」
「え……でも、私の耳は」
「知っとるよ、病気じゃろ？」
アイナは髪の上から耳を両手でふさいでいた。

共同生活を始めてからずっとこうだ、アイナは耳だけは見せようとしなかった。
「何で知ってるんです？」
「おんしを助けた時、偶然アポロンが見たんじゃ。それを教えてもらった。
もう治っておるようじゃし、痛くはせんから、やってみんか？」
「……」
お願いします。アイナはぼそりと言い、フェンネルのももを枕に寝転んだ。

右耳を上にして頭の高さをちょうどよく固定し、手で耳を覆う薄い栗毛を払う。
「……なるほど、隠したくもなるの」
フェンネルがつぶやいた。それほどまでにひどい状況だったのだ。

アイナの耳は、耳としての外観を保っていなかった。
耳たぶをはじめとした耳の外側はほとんどが失われ、
その影響は周囲の皮膚にも及んだのか、かなり肌が荒れている。見た目の雰囲気は火傷に近い。
こめかみの横に突然ぽっかりと穴が空いているようにさえ見えた。
「小さい頃、炎症がひどくなって……その名残だそうです。
すごく痛かったのは覚えていますが、詳細までは」
「そっか、耳を見せなかったのはこのせいじゃな」
「我がままでごめんなさい」
「いや、女として同情するよ。髪型の自由が失われたようなもんじゃからの」
彼女が髪を伸ばしていたのはこれを隠そうとしていたからだろう。
フェンネルは微笑み、手で温めていた銀色の耳掻きをそっと耳の中に差し入れた。
身を縮こまらせたアイナをなでて落ちつかせ、もぞもぞと棒を動か

す。

「痛くないかの？」

「むしろ気持ちいいです」

言葉通り、アイナは目を細めてフェンネルに身を任せている。

洗い物を終えたらしいアポロンがのそりと顔を出し、二人の様子に気付いたようで

安心したようにエプロンを外す。喧嘩していないかと心配していたのだろう。

アイナに聞こえない声で何か言ったのか、フェンネルが「心配せんでも、しくじったりはせんよ」と苦笑していた。

「本当に失敗しませんか？」

「失敗して良いときと悪いときの区別くらいはつくつもりじゃよ」

「イノシシに向かって弓を射るのは失敗して良いことですか？」

「過ぎたことは忘れよ、そのほうが人生は楽しい」

「私にはあなたのように生きるのは難しいみたいです」

「嘆かわしい限りじゃな」

アイナが笑った。動くな、と注意しつつフェンネルも笑い返す。

「――さっきはすまんかったの」

「いえ、気にしないでください。やっぱり、父を心配させたままではいけませんから」

「ああ。じゃが、きつい言い方をしたのは悪かった。

おんしがエルフについて間違った印象を抱くとあれだったんでの」

「間違った印象？」

「私のようなエルフがいるという認識自体が間違っておる。

あまり私らに関わらない方が良い。おんしが肩身の狭い思いをすることになるからの」

「……」

納得しながらも表情は悲しげになってしまった。

ウィナリスの人間は、フェンネルのようなエルフがいることを信じるまい。
そんな中フェンネルの弁護を続けてしまえば、アイナに何らかの形で危険が迫るだろう。フェンネルはそれを避けたかったのだ。
所詮エルフは人間の敵だ。かつて住む場所を賭けて大量の血を流した、憎むべき仇敵なのだ。

「じゃから、私らに関わるのはよせ。忘れてくれても構わん」
「それだけは無理です」
きっぱりと断言してやると、フェンネルは一瞬ぽかんと口を開け、嬉しそうに微笑んだ。
「忘れたほうが楽だと思うんじゃがなあ。……反対の耳を見せてくれんか」
「あ、はい」
アイナは寝返りを打ち、ふと思い出したように口を開いた。
「どうして、船を沈めたんですか？」

沈黙。

アイナが自分への驚きに目を見開き、両手で口を塞ぐ。
とんでもないことを言ってしまった。言ってしまった。言ってしまった。
だが。
「……どうして、船を沈めたんですか？」
アイナは腹をくくって繰り返した。
いつかははっきりさせなければいけなかった。そのためには自分から話題を振るしかない。
口にしてしまったのは失態と言えなくもない。言ってしまったのはまったくの偶然である。が、良い機会なのも事実だ。
自分の意思では、今後おそらく永遠に言い出せなかっただろう。

アイナはころりと転がり、下からフェンネルを見据える。
殺すつもりならいつでも殺せという意味を込めた姿勢――と本人は考えたが、そうは見えない。
フェンネルはといえば右手に耳掻きを構えたまま、無表情にアイナを見下ろしている。
「どうして、沈めたんですか？罪のない人々を巻き込んで、どうして」
涙腺が刺激されたようだ。鼻の奥も湿ってきた気がする。
それでも厳しい顔付きを崩さず、アイナは気丈に言い放った。
フェンネルもまた無表情を崩さずにいた。長い沈黙を経て、やがて口を開く。
「……何のことじゃ？」

沈黙。

「……な、何のって、私の乗ってた船を――レクイエム号を沈めたじゃ」
その毒気のない発言に逆に涙目になったアイナが跳ね起きるが、フェンネルは首をひねったまま不思議そうにしているだけだ。
「何のことかわからんが、そんな悪人はこらしめねばならんの」
「しらばっくれるつもりですか！？」
「……事情はよく飲み込めんが、たぶん濡れ衣じゃ。身に覚えがない。
　そもそも私はあんまり海には近づかんぞ。潮の香りというのが好きじゃないんじゃ。魚は食うがの」
アイナは泣きそうになってアポロンに向き直るが、アポロンもまた事態についていけない様子で頷くだけ。
フェンネルが海に近づかないということだけは肯定したのだろう。
「嘘……じゃあ、船を焼いたのは誰だって言うんですか！
　私は確かに見たんです、薄い長髪で、背の高いエルフで、右腕に

刺青が――」

どん、どん。

ふいにアイナの言葉を遮った、玄関の扉を叩く音。次いで若い男の声が聞こえてくる。

「フェンネル、いるんだろう。出て来い」

珍しく冷静さを欠いたアイナを挟み、フェンネルとアポロンは顔を見合わせた。

「……あの若造め、何をしに来たんじゃか」

フェンネルはぼそりとつぶやきながら立ち上がった。

思わず服の裾を掴んでしまったアイナの手を解き、諭すような小声で言う。

「大丈夫じゃ。怖いことはないから、少しだけおとなしくしていてくれんかの。

絶対に声を出してはいかんぞ。いないフリをしていてくれ」

「あ……は、はい」

「うむ、頼んだ。――アポロン、アイナを頼むぞ。

オニバスなら大丈夫だとは思うが、万が一の時はアイナを連れて山に逃げろ。ケリがつくまで隠れておれ。わかったな」

アポロンが頷き、ひょいとアイナを抱えあげて膝に抱いた。

そのままリビングを出て行こうとするフェンネルに、アイナが上ずった声をかける。

「あ、あ……ちょ、どこへ？」

「なに、夜分遅くに尋ねて来た無礼な客人に『ぶぶづけでもどうぞ』と言ってやるだけじゃ」

フェンネルは最近ではめっきり使われなくなった言葉をつぶやき、ベルトに剣の鞘を取り付けながら玄関へと出ていく。

第六話「誘拐」

アポロンの膝の上で、アイナはちんまりと座っていた。
彼女達の座る位置はリビングの壁際、外側からはその存在を確認できない位置である。
何かから隠れている――と言うよりも、何かからアイナを隠しているのは間違いない。
そしてその何かと言うのも、こんな自分に山中のフェンネル宅を尋ねて来た訪問者に違いない。
「あの、アポロンさん……」
頭の中で状況を整理し終えたアイナが口を開くが、アポロンは目の下――恐らくは口元――に指を当てた。
静かに、というジェスチャーである。
アイナは仕方なく頷き、アポロンのがっしりとした胸に背中を預けた。
少しすれば、客も去るだろう。その後でフェンネルに話を聞けばいい。
身に覚えがない。フェンネルの言葉に腹を立てる自分と、胸をなでおろす自分がいた。

どん、どん。

「やかましいわ、開いておるぞ」
玄関のランプに火を入れたフェンネルは、普段と変わらぬ口調で玄関に言った。
扉が開き、夜風がフェンネルの薄い金髪を揺らした。

扉の奥には三人のエルフがいた。
まず簡素な布服に身を包んだエルフが二人。扉から離れた位置に立っていて、顔や性別の委細はわからない。
そして扉を開けて玄関に入ってきた男。
ぼんやりとした明かりに照らされた顔は不自然なまでに整っており、うなじで束ねた銀髪は長いが薄い。
そこまでなら典型的なエルフなのだが、違うのは背が高いことだ。
１７０センチ近いフェンネルより頭一つ大きい。
しかしその長身に似合わず、かなり痩せているようだった。
ゆったりとした衣服でごまかしてはいるが、骨と皮数歩手前といった体付きをしているのが指や頬のこけ具合からわかる。

「久しいのお、オニバス。十五年ぶりか？」
「たかだか十五年で何を言う。時の感じ方まで人間に冒されたか」
切れ長の瞳がやや俯瞰気味にフェンネルを睨む。敵意を隠そうともしていない。
「相変わらず嫌われているようじゃの。私はおんしのことを可愛く思ってるんじゃがなあ」
「お前に好かれていると思っただけで虫唾が走る」
「そんな、にべもない。で、用件は何じゃ？」
「人間をかくまっているだろう。出せ」
「何のことじゃ？」
フェンネルはおどけたように肩をすくめた。男――オニバスの細い目がさらに細まる。
「冗談はいい。お前のところに人間の少女が一人住んでいるのは調べさせた」
「ほう？少女に間違われるとはの。私もまだまだ若いようじゃな」
「耳が髪に隠れてしまう少女とエルフを間違えるほど、里の者は馬鹿ではない」

「なるほどの。じゃが、私がかくまっているという証拠はどこにある？
　ふもとの人間が山遊びに来ていただけかも知れんぞ？」
「お前のゴーレムと楽しそうに笑い合える人間が、エルフを嫌う集落にいるものか」
「すべて調査済みというわけか。ひょっとしてストーキングに興味があるのかの？」
にこりと微笑むフェンネルであったが、オニバスの表情は緩まなかった。
敵意のためでもあるが、もともとこの男は冗談の通じないクソ真面目な気質であることをフェンネルは知っていた。
でなければ嫌うエルフのもとに堂々と正面から「人間をよこせ」などと乗り込むような真似はするまい。

「認めるならば、少女を渡せ」
「いんや？そんな女の子のことは知らんのお」
「しらを切るか」
「そんなこと言ったっての……知らないものは知らないんじゃ。ここにいないしの。
　いない人間を出したりはできんじゃろ？」
オニバスの表情が軽く歪んだ。
「……いないことを証明できるか？」
「そんな義務は私にはないの。おんしこそ、ここに私以外の女の子がいることを証明できるか？」
歪んだ表情のまましばしフェンネルと睨み合い、やがて一歩後ろに下がる。
「邪魔をした」
「なんじゃ、帰るのか？　なんなら菓子でも食っていかんか」
「断る」
背を向けて歩き出すオニバスに微笑を浮かべるフェンネル。

皮肉っぽさはない。あざ笑っていると言うより、オニバスの不器用さに苦笑しているような笑顔だった。
「おんしもぶきっちょな奴じゃな。そういうところが好きなんじゃがの……」
人間を恨むのはわかるが、それにとらわれるでないぞ」
「お前に何がわかる」
「わかるとも。おんしと違って、私はあの時を実際に生きているのじゃからな。もう過ぎたことじゃ」
フェンネルはランプの光を弱めつつ、足を止めたオニバスに言う。
「恨むな、とは言わん。じゃが、それにとらわれるな。
おんしにはクロノガルデニアのエルフを導く大役があるじゃろう。
間違いなく、おんしにしかできんことじゃぞ？」
「……言われるまでもない。俺は」
背を向けたままオニバスは肩越しに言った。
「俺は楽園を取り戻す。必ず」
強い決意のこもった口調であり、決意を新たにするような口調であった。
一転して悲しげな表情になったフェンネルを振り返らずに歩き去る。
扉はきちんと閉めていった。

リビングにフェンネルが戻ると、アイナが弾かれたように近寄ってきた。
「フェンネルさん、大丈夫ですか？」
「何がじゃ？　ぴんぴんしておるが。とりあえず」
「あ、いや、私が原因みたいでしたし、何だか仲の悪そうな相手みたいでしたし……」
「おんしが気にすることではないぞ。
タイミングが悪かったから会うのはめんどかったが、奴のことは

嫌いじゃないしの」
「そうなんですか？」
「うむ。アポロン、ご苦労じゃったな」
その言葉にアポロンがのそりと立ち上がった。
フェンネルの普段通りの様子に安心するアイナ。胸のつかえが取れた気分であった。
「で、船が燃やされたと言う話じゃが……詳しく聞かせてくれんかの？」
「あ、はい。では明日にでも」
「今じゃなくて良いのか？」
「大丈夫です。何だか安心したら眠くなってしまいましたし」
事実であった。自分のことで言い争いになるかもしれない状況は、あまり気分の良いものではない。
解放されたところに狩りの疲れが押し寄せてきたのだろう。まぶたが重かった。
「わかった、おやすみ」
「おやすみなさい。アポロンさんもおやすみなさい」
アイナが二階へと上がっていく足音を聞きつつ、フェンネルはふと思い出したように手を打った。
「おお、アポロン！おんし、洗い物終わったのに何を起きとるか。さっさと寝よ」
その言葉にアポロンは理不尽そうに両手を振り上げたが、次の瞬間がらがらと崩れた。

夜風に吹かれて里への道を歩いていると、背中から付き添いの男が声をかけてくる。

「大丈夫でしたか、長老」
「問題はない。すまんな、毎度馬鹿正直な手を取ってしまう」
「いえ、長老の決断ならば」
付き添いの男は力強くそう言ってくれた。
この者だけではない。里の者は皆、自分を長老、長老と慕ってくれている。
彼らに安住の地を与えなくてはならない。そしてそれは、クロノガルデニアではない。
そのために何を躊躇することがあろうか。
オニバスは拳を握り締める。あの少女さえいれば計画は完成するのだ。
「……すまん。場合によっては、連中と戦わざるを得なくなるかもしれん」
「問題ありません」
「もとより、俺達は戦士ですから。戦ってなんぼですよ」
一人は頷き、一人は陽気に細い腕で力こぶを作る。
「ありがとう」
計画は迅速に実行する必要がある。遅れれば、それだけ里の皆の命が尽きていく。
何としてでもあの少女を手に入れ、この手に楽園を取り戻すのだ。
エルフの未来のために。

いつもより起きるのが遅かったのは、疲れのせいか。
目を覚ました頃には日もすっかり高く昇っており、フェンネルは朝食を済ませて狩りに出てしまっていた。
自分はまだ傷が痛むのに、元気なことだ。
船について話す機会が失われたのは不満だったが、別に夕食の席で

話しても問題はない。
「今日は釣れませんね」
水面に釣り糸をたらしていたアイナは、隣のアポロンにそう声をかけた。アポロンも頷いてくれる。
「やっぱり、時間を変えると釣れないんでしょうか？」
アポロンの頭は傾いだ。わからない、ということなのだろう。
しかし魚を釣るには時間帯が重要らしいから、寝坊してしまった今日の釣果は期待できなさそうだ。
「ごめんなさい、寝坊しちゃって」
アイナの謝罪に、アポロンは気にするなと首を振る。なんとなく言いたいことはわかるようになってきたが
会話ができるようになるまでは二百年だ。フェンネルはそう言っていた。
一度、まともに言葉を交わしてみたいものだが。そんなことを思いつつ、流れる水を眺める。
「何と言うか、落ちつきますね」
首をひねられるのにも構わず、アイナは言った。
生活の手伝いの中でも、とくに釣りをしているときが一番楽しい。
釣れなくとも、たとえ流れていく川を見ているだけでも心が落ちつく気がした。釣りは楽しい。

ちゃぷんっ。

「あ、跳ねた……」
魚が跳ねたようだ。水音を聞きつけたアイナがそちらを向くと、
「……え」
水柱が立っていた。
文字通り水の柱である。液体のままの水が柱になることなどありえないが、
実際に円柱の形を取って川から一本そびえ立っているのだ。高さは

アポロン二人が肩車をしても届かない。
現実離れした光景にぽかんと固まってしまったアイナの前で
水柱はろくろ回しに失敗した粘土のようにうねり、アイナに向かって倒れ込んできた。

がしいいいいっ！！！

悲鳴をあげることすら許されない。倒れ込んできた水柱は、普段とは一転して素早く動いたアポロンの
岩のようにごつごつした――否、岩の両腕に抱き止められていた。
どういう原理で固まり形を成しているのか、水柱は捕まえられた蛇のようにアポロンの腕の中で暴れ回る。
しかしその抵抗もむなしく、水柱はだんだんとアポロンの腕に締め上げられ、弾けた。

ぱしゅううううっ！！

飛び散った水分が霧となってアポロンを黒く染め、アイナの全身を湿らせる。
呆然とするアイナの視界の端で再び水が立ち上がり、弾け、無数の弾丸となって彼女に迫るが
その顔面を殴り飛ばそうかという勢いで突き出されたアポロンの腕に当たり、アイナは無傷だった。
アポロンの腕に穿たれた無数の穴から、血のように水が滴り落ちる。
「アポロンさんっ！？」
いきなり傷だらけになったアポロンにアイナが駆け寄るが、アポロンは「問題ない」とばかりに首を横に振る。
ほっとしたのもつかの間、鼓膜に穴が開くかと心配してしまうような可聴ぎりぎりの超高音が響いた。

きいいいいいいいいいいっ……！

幾重にもハーモニーを奏でる高音にアイナが腰のメイスを引き抜き、アポロンが身構えた。

たまにしか聞かないが、この音は忘れようがない。

「魔法……！」

つぶやいたアイナと背中合わせのアポロンを取り囲むように、崖の上から人影が飛び降りて来る。

普通に飛び降りたら間違いなく死ぬ高さであるが、その人影の耳は大きく尖っていた。エルフだ。

以前フェンネルに教えてもらった魔法の中に『重力操作』というのがあった。それで着地の衝撃を和らげたのだろう。

「あいつが長老の言っていた女だな」

「殺すな。あの少女が生きていることが計画実行の最低条件だ」

「わーってるよ。問題はあのゴーレムのほうだな、どうする？」

「全員でかかるぞ。魔法で女の子を巻き込むなよ」

自分達を取り囲むエルフのほとんどが男だった。手にはフェンネルのバスタードソードと同じようにかなり細身の武器を持ち、反対側の手は魔法を使うためか空けている。

「行くぞ！」

その声を合図に、エルフの男達が走り出す。

かっ。

矢は見当違いの方向にすっ飛び、若い木の幹をえぐった音を立てる。

驚いた野ウサギが裸足で逃げ出した。無論、矢を放ったのはフェンネルである。

いつもなら下手なくせに膝をばしばし叩いて悔しがるのだが、今日

は何故か神妙な面持ちで固まっていた。
「……なんじゃ？」
弓の弦でデタラメな曲を奏でつつ、屈み込んでいた体を起こす。
しばし虚空を見つめ、だんだんと柳眉を歪めていき、やがて唐突に叫んだ。
「――おのれ、あの若造！気付いておったのか！」
フェンネルは走り出した。弓を放り捨て、ペース配分をこれっぽっちも考えない全力疾走で突っ走る。
小枝や硬い葉が肌のあちこちを傷付けたが、フェンネルはまるで頓着していなかった。
「アイナ……っ！」

男達の会話が聞こえていたから、自分に魔法が飛んでくることはないと思っていた。
しかしそれは、アポロンへと魔法の攻撃が集中するということでもあった。

きゅぼぼぼぼぼぼぼぼぼんっ！！！

顔の前で両腕を交差させて男エルフ達の放つ無数の火玉を受け止め、一歩一歩距離を縮めるアポロン。
間合いが詰まったと見るや、普段の微笑ましくのろい動きからは想像もつかない速さでエルフの襟首を掴み
別のエルフへと叩きつけ、折り重なったところを容赦なく踏みつける。エルフ二人が血の泡を吹いた。
「聞いてないぞ……化け物にだって限度があるだろっ！」
エルフの一人が叫びつつ左手を高速で動かしたかと思えば
さらさらと流れていた水面が波打ち、先ほどの水柱が四本まとめて

立ち上がる。
それぞれ右手、右足、左手、左足に絡みついてアポロンの動きを封じようとするが、

ぶちっ……ぶちっ……びち、ぶちぃぃっ！！

アポロンは駄々をこねるようにそれを引き千切り、魔法をかけた張本人の頭を鷲掴みにして河原の石へ叩きつけた。
白目を剥いて気絶したエルフを胸の前で解放し、握った拳を地面すれすれに振るって
今まさに魔法を唱えようとしていたエルフの膝小僧へ裏拳を決める。
両膝が砕けただろうか。
数十人のエルフから魔法攻撃を受け続けてなお互角以上の戦いを繰り広げるアポロンに
アイナはいつかも感じた戦慄を呼び起こされていた。
アポロンと出会って間もない頃はいつも思っていた、彼の大きく頑健な体が本気で戦いに使用されたときの力。
考えてただけで震えを覚えたものだがしかし、
その力が自分を守るために振るわれるとなれば、これほど頼りになる味方もいない。
何故この者達が自分を狙うのかはわからないが、どうにかして振り切らなければならないのは明白だ。
エルフの魔法がアポロンに集中している今なら、そのチャンスはある。
「……ぇぇぇぇぇぇいっ！！」

ごっ――！！

アポロンの阿修羅のごとき暴れっぷりに半ば目を奪われていたエルフを選び、その向こう脛をメイスで思いきりぶっ叩く。

泣き叫んで崩れ落ちたその者の脳天に強烈な打撃を一発、一撃で昏倒させた。
「くそ、人間の子供が……！」
歯ぎしりしつつ剣を振りかぶったエルフの前に立ち、打ち下ろしてくる刃をメイスの柄で受け止める。
フェンネルとの稽古でわかっていたことだが、エルフは人間の考えている以上に非力なのだ。
いかに鍛えているとはいえ女、しかも子供であるアイナにすら打ち負けてしまうほどに。

がきっ！

まさかアイナに武術の心得があるとはエルフも思っていなかったのだろう、
眉間の少し上で止められてしまった剣に驚愕の表情を浮かべていた。
その隙を逃さずに
アイナは思いきりつま先を蹴り上げた。そこに急所があるのは、エルフの男も人間の男も変わらないようだ。
股間を蹴り潰されてその場にへたり込んだエルフの横っ面を殴り飛ばし、
号外をばらまく新聞売りのようにエルフ達を次々放り捨てていたアポロンへと叫ぶ。
「逃げましょう、アポロンさん！乗せてください！」
アポロンは頷き、アイナの方へと走り出した。アイナもまた追いかけてくるエルフを警戒しつつ、アポロンへと駆け寄る。
そして二人は唐突にその足を止めてしまった。アイナの頬を冷や汗が流れ落ちる。
「……何、これ……？」
アイナとアポロンとを隔てるように、ばちばちと火花を散らす半透明の壁が立ち塞がっていた。

それは二人の接触を避けるためというよりは単純にアポロンを閉じ込めるためだけに作られていたようで、
壁は立方体を成してアポロンを囲っていた。半透明の監獄の中、身動きが取れなくなってしまっている。
ためらいがちにアポロンが手を突き出すが、

――ばちいっ！！

一際大きく火花が散っただけだった。触れたものは弾かれてしまうらしい。石の指先から煙が上がっている。
「伏兵……！」
アイナが崖の上を見上げると、上にはまだ十数名のエルフがいるのが見えた。こちらは女性が多いようだ。
男のエルフが直接戦闘で時間を稼ぎ、その隙に女のエルフがこの檻を作り出す魔法を発動させたらしい。
どうすればいいのだろう。いかに敵が魔法を使ってこないとはいえ、この人数を一人で相手にできるはずがない。
頼みの綱のアポロンは身動きが取れない状況だ。
「どうすれば……
必死に頭を回転させるアイナの周囲に、地面から噴き上がるように白い気体が立ち込める。
火事場の煙のように濃いミルク色の霧がアイナの視界を完全に奪った、
思わず短い悲鳴をあげたのと同時に掴まれる、メイスを持った右腕。
「あ！？」
首筋を強く叩かれた感じを覚えたのを最後に、アイナの意識は闇に落ちた。

オニバスは腕の中で気を失った少女を抱き抱えつつ、左手を動かした。
風に吹かれるより早く霧が晴れ、檻の中でもがくアポロンと大なり小なり傷付いたエルフ達が視界に現れる。
「やりましたね、長老！」
「ああ。皆のおかげだ、ありがとう」
疲れたような笑顔を見せたオニバスは、名も知らぬアイナを抱っこしたままアポロンへと近寄る。
アポロンは普段の温厚さが嘘のように暴れていた。
檻に触れて四肢を焦がしながらもなお、その動きは弱まる気配を見せない。
「……あまり長い間お前を閉じ込めておくことは、我々にはできん」
友を奪われた怒りに狂う石人形に、オニバスの低く押し殺された声はどこまで聞こえていたのだろうか。
地面の石を踏み砕き、無我夢中で体を動かすアポロンへ、右手の細い指がかざされる。
「砕けろ、ゴーレム！」

きゅぼぼぼぼぼぼぼぼんっ！！！

オニバスの指が残像を引きずって複雑に動き回ると
檻の中の狭い空間に突如として火の玉が浮かんだ。
火の玉からさらに小さい火の玉――否、弾がいくつも分かれ、アポロンの頭部へと特攻をしかける。
弾はアポロンの目となっていた宝石を粉々に粉砕した。
アポロンだったものはただの石になり、足元の砕けた石に混じった。
「……急ぐぞ。俺は計画の準備を進める」
「あのゴーレムは」
「核が破壊されれば、ゴーレムの復活はできん。放っておけ。
お前達は負傷した者を助けて、この娘を適当に見張っていてくれ」

「任せてください」
走り去る比較的傷の浅かったエルフを見送り、オニバスは額の汗をぬぐった。
エルフ達は遠慮なしに大怪我をさせられてはいるものの、かろうじて死んではいないようだ。手加減してくれたのだろうか。
「見上げたゴーレムだが……仕留めた俺に同情する資格はないか」
腕のアイナを改めて抱き直し、オニバスは歩き出す。

第七話「逃亡」

空もオレンジ色に染まりかけていた頃、河原に立ち尽くす影があった。
フェンネルだ。石の踏み荒らされた個所——アポロンが破壊された場所に立ち、何かをこらえるように空を見ている。
口の端から何かが流れ落ちて白い肌を汚す。
赤い絵の具を水に溶いたようなその液体は、破れるほど強く噛み締められたフェンネルの唇から滴る真っ赤な血液。
「やってくれたの、あの若造……時間がないと言うのに」
言うなりフェンネルは両手を地面にかざし、指を複雑に動かし始める。

きぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ……！

森の鳥達がばたばたと騒いで飛び立った。

「ん……」
目を開けても真っ暗だった。
体の隅々まで問題なく動くことを確認してからアイナは静かに体を起こす。
辺りに人の気配はない。板を何枚も連ねた壁の隙間から、上弦の月が覗いていた。
「夜になったのか……」
どのくらい眠っていたのかはわからないが、体にだるさはない。半日以上ということはないはずだ。

もともとエルフに襲われたのは昼過ぎだったし、眠っている間に夜になったのだろう。
「アポロンさんは無事なのでしょうか」
しばらくすると目も暗闇に慣れてきた。見渡せば、そこは木造の物置小屋らしい。
土が剥き出しの床に、狩りに使う道具が散らばっていた。

エルフに襲われたのは覚えている。変な霧に包まれたところを不意打ちされたこともだ。
とすれば、自分はエルフに幽閉されたと考えるのが自然である。というか、他の可能性はない。
体の自由が奪われていないのは子供だと甘く見られているからだろう、この状況ではありがたかった。
外に誰かがいるかも知れない。なるべく音を立てないよう、物置小屋から役に立つものを探す。

「暇だな」
少女を放り込んだ物置小屋の見張りに立っていたエルフが、あくびを噛み殺しながらつぶやいた。
すぐに隣のエルフがたしなめる。
「そりゃ、見張りなんだからしょうがないだろ」
「でもよ……普通、こういうのって閉じ込めた奴が脱出を考えたりそいつの仲間が助けに来たりするもんじゃないか？」
「紙芝居の見過ぎだぞ」
「てめえ、紙芝居じゃねえよ、本だ、本」

どん、どん。

物置小屋の中から、壁を叩く振動が伝わってきた。

「起きたか？」
「そうみたいだな」

どん、どん。

中の少女は考えなしに壁を叩いているようだ。
いかに薄い板張りの壁とはいえ、少女の細腕で壊せるはずがない。
仮に扉を叩いたとしても、扉には太いかんぬきがついている。脱出は考えられなかった。

どん、どん。

「おい、うるさいぞ！」
見張りの一人が大声で叫んだ。しかし、壁を叩く音は収まらない。
「おい！聞こえないのか！」

どん、どん。……ばきゃあっ！

ふいに異質な音がまじった。見張りのエルフが顔を見合わせる。
「まさか……壁を破ったのか？」
「馬鹿言え、素手で破れるかよ」
「で、でもよ。スコップとか、矢じりとか……あるんじゃないか？」
「……ヤバいぞ」
エルフは目に見えて慌て始めた。ここで少女を逃がしてしまえば、オニバスに合わせる顔がない。
焦りにぎこちなくなる手つきでかんぬきを外し、腰の剣を引き抜いて扉を蹴り開けるとそこには、
「引っかかりましたね」
ちょっとした土いじりに使う鉄製のスコップを右手に構えた少女が、引きつった笑みを浮かべていた。

どっ――！

「ご、おっ！？」

少女――アイナは男達が戦闘準備を整えるよりも早く踏み込み、エルフの一人に肩からぶつかっていた。

思わず倒れ込んだエルフの腹を尻で押さえつけ、両腕の付け根に膝を落とし、完全に反撃の手を封じると

スコップの柄を拳の端から出し、眉間に三発ほど叩き込む。

急所に痛烈な打撃をもらい、あっという間にエルフは失神した。その手から剣を奪うのも忘れない。

「て……てめえっ！」

残ったエルフが怒りの声とともに剣を振り下ろしてくるが、

――きゃりぃんっ！！

魔法を使ってくるならまだしも、正統な剣術が伝わっていないこの島のエルフに

剣と剣との果たし合いでアイナが敗れるはずがない。

彼女は幼き頃より父から、実戦で通用する剣術――否、剣の扱いを学んでいるのである。

即座に振り返ったアイナは自らの刃で敵の刃を押さえ込み、鋭い視線をエルフに向けていた。

「くっ！？このガキ！」

いかに非力なエルフといえ、男が少女に力負けするのは認めたくない。

そんな思いをわかりやすく顔に出し、エルフはよりいっそう剣に力を込めるものの

そんな意地などアイナにはどうでも良いのだ。

入れた力が災いした、アイナが剣を傾けてやると刃は刃の上を滑り

落ち
それに引っ張られてエルフの体も前に流れる。後ろ頭、首筋、背後
――ありとあらゆる急所がアイナに向けられた。

があんっ！！

よりどりみどりの弱点から後頭部をチョイスし、先ほどスコップでやったようにアイナは柄尻でエルフの頭を殴りつけた。
成人はしているのだろうが、背丈はさしてアイナと変わらないエルフが
滑稽劇のようにぱったりと昏倒して動かなくなる。
「お仲間を呼ばないでいただき、助かりました。感謝します」
当然ながらあまり経験のない真剣勝負の興奮に息を荒くし、アイナは頬を震わせて皮肉を残した。
剣の鞘を奪い、自らの腰に巻いて走り出す。

アイナは走った。
どんな場所をどう走ったかなどいちいち覚えはしなかった。
もうすぐ帰れるというのにこんなところで捕まっているつもりはない、
フェンネルか、アポロンのもとに行ければどうにかなると信じて走り続ける。
しかし慣れない森の中、どうしても荒れた地面につまづいてスピードは落ちた。
その点向こうはこの森を知り尽くしたエルフ達である。簡単に追いつかれてしまった。
「くそっ……」
思わず悪態をつくアイナ。足音はすぐそこまで迫ってきていた、魔

法でも使われたら終わりだ。
「くそっ……」
獣道をそれ、肌を傷付けながら茂みに飛び込む。
とにかく逃げねば。アポロンのところまで。フェンネルのところまで。
森に住む者達とはいえ、さすがにうっそうと生い茂る草木の中に立ち入ったことは
向こうの足を鈍らせることに貢献してくれたらしい。抜いた剣でばしばしと草を刈り、進む。

しばらく行くと、森は唐突に開けた。はるか下から響くかすかな水音と、一転して岩だらけとなった景色。
「崖……やった！」
希望を顔ににじませ、アイナは崖沿いに進路を変更した。
この崖はアポロンとともに釣りに出かけたあの谷だ、これに沿って進めば、谷の付近に建っているフェンネルの家に辿り着けるはず。
わずかに見えた光明に足はやや軽くなったが、それが動かされることはなかった。
「……いたぞ、こっちだ！」
フェンネルの家の方向に、エルフが数人現れたのである。
抜き身の剣を構えたアイナであったが、背後からがさがさと草を掻き分ける音を聞いて凍りつく。
「う……あ……！」
前は敵、後ろも敵、左右はうまく動けない森と落ちたら確実に死ぬ高さの崖。
逃げ場はなかった。

「油断のできない女だ」
一人が肩で息をし、呆れたように汗を拭う。
「長老に言って、計画を早めてもらったほうがいいかもしれないな」

「確かにな……いつ逃げられるとも限らない」
「とにかく捕まえようぜ、話はそれからだ」
エルフが近寄っていくと、少女は不適に笑った。笑顔がぎこちない。
「……どうも話を聞いていると、私に死なれては困るようですね」
じゃり。
固い地面を擦るように、少女の足が一歩を踏み出した。その方向は崖である。
「と、言うことはです。ここから私が飛び降りれば、あなた達に一矢報いることも可能なわけですね？」
少女の目は本気であった。ここから飛び降りるつもりでいる。
エルフの戦士達が目を見開いた前で、少女はもう一歩後ろに下がった。
地が崩れ、小石がからころと壁面を伝って落ちていく。
「お、おい！捕まえろ！」
「誰か『惰眠』を唱えておけ！」
男達が飛びかかるより早く、少女の体は宙を舞っていた。
「ああっ……！」
伸ばした手は少女に触れる寸前で空を切り、エルフの男に悲痛な声をあげさせる。
絶句する男達の大きな耳に、何かが川に落っこちた派手な水音が届いた。
――ばしゃあんっ。
「……」
「マジかよ……」
皆がみな小刻みに震え、エルフ達は少女が身を投げた崖を見つめていた。

「こ……これで、俺達の集落の運命は……」
「ば、馬鹿言うな！川に落ちたんなら、生きてるかもしれねえ！
あのガキが生きていれば――死んでなければいいんだろ！？」
男が崖下を覗き込むが、少女の姿はない。男達を絶望が支配する。
「な、流されたのかも知れないだろうが。あの川は深いし、急だ」
「とにかく、探さねば……誰か、長老に報告を。長老の判断を――」
つぶやいたエルフの眼前に、一人の少女が降り立った。
「仰がねば……え？」
絶句する男の視界が、真っ白な光に満たされる。

賭けであった。
自らの手札をすべて使っての、伸るか反るかの一発勝負だ。
アイナは本気で崖から飛び降りる気でいた。しかし、投身自殺をするつもりは毛頭なかった。

まず、アイナは飛ぶと同時に、自らに『重力制御』の魔法をかけていた。
フェンネルに教わったいくつかの魔法のうちの一つだ、物体にかかる重力を自在に制御する。
極めれば重力の向きさえもコントロールし、それを使って空を飛ぶことさえ可能だとフェンネルは言っていたが
初心者のアイナにそんな大それた真似ができるはずがない。
自らの体重を限界まで軽くして、壁面に張り付いていたのである。

次に、自らの身代わりとなる石ころを落とした。これは崖の岩を蹴飛ばして落としただけだ。
うまいこと風に流され、川に落ちてくれた。川に流されたと思ってくれるだろう。
ここで下を覗き込まれてはすべてが台無しであったが、エルフ達は

動揺したのだろうか、自分の生死をすぐには確認しなかった。
完全にツキは自分に来ている。それを確信し、アイナはでこぼこした岩を伝って位置を変え、
『重力制御』の魔法にさらなる魔力を送り込んだ。
数秒ではあるが、アイナの体重は胎児よりも軽くなった。
しかし、筋力まで胎児並に劣るということはない。アイナは軽くなった自らの体を思い切り上へ跳ね上げた。

力はそのままに体重だけが軽くなったアイナは、エルフに気付かれることもなく天を目指して上昇する。
ここで見られても終わりだったが、張り付く位置を変えたのが幸いした。エルフ達は自分に気付いていない。
そもそも、人間が魔法を使うなどとは考えていないだろう。アイナはその隙を突いたのだ。
地形からくる強風に体を流されないよう体重をもとに戻し、アイナは一番端のエルフのそばに降り立つ。
足のしびれは意思の力で強引にねじ伏せた。すぐさま神経を左手に、意識を地面へと集中させるアイナ。
左手で構築する魔法は、生まれて初めて習い覚えた魔法。

きぃぃぃぃぃぃぃっ！

地面が強い光を放つ。ありったけの魔力を込めて放ったアイナの魔法『光源』は
その光で夜の闇を照らし、何の警戒もしていなかったエルフの視界を完全に奪った。
アイナの目も光に痛んでいたが、光ることがわかっていればどうとでも耐えられる。
「あああああぁっ！！！」
聞きようによっては泣き声と取れなくもない裂帛の気合で剣を振るい

アイナは目を押さえてうずくまるエルフの肩口に刃を叩き付けた。
服の中に革鎧を着ているようで斬れはしなかったが、その激痛にエルフは気を失う。
たとえ鎧を着ていようと、剣で殴られればそれは鉄で殴られたことと同義である。傷を負わないわけがなかった。
光の中を駆け回り、次々とエルフを打ち倒していくアイナ。
全力で魔法を使ったせいなのか、めまいがひどい。しかし、ここで倒れるわけにはいかない。

「はあっ、はあっ、はあっ……！」
光を消すと、アイナの周囲にはエルフの男達がばたばたと倒れていた。
口の中にまとわりつくような濃い味の唾を吐き捨て、口の端についたものはブラウスの袖でこすり取る。
貴族の一人娘らしくない仕草であったし、普段の彼女なら絶対にやらないだろうが
魔法が原因の精神の衰弱と殺し合いの興奮が、誰にでも少なからずある乱暴な一面を表に出していた。
「アポロンさん……フェンネルさん……！」
よろよろと地を蹴る。この谷沿いに進めば、フェンネルの家がある。
フェンネルの家が。
フェンネルの家にはアポロンがいる。フェンネルもいる。行けば助かる。

アイナがここまで逃げて来れたのは、何より常に冷静でいられたからだ。
どれほどの恐怖だろうがどれほどの混乱だろうが、アイナを縛ることはできなかった。彼女は常に冷静だった。
その背骨が崩れ去ろうとしている。今のアイナの頭の中はフェンネルとアポロンのことでいっぱいになっていた。

見知らぬ地で、頼れる者と引き離され、何か良からぬ目に合わされようとしている。
危機的状況は確実にアイナを蝕んでいた。だから、飛来する飛び道具にも気付かない。
「……は！」

びゅおっ！

アイナの頬を光るものがかすめていった。飛び散る鮮血。バランスを崩して倒れ込む。
「あんっ！」
顔面から石の地面に倒れ込んだが、痛いとは感じなかった。うつ伏せのまま前を見ると、新たなエルフの集団がいた。
さっきの者達のような魔法の明かりではなく、たいまつを灯している。
逃げ出したアイナを追いかけて慌てて明かりを用意したのではないことを意味していた。
それはつまり、事前に十分な準備をしていたことを意味する。奇襲は通じないだろう。ならば。
「……いけぇっ！」

きいいいいいっ！

アイナが素早く左手で印を結ぶと、先頭のエルフの眼前に光の玉が現れた。
目も眩むような凄まじい光量だったが、しかしエルフは鼻を鳴らしてその光を消し去ってしまう。
「魔法を教えてもらっていたとは驚いたが」
『光源』の魔法で呼び出した光は『解除』の魔法を用いることで消す。

それは自分で構築した『光源』に限ったことではない。技量さえあれば、誰の魔法だろうと消すことは可能だ。
「エルフの魔法を使って、エルフを倒すつもりでいたのか？」
諭すような口調で言ったのは、痩せ細った男のエルフだった。オニバスと言う名を、アイナは知らない。
「……っ」
四つん這いに身を起こし、アイナは次の手を考えた。
単純な剣の技量で勝る自信はあったが、所詮は多勢に無勢である。肉弾戦では勝ち目はない。
かといって魔法の打ち合いなどに挑めるはずがない。戦う手段はなかった。
「だったら！」
アイナの左手が新たに動き始める。手首を返し、指を複雑に動かして構築したのは『重力制御』の魔法だ。
自重を軽くすれば、空に逃げることができる。戦えないなら逃げるしかない。
アイナの判断は間違ってはいなかった。だが誤算だったのは、それもエルフの魔法であったことに気付かなかったことだ。
「……！？」
手を動かし終えても、魔法が発動した様子はない。
「『重力制御』か。なかなか才能はあるようだが……
どんな魔法にも解除の方法はあると、フェンネルに教わらなかったのか？」
愕然とするアイナ。戦おうにも逃げようにも、彼女の打つ手は今の一言ですべて潰されたも同然だ。
「──なまじ、傷付けずに捕らえたのがいけなかった。やれ」
きぃぃぃぃぃぃぃぃ──

「あの女の子が見つかったらしいぞ。谷沿いの辺りだ」
「谷沿い？危なかったな、フェンネルの家の近くじゃないか」
仲間の報告を受けたエルフの戦士達が夜中の森を走っている。
一人は片手にたいまつを握っている。暗い森にもそれなりに視界を確保することができた。
だからこそそれに触れる前に、それの存在に気付く。
「フェンネルに合流されてたら危なかったな……お？」
視線の先に半透明の板があった。薄汚れたガラスを通して見たように、奥の景色が白くにごっている。
男の一人が砂利を投げてやると、半透明の板にぶつかった瞬間に火花を散らして弾けた。
「……『結界』の魔法？　なんでこんなとこに」
「女が駆り出されたって聞いたか？」
彼等の集落で、『結界』の魔法を使うのはエルフの女戦士の役目だった。
だいたい数人から十数人が集まって協力することで
最大十数メートル四方の結界を張り、その間の行き来を封じることができるのだ。
「いいや、聞かない。長老がやったんじゃないのか？」
「なるほど、中に少女を追い込んだか。とりあえず迂回して合流しよう」
エルフの戦士達は結界に沿って歩き出した。が、行けども行けども半透明の壁は続いている。
十数分ほど歩いたときだろうか。一人のエルフが言いにくそうに切り出した。
「……あのさ」
「どうした？」
「この結界を張ったのってさ、女じゃなくて……いや、その、女なんだけれども。
女達じゃなくて、長老じゃなくて、その、さ」

「なんだよ、はっきり言えよ。どうしたん――」
あらかじめ計画しておいたように同じタイミングで、エルフの戦士達は立ち止まった。
この結界を張った人物に思い当たったのだ。

かろうじて生きてはいた。
全身は黒いあざと赤い裂傷に彩られ、フェンネルの仕立てた服は奴隷のまとうぼろきれのように穴だらけだ。
穴という穴から何らかの液体を垂れ流し、アイナは木の幹に寄りかかってぐったりしている。
悔しさのためか痛みのためか、涙を流し続ける目の焦点も合わなくなってきていた。満身創痍という表現が相応しい。
「……あっ……えっ……えっ……」
低い嗚咽が痛ましいが、目の前に立つエルフ達に同情した様子はない。
「許して……痛い……助けて……」
「それはできない」
オニバスの言葉に、アイナはどうにか首だけをそちらに向ける。
ときおり助けを哀願して、後は泣き続けている。怒りも悲しみもない。とにかく苦痛からの解放を望んでいた。
オニバスに抱きかかえられた拍子に瞳に溜まっていた涙が落ち、地面に吸い込まれる。
「おねがい……たすけて……おとうさま……あぽろんさん……」
「あぽろん――ああ、あのゴーレムか」
アイナの言葉尻を捉え、ぼそりとつぶやくオニバス。
「あきらめろ。あのゴーレムなら俺が壊した。もうこの世にいない」
泣き腫らしたアイナのまぶたが限界まで見開かれたが、オニバスに

動じた気配はなかった。
「呪いたいなら呪えばいい。俺が受けよう。
　朽ちた楽園を取り戻す大儀のため、生贄となってくれ」
かちかちかちかちかち、白い歯を何度も打ち鳴らすアイナ。
震えているのか、歯を食い縛ろうとして力が入らないのかはわからない。
一度少女を哀れむような目で見た後、オニバスは振り返って配下の戦士達を見やった。
「これでもう逃げはしないだろう。儀式は明日の昼に実行する、計画の最終段階だ」

アイナを運ぶオニバスを先頭に、数十人のエルフの戦士達が森を進んでいた。
お世辞にも規則正しいとはいえない足音に傷がうずくのか、思い出すようにアイナがうめく以外は
皆とくに言葉も発さず、道中は静かなものだった。
そんな静寂が破られたのは、オニバスに従っていたたいまつ持ちが自らの影に目を落としたときだった。

「……だいぶ長く森にいたようですね、夜が明けてきました」
先頭を行くオニバスに話しかけると、オニバス以下、周辺にいた全てのエルフに妙な視線を向けられた。
「何を言っている？」
「え？ですから、夜が明けてきたと」
「お前、寝ぼけてるのか？これから夜も更けようって時間だろうが」
「え？……え？だ、だって見てくださいよ、ほら」
たいまつ持ちは皆の足元を指差して言う。
「影が薄くなってるじゃないですか。夜が明けてきたんですよ……あら？」
空を見上げたたいまつ持ちがぽかんと口を開けた。

雲に隠れていた月が出たのか、先ほどよりも明るくなったのは確かだが
空はまだまだ黒一色、星達のまたたく一面の夜空である。間違ってもまだ明けないだろう。
しかし、確かに皆の影法師は薄くなっているのだ。
エルフ達は周囲に視線を巡らせ、そして硬直した。森が光っている。

きいいいいい……

周辺の木が、木の葉が、草が、土が、蛍のそれのような淡い光を放っているのだ。
もちろん、この森に光るような習性を持つ動物や植物はない。
唯一可能性があるとすれば『光源』の魔法だが、これだけ多くの物体を光らせるには相当な人数がいるはずだ。
あるいは、その人数分の魔法を一人でまかなえるほどの熟達した魔法使いか――
「……皆！その場を動くな、警戒しろ！」
「警戒しろとはご挨拶じゃの」
オニバスの声に答える者があった。どことなく老成した響きを持つ、若い女の声。
そんな矛盾した声の持ち主を、オニバスは一人しか知らなかった。

ずん……

獣道の奥から、重く土を踏み締める足音が響いた。

ずん……ずん……

エルフ達の表情が青ざめていく中、アイナの表情だけが輝きを増していく。

ずん……ずん……ずん……

森の輝きに照らされて現れたのは、直立したゴリラのようなシルエットの巨大な石人形。
それはこの島に遭難したアイナを助けてくれた心優しきゴーレム――アポロンの姿に他ならない。
礼をするボーイのように長い腕を腰に当て、真っ直ぐエルフ達へ近寄ってくる。腰の手には長く細い足を組んで座る人影があった。

長く薄い金髪。

大きく尖った耳。

背は高いが痩せた体付き。

「フェンネル……」
オニバスが震える唇でどうにかその名を紡ぎきる。
アポロンの手の平に腰かけていたフェンネルは、いつもの老成した笑みをオニバスに向けた。目だけが笑っていない。
「オニバス。私が怒っているのはわかるな？だが、許してやらんこともない。
今すぐアイナを渡せ。そうすれば、今までのことは水に流してやっても構わんぞ？
アポロンを壊したことも、アイナを傷付けたことも、の」
「どうやって……ゴーレムは破壊したはずなのに！」
「破片があったからの。一から作るのはさすがに無理じゃが、部品があればゴーレムの一つや二つ、簡単に直せるわ。
さすがにアポロンを直すのは骨が折れたがなあ」
絶句した。自分の意思を持つほど高度なゴーレムの核を

粉々になった状態からこの短時間で修理するなど、オニバスには考えられなかった。
できないとは言わない。が、「骨が折れた」の一言で済ませられる簡単な仕事ではない。
「で？　返答は？　まさか、断ったりはせん……よな。
　おんしはそこまで馬鹿ではないと思っておったが、買いかぶりか？のお」
「……」
フェンネルがぴょんとアポロンの手から飛び降りる。無意識にオニバスは後ずさりしていた。
「オニバス？」
端正な顔をしかめて言葉を選んでいたオニバスの背後、戦士達の気配が変わった。
各自が顔を見合わせたかと思えば、その表情に並々ならぬ覚悟をにじませて魔法を構築し始める。
「恐れるな！相手は二人だ、殺せ！」
戦士の中でも階級が上らしい一人がそう叫んだが、それはフェンネルに聞こえてしまっていたらしい。
「殺す？」
面白そうに片眉を跳ね上げ、唇を吊り上げてフェンネルは指を鳴らす。
ふいにフェンネルの十本の指がざっとぶれたかと思えば、

――ぎゅるあああああっ！！！

轟音とともに光り輝く森のすべてが活動を始めた。
足元の土が蛇のように細長くうねってエルフ達を縛り上げ、
周囲の木々が生物となったようにもぞもぞと動き出し、根で歩き、
枝を腕に見たててエルフ達を羽交い締めにする。
腰を抜かしてへたり込んだエルフは、しゅるしゅると伸びてきた草

木に四肢を絡め取られ
慌てて魔法を『重力制御』に切り替え、飛んで逃げようとするエルフは天井の結界に頭をぶつけて落ちてくる。
神秘的な雰囲気すら感じ取られた輝く森。しかし今、そのようなものはまったくない。
あるのは何がなんだかわからないままに自由を奪われたエルフ達の、助けて、助けてと泣き叫ぶ悲鳴だけだ。
「殺すのか。私を」
くすりと微笑んだフェンネルが指を鳴らすと、一瞬で木は元の位置に収まり、土は崩れ、草は引っ込んだ。
「百をちょっとばかり過ぎた小童が、私を殺すとは良く言ったものじゃな。
　も一度言ってみろ。ぶっ殺す」
解放されてもなお怯えてすすり泣くエルフ達を冷笑をもって見下ろし、
フェンネルはオニバスへと視線を戻した。
「アイナを渡せ」
「……どうして……お前達は……！」
オニバスはアイナを放り捨て、腰の剣を引き抜いた。フェンネルの冷たい微笑みが消え、怪訝そうな表情に変わる。
「お前達は……お前達はどうして人間の味方をする！
　どうして人間の味方になれる！？　答えろ！」
「質問をしているのは私じゃぞ」
「いいから答えろ！」
オニバスの瞳は怒りと決意に満ちていた。夜とは思えない明るい森で、フェンネルは静かに言う。
「……おんしには、同じように見えるかも知れんがな。私は人間の味方をするつもりはない。
　ただ、その娘だけは。アイナだけは助けねばならん。母さんが何を考えていたのかを知りたいんじゃ」

フェンネルのその言葉に、オニバスは何も言わずにいた。
何も言わずに剣を持った右手を引いて身構える。歯ぎしりの音がフェンネルの耳まで届いた。
「答えたぞ。アイナを渡せ」
「断る……！」
「散々引っ張っておいてそれか。つくづく馬鹿な男じゃな……まあ、それも良かろう」
無造作に細身のバスタードソードを抜き、フェンネルは空いた左手で挑発的なジェスチャーをしてみせた。
「かかって来い、若造」

第八話「決闘」

「はあッ！」
オニバスの剣がフェンネルの衣服をかすめていく。
余裕めいた笑みを浮かべてはいるが、これは心の動きを悟られないための仮面だ。
フェンネルは感心していた。彼の知る――十五年前までのオニバスは、これほどの技量の持ち主ではなかった。
しかしオニバスも我流で修行を積んだのだろう、動きに一目でそれとわかる無駄がある。
剣だけに限って見れば、完成された剣術を使うアイナには及ばない。
同じ我流の剣でも、積み上げた年数でフェンネルにも及ばない。
「ずいぶん腕を上げたのぉ、オニバス！」
「お前を倒すために修行した」
何度か刃を交え、飛び退って間合いを取った二人。
オニバスの口調は淡々としたものだったが、内に秘める闘志は隠し切れていなかった。
「剣も、魔法もだ。……もう若造とは呼ばせんぞ！」

びゅおんっ――！

横薙ぎに振り抜いたオニバスの一撃は、清々しいまでに空を切っていた。
「――ほらほら、下じゃぞ！」
オニバスの剣の下をかいくぐって前転していたフェンネルが楽しそうに叫びつつ
すれ違い様に足元へ刃を叩き込む。不自然な姿勢からの斬撃は十分な鋭さを持たなかったが

それでもオニバスのふくらはぎを切り裂くだけの威力はあった。オニバスの顔が歪む。
「ぐっ……くそっ！」
とっさに剣を叩き付けていくものの、奇襲に傾いだ体では十分に力を乗せられない。受け止められてしまった。
刃を刃で払いのけたフェンネルの目が、オニバスの左手が動いているのを目ざとく見つける。魔法の構築だ。
伊達にオニバスを若造扱いはしていない。構築する魔法を指の動きから悟り、自らも左手で魔法を作り始める。
オニバスが放とうとしているのは『石化』だ。こちらの体を石に変え、動きを封じるつもりらしい。
確かに十五年前のオニバスは使えなかった魔法である、奇襲には最適だっただろう。
「じゃが……」
技量と知識に勝るフェンネルなら、魔法を無効化することも簡単だ。ほとんどでたらめに手首を振り回しているとしか思えない速さで『石化』に対する『解除』の魔法を完成させ
その魔力で自らの体を覆う。これで『石化』の魔法は通じない。
オニバスはそれに気付いていないようだった、『石化』を発生させようと立ち止まっている。攻めるなら今だ。
「ほれ、行くぞ！」
アイナに教わった通りに剣を両手で握り締め、フェンネルは走った。切っ先がぎりぎり当たる間合いから刃を打ち込んでいく。剣の根元は切れないと教わっている。

――がきいっ！！

オニバスが『石化』の魔法を完成させるのと、フェンネルの一撃が肩口に当たったのが同時だった。
「む！？」

腕に走った軽い痺れにフェンネルが表情を強張らせる。
刃を受けて破れた衣服の穴から砕けた石のようなものが飛び散ったのだ。その意味を悟り、剣を引くフェンネル。
オニバスは自らに『石化』の魔法をかけることで皮膚を石にし、刃を体で受け止めたのである。
「おおおおッ！！」
殺気を放ったオニバスから逃れるように転がるフェンネルだったが回避が間に合わず、脇腹を切り裂かれてしまった。鋭い感触はすぐに痛みに変わる。
フェンネルは倒れ込むも、切られた腹を押さえてすぐに立ち上がった。寝転んでなどいられない。

「……肉を切らせて骨を絶つつもりなら、もっといい魔法があろうに。『鋼鉄化』とかの。
『石化』が使えるようになったなら、すぐ覚えられたじゃろ？」
剣先を相手につけて威嚇しながら、フェンネルは疲れたように笑った。
オニバスの肩の辺りがじわじわと赤く染まっていくのが見える。
『石化』で石に変えていた肌は砕けたのだ。魔法が解ければ傷になってしまう。
「確かにな。だが『鋼鉄化』を使えば、お前は間違いなくこの戦法を先読みして
魔法を解除しただろう。切りかかってもらわねば意味がなかった」
「文字通り身を削る作戦じゃの。こりゃ、遠くから飛び道具で袋叩きにしたほうが早いかの？」
「人間に与するばかりか、母なる森への敬意まで忘れたと言うのか？」
オニバスの言葉に、フェンネルはぴくりと頬を震わせた。
これも地方のエルフによって差のある習性だが、エルフは自分の住まう土地を非常に大切にする。

故郷を荒らす行為には親を傷付けることに匹敵する抵抗を感じるのだ。それはフェンネルとて例外ではない。
本人は「思い付かなかった」と言っているが、狩りの際に落とし穴を使わなかったのも
そういう価値観あってのことなのかも知れなかった。

「俺を倒せるだけの魔法を放つつもりなら覚悟しておけ、円形闘技場が一つ出来上がるぞ。
　手加減も無駄だ。いかにお前の魔法だろうと、本気でないなら俺にだって解除できる」
「……弓矢があるぞ？」
「お前の矢に当たる確率は隕石に当たる確率より低い」
「とことん馬鹿にしてくれるの」
殺さずに無効化する魔法を使う手もあるが、例外なく構築に時間がかかる。その隙を突かれてしまうだろう。
「とどのつまり、私はおんしと正面からガチでやり合うしかないわけじゃな。面倒なことになった」
「俺を甘く見るからだ。森に潜んで攻撃魔法で仕留めればまだ楽だったものを」
「そうじゃの。おんしがアポロンを壊してくれなければ、そうしたかもしれん」
「……？」
軽く眉を寄せたオニバス。フェンネルはこきこきと首を鳴らし、どこか遠い目をして言った。
「アポロンを治して、森を光らせ林を操り、そこの小童を脅かして――
　今夜は魔法を大盤振る舞いじゃからの。
　実を言うと、おんしを魔法だけで倒せるほどの余力はないんじゃ」

オニバスの腕から放り出されたアイナが痛みにうずくまっていると、一度聞いたら忘れない足音が近づいてきた。見上げれば石巨人がいる。
「アポロン……さん……」
フェンネルとオニバスの会話は聞いていた。壊されていたことは事実なのだろう。
嬉し涙が頬の傷に染みたが、アイナは構わずに泣き続けた。
「……無事で、良かったです」
アポロンも頷き、未だ我を忘れているエルフ達とアイナの間に立ち塞がった。
この前は遅れを取ったが、それでも『結界』の魔法に閉じ込められるまでは、アポロンは互角に戦っている。
これほど頼りになる護衛はいないだろう。涙を拭い、アポロンの体を支えにしてよろよろと立ち上がる。
戦っている間にフェンネルはアイナから遠ざかっていた。何か会話をしているように見えるが、内容まではわからない。
「フェンネルさん……」

ぎぃんっ――！！

直上から何の捻りもなく振り下ろされた刃を必死に受け止めるフェンネル。
彼女が半ばアクセサリーとして装備していたこの剣は非常に造りが華奢で、
あまり強い衝撃には耐えられない。こうして攻撃を受け続けていれば、遠からず折れてしまうだろう。

「この……若造がっ！」
らしくもなく声を荒げ、フェンネルはがら空きになったオニバスの胴へと剣を振り下ろす。切っ先がオニバスの横っ腹に傷を入れた。
恐らくはあまり重い装備に衰弱した体が耐えられないのだろう、オニバスは他のエルフと違って鎧を着ていない。そのことがフェンネルには幸いしていた、多少甘い攻撃でも傷が入る。
「若造、か！」
一度は振り下ろした剣を再び振りかぶり、防御を省みない踏み込みで叩きつけていくオニバス。
剣先がフェンネルのないに等しい乳房をかすめ、布服の胸を裂いた。
「お前にそう呼ばれるようになって、何年になるだろうな！」
「さてのお！」

ぎぃん！

練度に差はあれ、二人の剣技は似通ったものだった。筋力がないぶん、あまり重く頑丈な剣は振るえない。盾も持てない。
強度のない剣で戦うために、相手の攻撃を真っ向から受け止めることはせず
かわすか、剣でさばくにしても受け流すことを重視していた。
そんな剣と剣とが、鍔迫り合いの力相撲を展開している。
気持ちが高ぶっているのだ。真剣勝負の緊張を超越した思いが、冷静さを欠くほどに戦士を熱くしている。
オニバスも、そしてフェンネルも、正面からぶつかり合う他に選択肢を持ち合わせていなかった。
「若造だから若造と呼んでいたんじゃ、別に気にしとらんわ！」
フェンネルの剣が一文字を描いてオニバスを襲う。刃はオニバスの柄に刻みを入れた。
間髪入れずに突きが繰り出されたが、これはオニバスが剣を剣に巻き付けるようにして叩き落とす。

「言ったはずだ！」
オニバスの不格好な蹴りがフェンネルの鎖骨を打ち抜いた。靴底の泥がフェンネルの服にくっきりとあとを残している。
蹴りの威力も知れようと言うものだ。防御をまるで省みない全体重を乗せ切った一撃は
エルフの非力を補って有り余るものだった。たまらずフェンネルがどうと倒れ込む。
「ぐっ……」
「もう、若造とは呼ばせないとな！」
甲高い金属音が鳴り響いた。反撃を歯牙にもかけない踏み込みから打ち込まれた刃が
フェンネルのとっさにかざした剣に受け止められる。
「おおおおおッ！！」
防御されたと見るや、オニバスは容赦なく次撃を見舞おうと大振りに得物を振りかぶっていた。
目をむくフェンネルの手から、ぽろりと柄がこぼれ落ちる。あまりの衝撃に腕の感覚が失われてしまっていたのだ。

ざすっ――！

「っあ……が！　この……！」
白刃の描く軌跡が右の肩口に吸い込まれる。
あまりに力任せの太刀筋には鋭さがなく、幸いなことに急所は外れたようだったが
それでもオニバスの剣は拳一個半ほどの肉を断ち割って、フェンネルの首筋近くに鮮血を噴き上がらせた。
体に食い込む刃をとっさに握り締めて切断作業を中止させ、自ら退いて強引に剣を体外に追い出した。
研ぎ澄まされた刃を握った左手はずたずたに裂けていたが、構わずフェンネルは血塗れの指を動かす。

苦痛に歪む視界の中、フェンネルは右肩の傷に『治癒』の魔法をかけた。
みるみる傷は治り痛みも引いていったが、それでも目まいだけは消えない。
魔法は使用者の精神に大きな負担を及ぼす。
さすがのフェンネルも限界が近付いているようだった。血を大量に失ったことも災いしているのだろう。
「ゴーレムを直し、同胞を威嚇し、万が一の援軍を避けるために『結界』を張り――
限界のようだな、フェンネル」
「『結界』にも気付いておったか」
「つい一瞬前にな。……援軍を避けると言うよりは、単純に俺達の足止めのためか。
集落に辿り付きさえしなければ、あの少女を殺すことはできない。だから集落に辿り付けないよう『結界』を張った。そんなところか。
ゴーレムの腕に乗ってきたのも、少しでも力を温存しようとしたため」
「いろんな意味でレベルが上がったのお。本当に嫌になるわ。正解じゃよ」
「あっさり白状するのだな」
「何を言って否定しても、説得力がないじゃろう？」
「確かに」
右肩を治したのは当然だ、剣が振るえなくなる。
しかし傷付いた左手を治さなかったのは何故か。左手が傷付いたままでは魔法が満足に構築できない。
治したところでもう魔法を構築する精神力はないのかも知れないし、そもそも左手を治せるだけの精神力が残されているのかさえ怪しいものだ。
それほどまでにフェンネルは傷付き、疲れきっていた。

「……わからないな」
オニバスがつぶやいた。肩で息をするフェンネルを心底悔しそうに見つめ、続ける。
「何故それほどまでに、あの少女を守ろうとする？
見捨ててしまえばそれで済むだろう。お前は言ったな、人間に味方しているつもりはないと」
「ああ。……ほんの六十歳ちょっとの小童ではあったが、私とて四百年前の戦争を直に体験したエルフじゃ。
ウィナリスの人間を許すことはできんよ」
「ならば俺達とともに来い。その少女さえあれば、ウィナリスはエルフの手に取り戻される。
封印を解き、さらにお前が仲間となったなら確実にだ。楽園は再び俺達のものになるんだ」
「悪くはないかも知れんのお……じゃがな」
フェンネルの荒い息が意図的に規則正しく整えられ始める。
だるさを忘れるように閉じられた目が開かれたとき、そこには新たなる闘志が光となって宿っていた。
「どうして空は青いのか。どうして海水はしょっぱいのか。
世界の生い立ち、生物の存在意義、過ぎ去ってしまった歴史の真相――
知らなくても何も困りはせんが、どうしても知りたくなることがあるじゃろう？」
いつの間にか近くでアポロンに守られながら戦いを見守っていたアイナを横目で盗み見、フェンネルは笑った。
「私にもある。それはアイナを守らねば知ることはできないことで、
アイナと一緒にいなければわからないことなんじゃよ。見捨てることはできん」
誰も気付いてはいないことだったが、だんだんと地面に落ちる影が夜闇に溶け込み始めている。
それは森の輝きが弱まっている証拠であり、フェンネルの力が尽き

かけている証拠だった。
しかしフェンネルに危なげな様子はない。決意に満ちた眼差しを真っ直ぐオニバスに向け、微動だにせず立っていた。
「それにの、オニバス。おんしのやり方で楽園は取り戻せぬよ。
ウィナリスは取り戻せるかも知れん。じゃが、四百年前までの楽園は帰っては来んのじゃ。
楽園は朽ち果てた。何をしても無駄じゃよ、新たに育てぬ限りはの」
「お前の言いたいことはわかる」
一人頷き、オニバスはすっと右手の剣を持ち上げた。切っ先をフェンネルに向ける。
フェンネルもそれに習った。剣先三寸が重なり合い、きんと澄んだ音色を一度だけ奏でた。
「だが――今更あきらめることはできない。絶対にな。
ここでウィナリスを取り戻せないのであれば、我らも楽園とともに朽ち果てるまでだ」
「だろうの。そのつもりがあったなら、おんしはとっくにそうしていたじゃろう。
……さて、これ以上はやめにしておかんか？やはりおんしのことは嫌いになれんよ」
「ああ、お前に情を移されては俺も気分が悪い」
きりっ。柄を握る拳に力が込められ、刃と刃が擦り合って鳴く。
かすかな音だったが、それで十分だ。
二人が同時に右足を引き、近すぎた相手を再び殺傷圏内に捉えたかと思えば、
――ぎぃぃぃんっ！！！
首筋を狙って薙ぎ払われた剣同士がぶつかり、耳にたこができるほど聞かされた高音を放つ。

「おああああッ！！！」
ほとんど無意識に雄叫びを上げて斬りかかるオニバス。呼吸を整えることもせず、フェンネルをたたっ切ろうと剣を振るう。
唸りをあげて肌を裂いていく刃をどれも寸前で見切ってかわすが、それでも避け切れない攻撃はある。
避けた直後、乱れた姿勢で防いだ剣にバランスを崩され、フェンネルがふらりとよろけてしまう。
迫るオニバスの刃。それを受け止めようともかわそうともせず、ただフェンネルは

がすっ！！

コンパクトに突き出した左のつま先をオニバスのみぞおちに食い込ませていた。
蹴り出した左足が地面につくやそれを軸足に踏み込み、お返しとばかりに肩を狙って刃を打ち下ろす。
蹴られた拍子に緩めてしまった右腕の力を取り戻し、オニバスは剣をフェンネルではなく、彼女の剣へと叩き付けた。
当たり所が良かったのか悪かったのか、フェンネルの剣は中ほどからぽっきりと折れてしまった。
「「っ――！！」」
折れて宙を舞う剣先を挟み、交錯する両者の視線。
フェンネルは短く軽く情けなくなった剣を突き出したが、オニバスはそれを余裕を持って受け止める。
鍔と鍔が激突して鈍い衝撃を伝えた。体重を乗せるように剣を操り、フェンネルの剣を押さえ込むオニバス。
長さの半分になった剣はオニバスの意のままに流れ、土にうずまった。何の抵抗もなく。
「なっ……」
フェンネルは剣を封じようとするオニバスの動きに逆らおうとして

いなかった。
押さえ込まれると見せて剣を手放し、致命的な隙を作らせたのである。
オニバスは剣を両手で握っていた。防御はできない。フェンネルの右手が拳を固めた。狙うは、驚愕に引きつるオニバスの細い顎。
「――らあああああっ！！！！」

天まで届けとばかりに石を空へ投げて遊ぶ子供のような、そんな腕の振り。
己に残された力と思いを注ぎ込んだ拳が振り抜かれた。
「っ――」
自らの勢いに振り回されて転んだフェンネルと、パンチの軌道に沿って反り返ったオニバス。
ほとんど同じタイミングで大の字に倒れた二人だったが、立ち上がったのは一人だけだった。

「こんなしんどいの、これっきりにして欲しいもんじゃのお……」
震える足で地を踏み締めたのは、金髪の女エルフ。
フェンネルはうつろな目をしてそうつぶやき、すぐにぺたんとその場に座り込んだ。

第九話「使命」

また一人、里のエルフが死んだ。
原因はわかっていた。重度の栄養失調だ。

クロノガルデニアはろくな穀物が育たない。
ここに住む限り、野草を集め、狩りで生計を立てることを余儀なくされるのだ。
食べ物にも住むところにも困らないウィナリスでの生活に慣れていたエルフ達は
その生活に耐え切れず、次々と死んでいった。

俺の母親は戦争前から俺を身ごもっていた。
運が良かった。戦争前だったから――父が人間だったからこそ、脆弱なエルフのそれではない
頑丈な体と十分な魔力を手に入れて産まれてこれたのだ。
しかし、クロノガルデニアで産まれたエルフはそうはいかない。
エルフ同士の近親婚が続いて血が濃くなりすぎたのか、それとも母親の健康状態が一様に悪くなったせいか、まともに育つエルフは少なかった。
成人しても身長は子供並。魔力も低いまま。必要以上に痩せてしまう。
五百年生きられるかどうかすら怪しいものだった。
年長のエルフが死に絶え、最年長――里の長老となった俺が真っ先に向かったのは、人間の集落だ。
使われる機会のなくなっていた貨幣をありったけ持ち出し、食料と薬を手に入れた。
この衰退の原因は、慣れない環境と食料がもたらした栄養失調だ。

食べ物さえあれば、目の前の危機はしのげる。
俺が山と買い込んだ糧を目にした里の若いエルフ達は、口をそろえてこう言った。
「長老の命令と言えど、これを食べるわけにはいきません。
人間に日々の食事を乞うてまで生き長らえるつもりはないのです。
申し訳ありません」

何を言っても無駄だった。戦争を直に体験していないエルフ達にすら人間への憎しみは根付いてしまっていたのだ。俺の力では、どうあってもその憎悪を消すことはできない。
これでは遠からず里のエルフは全滅してしまう。しかし、その状況から脱出する唯一と言っていい方法は潰された。

クロノガルデニアのエルフを率いる者として、俺は決断を下さねばいけなかった。

母親から聞いたことがある。人間とエルフの確執の原因は、たった一つのゴーレムであると。
エルフが人間の依頼を受け、当時の魔法技術の全てを注ぎ込んで作り上げたそのゴーレムは
制御法も完成しないまま力だけが一人歩きし、暴走してしまったのだそうだ。
暴走したゴーレムは全てを徹底的に破壊し続けた。最後にはエルフが強力な魔法を用いて封印したらしい。

俺は数少ない当時の文献を徹底的に調べ、封印を解除する方法を調べ上げた。
ゴーレムの封印を解いてウィナリスに放てば、ゴーレムはウィナリスの全てを破壊し尽くすだろう。
魔法の使えない人間にこれを防ぐ術はない。人間さえいなくなれば、

ウィナリス島に新たなエルフの里を作ることができる。
俺は封印解除を実行に移した。目標は、クロノガルデニア島の近辺を進む人間の貿易船。
船の甲板に降り立つと、人間達は怯えたように俺を見た。次いで襲いかかってくる。
戦争が終わって三百年近くの年月が過ぎ去っていた。この人間達に罪はない。だが。
こうすることでしか、同胞を救えないのだ。
魔法を持ってすればたやすいことだ。俺は船に火をかけ、船員を一人残さず焼き尽くした。

燃え上がる船を上空から見下ろす。黒焦げの人間が炎をまとって次々と海に飛び込み、すぐに浮き上がってくる。
はるか空のかなたにいても聞こえてくる悲鳴。罪もない人々の怨嗟の声が俺の胸を締め付けた。
いくら吐いても胃液の逆流が止まらない。涙は流れ続ける。嗚咽が収まらない。
「あ……あっ、あっ、あっ……ああっ」
俺が奪ったのだ。罪もない人間の命を。未来を。全てを奪ったのだ。
濡れてにじむ視界の隅で、燃え尽きた船が沈んでいく。穴という穴から液体を垂れ流し、俺は島へと逃げ戻った。
「あああああああっ……！！　あああああああああああっ……！！！」
俺は泣き続けた。こんな方法しか思い付かない自分を呪いながら、ただひたすらに泣き続けた。

「……」
意識を取り戻したオニバスが目にしたのは、木々の隙間から覗く夜

空だった。
周りではエルフ達が心配そうに自分を取り囲んでおり、少し離れたところからは少女とフェンネルの声が聞こえる。
「長老！」
「長老、ご無事で！」
目を開いたオニバスにエルフ達が騒ぎ出すが、その声はオニバスには届いていなかった。
大の字に寝転がったまま、夢の内容を噛み締める。
クロノガルデニアのエルフを率いる者として、もう一度決断しなければならない。

「フェンネルさんっ！」
ふらふらと寄ってきたフェンネルの体を抱き止めるアイナ。身長の割に軽いから、子供の腕でも支えられる。
フェンネルの重さに全身の傷が痛んだが、再会の嬉しさに比べれば些細なことだった。
「大丈夫ですか！？」
「ああ、深い傷はない。それよりおんしじゃ、無事か？」
「は、はい、あちこち痛いですけど、動けないことは」
アイナは頷いた。魔法を受けた体は打撲がひどく、歩く度にしくしくと痛んだが
それでも今のフェンネルの疲れ加減を見ればまだマシだと思えた。
以前二日ほど徹夜が続いた父を見たことがあるが、そんな感じである。眠そうな半眼とおぼつかない足取りが似ていた。
魔法を使うことによる魔力の消費――精神力の消耗からくる疲労感はアイナも知っているが、こんなになるまで魔法を使ったことはない。
そこまでして戦い、自分を助けてくれたフェンネルを見上げている

と、自然と涙が込み上げてきた。
「……ありがとうございました」
「なんじゃ、泣くことはなかろう。もう怖いことはないぞ」
「そうですね」
フェンネルがぽんとアイナの頭に手を置き、次いで何やら魔法を構築した。
『結界』を使ったがどうのとか言っていたから、それを解除したのだろう。いつの間にやら森の輝きは消え失せていた。
「とりあえず、傷の手当てをせねばならんな。アポロン、頼む」
フェンネルの声に従って、アポロンがひょいとアイナを抱え上げて肩に乗せた。
そして自らの主へも手を伸ばし、同じように肩に乗せようとして、

きいいいいっ……！

魔法の構築音を聞いた。
「――えっ！？」
アイナが驚いてエルフ達を見る。彼らもまた予想外の事態に混乱しているようだ、皆が空を見上げてうろたえていた。
足元でフェンネルが歯を食い縛る音が耳に届く。エルフ達の輪の中心には、そこにいるべきエルフがいなかったのだ。
目をこらせば、夜空に浮かぶ灰色の雲へ突っ込んでいく人影が見える。
「オニバス……！　あの馬鹿！」
フェンネルが素早く右手を動かし始める。慌ててアポロンがフェンネルの右腕を掴んだが、フェンネルはそんなゴーレムを睨み付けた。
「離せ、アポロン！　このままじゃオニバスがやばいんじゃ！
――大丈夫、『結界』と『光源』の制御をせんでよくなったからの、海まで行って帰ってくるくらいわけないわ」
「海……？　何をしにいくんですか！？」

フェンネルの口から出た脈絡のない単語に混乱するアイナ。フェンネルは説明するのも面倒くさそうに彼女に背を向け叫んだ。
「オニバスが飛んでいきおった！　あいつを放っておくと寝覚めが悪いんでの、追いかける！」
「そんな！？　フェンネルさん、もうヘトヘトじゃないですか！」
「さっき言った通りじゃよ。節約すれば往復分くらいの魔力はひねり出せるんでの、問題はない。
　ただ、追いつけるかどうかは怪しいもんじゃがの」
「そんな……向こうだって疲れてるはずなのに」
アイナが理不尽そうに唇を噛み締めたが、それに対するフェンネルの返答はどこか涼やかなものだった。
「死ぬ気でやればたいていのことができるのは、エルフも人間も同じじゃろ？
　つまりはそういうことじゃ。……アポロン、アイナを頼んだぞ！」
目をむいたアイナの視界を一瞬さえぎり、フェンネルが漆黒の空へと飛び出していった。

ごおおおおっ――

風を切る音だけが聴覚を支配していた。
何の迷いもなく前だけを見据え、高速で自分の体を飛ばしていたオニバスは
ふと自分の名前を呼ばれた気がして振り返った。
金髪のエルフがのろのろと自分を追いかけてくる。
「フェンネル……」
小さくつぶやき、オニバスはやや大げさに正面へ向き直った。
目元を拭った右の拳から冷たい雫が散ったのは、何かの錯覚だろうか。

「待て、オニバス！待てと言っておるじゃろが！」
端正な顔に深いしわを刻み、妙な臭いのする汗を垂らして
フェンネルは必死に魔力の制御を行っていたが
単純に残存の魔力に差があるのか、それとも覚悟の差か、フェンネルとオニバスの距離は広がるばかりだった。
『重力制御』を利用しての飛行はかなりの魔力を消費する高等技術だ。
その分、術者のコンディションの違いが明確に現れる。フェンネルはオニバスを視界に捉え続けるのが精一杯だった。
「くそっ……くそっ……！」
ともすれば落ちそうになるまぶたと体を叱咤し飛ぶフェンネル。
彼女からすれば永遠に続くとさえ思えた苦行は、しかし唐突に終わりを告げることとなる。オニバスが止まったのだ。
「っ、は――オニバス！」
空中にふわりと直立するオニバスから少しの距離を置いて止まり、フェンネルは声を張り上げた。
フェンネルと同じ距離をフェンネルより速く飛んできたのにも関わらず、オニバスに疲れた様子はまるでない。
ほんの少しだけ呼吸が荒くなっているだけだ。その深い息も、酸素不足からくるそれと言うよりは
どこか泣くのをこらえているような、鼻の奥がツンとするのをこらえているような調子であった。
「何をするつもりじゃ？」
「決まっている。俺は俺の果たすべき役割を果たすまでだ。長老としてな」
「ミスリルの封印を解除するつもりじゃな？」
沈黙が肯定の意味であることは間違いない。
「冗談もほどほどにせんか！」

再びフェンネルが声を張り上げ、頭痛がひどくなったのか頭を押さえた。
「ミスリルが何を持って封印されているか、わからんはずがあるまい！」
「ああ、知っている」
「ならば止めろ！今すぐ止めるんじゃ！
真に長老として果たすべき役割は、生きてエルフを導いてやることじゃろう！
こんなところでおんしが死ねば、それこそ同胞は死に絶えるぞ！？」
「里の者はそこまで馬鹿ではない。あいつらはあいつらなりに生きていけるはずだ。
……俺はあいつらに約束した。命に換えても、ウィナリスの人間を滅ぼす」
そう言って剣を鞘ごと外すオニバス。はるか下から響く波の音がやけに大きい。
いつの間にか二人は島の上空を飛び出して外海へと出てしまっていた、
アイナがこの場にいれば、その海を見て表情を引きつらせることだろう。
二人がいるのは人間がエルフの領海と呼ぶ、忌み嫌われた海域の上空だった。
「そうして取り戻した楽園をさらに大きくするのは、あいつらの役目だ。
あいつらがそれを望まず、クロノガルデニアで生き続けると言うのなら、それでもいい。
俺の役目は封印された最強のゴーレムを復活させて、ウィナリスをエルフの手に解放することだ」
「目を覚ませ、オニバス……
おんしは最初に立てた目標に囚われすぎているだけじゃ！落ち付

け！」
「……」
オニバスはふっと笑い、地に付いていない足元に目を落とすと、
――ぶんっ。
いきなり手の中にあった剣をフェンネルへと投げ付けた。
あまりに急に飛来してきた物体を回避することなど今のフェンネルにはできず、
細身のそれを薄い胸に抱え込むように受け止める。
「オニバスっ！？」
フェンネルが叫ぶ頃には、オニバスの体は海に向かって落下を始めていた。
最後の力を振り絞り、重力加速度に自らの魔力をプラスしてオニバスを追いかける。
腕もちぎれよとばかりに限界まで伸ばした右腕は、関節の軋みもむなしくオニバスを掴むことはなかった。
ぱしゅっ――
指先が彼の衣服をかすめた瞬間、彼がフェンネルに微笑んだ瞬間、
オニバスの体が燃える金属のように光り、光は七色の輝きを放ち、
輝はオニバスの姿を消し去った。
「……」
フェンネルが呆然と見つめた自らの指先を、風に舞い飛んだ涙が濡らす。
一人のエルフの命が失われたことにも我関せず、潮臭い水面は静かに揺れていた。

第十話「追放」

エルフ達に案内された森の奥にそれはあった。
土盛りの頂きに十字架のごとく突き立てられた、オニバスの剣。オニバスの墓だ。
周囲には似たような土盛りが乱立している。ここはエルフの墓地らしい。

「あまりきょろきょろしとると、田舎者じゃと思われるぞ」
落ち付かない様子で辺りを見渡すアイナの頭にフェンネルの手が置かれた。
台詞は冗談で口調も優しげだったが、これっぽっちも笑っていない瞳はオニバスの墓標に注がれている。
視線を剣の柄飾りに向けたまま、フェンネルは小脇のエルフに向かって言った。
「これからどうするつもりじゃ？」
「長老が復活させようとしたゴーレムが復活したなら、それを利用することを考えなくもない。
　それまでは、我々はこの島で生きる」
「意外と動揺はしておらんようじゃな」
「長老は我々を救うために命を投げ出された。我々が先を見失っては、長老に申し訳が立たない」
オニバスの後を継いだらしいエルフは、彼もまた話し相手と視線を合わさずに続ける。
「だがフェンネル、間接的にだが長老を殺したのはお前だ。我々はお前を許すわけにはいかない」
エルフの集落で最も強かったオニバスより強いフェンネルにそんな台詞を吐くなど

殺される寸前のような恐怖を感じる行為であっただろう。しかし、エルフに臆した様子はない。
勝てない相手に喧嘩を売る恐怖を、敬愛する指導者を殺された怒りが上回っているのだ。
「この島から出て行け」
瞳にはっきりとした敵意を宿らせ、エルフはフェンネルを睨み付けた。
アイナが理不尽そうに眉間にしわを寄せ、アポロンに至ってはその岩の右拳を握り締めたが
フェンネルは彼女等を片手で制した。そして返す。
「私がオニバスを殺したと言うのか？」
「貴様がその少女を奪わなければ、長老が死ぬことはなかった」
「アイナが死ぬことになるんじゃがの、その場合」
「知ったことか」
「人間嫌いもほどほどにしといたほうが良いと思うぞ。……まあ、良かろ」
フェンネルは何の未練も残さずくるりとその場で向きを変え、森の獣道を引き返す。
数歩歩いてふと思い出したように立ち止まると、肩越しにエルフを見やった。
「二度と会うこともないじゃろ。達者での」
そのまま歩き去ってしまうフェンネルの背中を、アイナとアポロンが慌てて追いかけ始めた。

小走りに追い付いたアイナがフェンネルに問いかけた。アポロンに口があったならアイナと同じことをしていただろう。
「いいんですか？　本当にこの島を出るつもりなんですか？」
「おお。そりゃ四百年は暮らした故郷じゃ、未練がないと言えば嘘になるが……
いろいろと思うところがあるんでの。とりあえずは出ていく。あ

と千年もしたら帰ってくるかも知れんがのお」
フェンネルは面白そうに言った。にこにことした笑顔は強がりや空元気ではなく
ただ本当に楽しさを表情に出しただけの笑顔であり、アイナはあっけにとられてしまう。
「……楽しそうですね」
「楽しいぞ。実は六十歳でここに住み付いて以来、他の地を踏んだことがなくての。
　これからは世界のあちこちを旅してみようかと思っておる……いかん、わくわくしてきおった」
「すいません、私のせいでこんなことに……」
「だから私は楽しんでおると言っておろう。それに助けた恩は返してもらうからの、気にするな」
きょとんと見上げたアイナの頬を突ついたフェンネルが、背中のアポロンを親指で指して言った。
「最初の目的地はウィナリスじゃ。しばらくはおんしの家に世話になるからの、アポロンが住めるような頑丈な部屋を用意してくれな」
「ほ、本当ですか！？」
頷くが早いかアイナに抱きつかれ、アポロンに困ったような笑顔を向けるフェンネルであった。

そいつは自我を持ってしまった。
そいつは本来、創造主の命令を忠実にこなすだけの兵器であり、それ以外の意思や自由を持たなかった。
それでも、そいつは自我を持ってしまった。それでそいつは封印された。
勝手に生み出されて、勝手に捨てられた。そいつは暗い海の底に封

じられた。
そいつは怒った。怒り狂った。
生まれたばかりの子供のようなそいつの脳裏に、自らを封印した者の姿が強烈に焼き付けられる。

『エルフだ。薄い金髪を長く伸ばした。妙齢の女エルフ。そのエルフが。自分を封印したのだ』

指一本動かせない生き地獄の中、そいつは自らを封じた者の姿を忘れなかった。
目を開いていても何も見えない暗闇の中、そいつはその者の名をずっと心で復唱し続けた。

『許さぬ。この戒めが解けたなら。あのエルフを真っ先に殺す。瞬き一つのうちに。肉塊に変えてくれる』

そいつが知り得る知識ではないが、そいつが封印されて四百年の時が過ぎていた。
ふとした拍子に、そいつは気付く。右腕がどうにか動かせることに。
そいつはまともな自我がないなりに喜び勇んで、全身の戒めを破壊し始めた。
その過程で右足が膝でちぎれ、左腕が根元から吹き飛ぶも、そいつはまるで気にしなかった。
一心不乱に束縛を壊し続けたそいつは、やがて四肢の一部と引き換えに自由を手に入れる。
冷たい水の満ちる海の底を這って移動し、そいつは喜びに体を打ち震わせた。

『殺す。殺してやる。必ずこの手で殺してやるぞ。フランネル』

貿易船は実用本位の船だ、客船と違ってよく揺れる。しかし幸運なことに、この三人は酔いに強かったようだ。
フェンネルは揺れなど感じていないかのように裁縫に精を出し、アポロンも壁際におとなしく腰を下ろしてアイナと声なき談笑を楽しんでいる。

「じゃーん！どうじゃ？似合うと思わんか？」
三人――しかも一人はアポロン――で使うにはいささか狭い貿易船の船室で
フェンネルは今まで何やら針を通していた布切れをぱんと張って見せた。
今の衣服とコーディネートされた若草色の布に、オレンジ色で精緻な花の刺繍が施されている。
揺れる船の中でよくこれだけ見事に縫い上げたものだ。アイナは素直に感心した。
「で、それは何ですか？」
「バンダナじゃよ、バンダナ」
そう言うと、フェンネルは布をするりと頭に巻き付けた。言うだけあって、そこそこ似合う。
前髪は遠慮なく垂らしていたが、そのぶん布の位置が後ろよりになっていて、大きな耳を完全に覆い隠している。
「で、あとはこれ」
フェンネルはどこからか眼鏡を取り出し、位置を合わせて数度まばたきをした。
眼鏡とバンダナで変装したフェンネルは服装のスタイルの変化も相俟って、アイナの見る限りまるで別人だ。
「これならウィナリスでも大手を振って歩けるでしょ？
　あとはこういう風に口調を改めておけば、いつ男からお茶に誘われてもＯＫってもんよ」

「と言うか、見た目相応の話し方もできるんですね」
「当たり前じゃない。年寄り臭いしゃべり方は趣味でやってるって言わなかった？」
「言われましたけど……やっぱり、違和感があります」
「……はは、私もじゃ。本当にすっかり板についてしもうたわ」
フェンネルは肩をすくめた。

確かに、フェンネル達エルフがウィナリスの人間の前に姿を現せるはずがない。
皆に逃げ惑われ、下手をすれば攻撃の対象になってしまうだろう。
どうにかして正体は隠さねばならなかった。
今はさすがに脱がせているものの、乗船時にアポロンはシーツを利用して作った特製のローブに身を包み
足には消音のために綿を詰めた布袋をくくりつけている。
こうして肌を隠し、足音をごまかし、異常に長い腕を隠せば、どうにか非常に大柄な男で通すことができるだろう。
宗教上の理由と嘘をつくつもりでいる、とフェンネルは言っていた。
「一応、マフラーも作っておくかの」
「どうするんです？この初夏に」
「少々暑いじゃろうが、口元を隠す。この美しすぎる顔を見てエルフと勘付く男がおるやも知れん」
「壮絶に考え過ぎです。明らかに怪しいじゃないですか」
「そんなことはないぞ、赤いマフラーは正義のしるしじゃからな」
「何の話ですか」
「バッタの改造人間の話じゃよ、百十数年前に流行った安小説なんじゃが、やっぱり知らんか。
……まあ、それはともかく、裁縫は暇潰しじゃ。何なら、下着でも縫ってやろうかの？」
「何でそこで私の下着が出てくるんですか」
「もう十四じゃろう。かぼちゃパンツは卒業しても良い年頃じゃ」

「黙れ」
「口調を変えて怒るなと言うに……　せっかくのスカートが台無しじゃな、風に舞ったらどうするつもりじゃ」
「手で押さえます」
「なるほど、するとスカートが朝顔の花を咲かす。その中心にはアイナの下着。
　正面や横に効果が薄いことを差し引いても、後方のギャラリーに与える効果は凄まじいものがあるのお。
　おんし、なかなかテクニシャンではないか……アポロン、どうした？」
視線を追ってアイナが横を向くと、アポロンがもじもじと手を擦り合わせて虚空を見つめている。
二人の視線に気付くと、すぐに両手をぶんぶか振った。『違う、違う』というジェスチャーと思われるが、何が違うのか。
「どうしたんですか？船酔いなら、甲板にでも行きます？」
「放っておけ、酔うことがあるかどうかは知らんが、酔ったところで吐くものがない。
　……ふふ、私の女のカンにビンビンきとるわ」
フェンネルはいきなり立ち上がるとアポロンの鼻先――もとい顔の宝石にずびしと指を突き付けて
「アポロン！おんし、アイナのパンチラ妄想して興奮しとったろう！」
「ええっ！？」
アポロンは憤慨したようにフェンネルへと両腕を振り上げ、すぐに小脇で頬を赤らめているアイナに向き直って首を横に振りまくる。
「違う？何が違うんじゃ、この助平ゴーレムめ！
　まったく、私という女神と一つ屋根の下で暮らしておきながら理性を保っていられたのは
　そういう趣味の持ち主じゃったからか！いやもう、付き合って以

来の疑問がようやく解けたぞ！わはははは」
アイナにはアポロンの声は聞こえないが、それに答えているフェンネルの声は当然ながら聞こえた。
心底おかしそうに笑っているフェンネルを相手に必死の弁解を試みているアポロンを見ると
どうやら当たらずとも遠からず的なことを考えていたようだ。
「アポロンさんでも、そういうこと考えるんですね」
人畜無害の権化のような性格のアポロンにも、思わぬ一面があるようだ。
アイナまでもが笑い出してしまい、アポロンはとうとうスポットライトを背中に浴びつつ肘をついてしまう。
「わはははは、嫌われたか、アポロン！初恋は潰えたようじゃのお、わはははははっ、はははのはー」
笑い転げるフェンネルを捕まえようとして避けられ、アポロンは本気で悲しそうに輝く宝石をアイナに向けた。
どことなく潤んでいる気すらする青いそれを苦笑まじりに小突き、アイナは立ち上がって尻をはたく。
「大丈夫ですよ、そのくらいで嫌いになったりしませんってば」
子犬のように首を傾げるアポロン。
「本当です、アポロンさんのことは好きですから、そんな目で見ないで」
微笑まれて安心したのか、アポロンはべたーっとその場に突っ伏してしまった。
そんな石巨人の姿にあらためて苦笑いし、アイナは部屋のドアを開いた。水の侵入を防ぐための段差が少し邪魔である。
「わはは……どこ行くんじゃ？トイレか？」
「ええ、まあ」
年頃の娘の羞恥心に言葉を濁したアイナが部屋を出て行き、狭い船室にはフェンネルとアポロンの二人が残された。

「何気に逃げられたんじゃないかの？　トイレという名目で、おんしのそばから離れたんじゃな、アイナは」
フェンネルのからかいに物凄い速さで顔を上げるアポロンだったが主の優しげな表情に戦意を削がれたのか、とくに反撃はしなかった。もそもそと座り直す。
「冗談じゃよ。……おんしの気持ちもわからんではないわ、私とて時折はっとすることがあるからの」
アポロンは頷いた。この場にアイナがいればその言葉の意味を問い質したのだろうが
もしそうなれば、フェンネルは年の功でのらりくらりとごまかしたに違いない。
「さて……ちょいと甲板に行って来るわ、留守番しとれ」

手をハンカチで拭いながら狭い通路を歩いていたアイナはすぐ前を横切っていくフェンネルを見つけた。
フェンネルのほうは彼女に気付かず、いつも通り気負いのない足取りで歩き去る。あちらは甲板だ。
「……？」
小首を傾げ、アイナはその後を追う。

「フェンネルさーん」
甲板の柵に肘をついて海を眺め、潮風にブロンドを弄ばせていたフェンネルは
小走りに寄ってくるアイナを見て目を細めた。
海はすでに青い色を失って久しい。オレンジの輝きがそれに取って代わっていた。
「アイナか」
「どうしたんですか？　潮の香りは嫌いだったんじゃ」

「おお。どうも好きになれん」
そう言って視線を夕日の沈みかけた海に戻す。
何となくフェンネルの隣に並び、柵に手をかけたアイナ。横目でフェンネルを見やると、計ったようなタイミングで声をかけられる。
「のお、アイナ」
「はい？」
「おんしが乗ってた船が沈んだのは、ここじゃろう」
「え……」
言われてアイナはあちこちに視線を巡らせるが、溺れ死ぬかも知れない瀬戸際に周りの景色などは覚えていられない。
「わ、わからないです」
「そうか。まあ、おんしが沈められそうになったのは間違いなくここじゃ」
「わかるんですか？」
「オニバスが死んだのはここじゃからな」
フェンネルはさらりと口にした言葉は、声に反した形容しようのない重みがあった。
次に言うことが見当たらずに目を逸らしたアイナへフェンネルはさらに問う。彼女もまた、アイナを見ていない。
「ウィナリスに、ここを通ると船が沈むという海域の伝説はないかの？そんな感じのニュアンスの噂が」
「エルフの領海のことですか？」
「それ、内容を話せるかの」
「ええ」
アイナは自分の知っている領海の伝説を語り始めた。
ウィナリスでの海難事故がそこに集中する、不可解な海域があること。
人に仇成す海という意味を込めて、エルフの領海と名付けられたこと。

沈没した船の生き残りに、実際にエルフにやられたと主張する者が多いこと。
傭兵だった父も自分も、エルフの領海で実際に船を沈められたこと。父のほうの詳細は知らないが、自分は確かにエルフが船を焼き尽くすところを目撃したこと。

「そのエルフが、フェンネルさんに見えたんです」
「なるほどの」
フェンネルは納得したように頷き、ふいに右の袖を大きくまくった。細い腕に彫り込まれたくさび形の刺青がアイナの目に飛び込んでくる。
アイナは思わず後ずさってしまった。この刺青を見ると、恐怖を思い出してしまう。
「船で見たエルフの刺青と、風呂場で見た私の刺青が同じものだったわけじゃな」
「はい……」
「疑問に答えるとの、これは証じゃ」
「証？」
「百になると彫り込まれる。だいたいその年齢で成長が止まるからの、成人の証じゃ。
今のクロノガルデニアの小童どもは知らんでも、オニバスが百歳になったばかりの頃は
まだまだ年長者も生きておったはずじゃ、彫られていて当然じゃろう」
「成人したことを証明する刺青ですか」
「同時に、クロノガルデニアのエルフであることを示す部族の証でもある。
ウィナリスの辺境にもおるじゃろう、体に奇天烈な化粧をした蛮族が。あんな感じじゃな」
「……じゃあ、私が見たのは」

「オニバスじゃな。奴は背の割には痩せておるし、私と見間違えてもしょうがないかも知れん」
フェンネルが船の一件を知らない理由がようやくはっきりした。
アイナは安堵とともに、新たな疑問が鎌首をもたげるのを感じた。

「オニバス……さんは、どうしてそんなことをしたんでしょうか？」
暴れる髪を手で押さえながらアイナが続ける。
「何百年も前からエルフの領海の伝説はあるみたいですけど、
それは全てオニバスさんがやったことなんですか？」
「そうじゃろうの。そんなことをする理由と、そんなことのできる力を持ち合わせた奴は
クロノガルデニアにはあいつ以外おらん」
「では、なぜそんなことをする必要があったんでしょうか」
「ふむ。……そうじゃの、暇じゃし話してやるか」
身内の恥を晒すようで恥ずかしいんじゃがな、とフェンネルは笑った。
自嘲の微笑みを浮かべてアイナの背中を押し、部屋に戻るようながす。
「フェンネルさんは？」
「ヤボ用での。もう少ししたら行くから、アポロンでもいじめて遊んどれ」
「わかりました。アポロンさんはいじめませんけど」

船室に戻るアイナの背中を見送り、フェンネルは再び海へと向き直った。
空の色は橙から群青へと変わりかけている。ぼんやりと水平線を眺めつつ懐をまさぐると
先ほど縫い上げたばかりのバンダナが出てきた。
空の色と同じオレンジの刺繍はなかなかの自信作だったが、だからこそ手向けにはちょうどいい。

「――おんしのことを気に入っていたのは本当じゃぞ」
フェンネルは美しい花の絵に深く口付け、バンダナを風に乗せて海へと放る。
「のお、オニバス……」
若草色の布は風にもまれ、白い波にさらわれ、すぐに見えなくなった。

大陸から離れた外海に位置するウィナリス群島最大の島、ウィナリス。
四季の移り変わりが豊かなこの島には
かつて人間とエルフが互いに協力し合って暮らしていた。
エルフの寿命は長いので、その歴史はほとんど完全なままで残っている。

群島を放浪していた流れ者のエルフを、人間の小さな村が救ったことが始まりらしい。
行き倒れていたところを手厚く看護してくれた村人達に恩義を感じ、エルフはこの村に定住する。
実際にその数百年後、島を大津波が襲った際
このエルフは卓越した魔法の技術を持って村を守り抜いたとされる。

それからの数千年で数を増やしたエルフ達は島のあちこちに散り、そこに住んでいた人間達と良好な共生関係を築き上げる。
土地を大切にする気質が裏返ったのか、エルフは農耕を好まない。
人間達から食料を受け取る代わりに
エルフはエルフ独自の技術――魔法を利用した様々な恩恵を人間達

にもたらした。
魔力を利用した地質の改善は安定した食料供給を人々に約束し、
エルフの戦士が用いる強力な攻撃魔法は、人の手に負えない魔獣の
恐怖を取り去ってくれた。
しかし、それらは必ずしも、ウィナリスの住人達に安息をもたらす
ものではなかった。

餓えることも魔獣の食料となることもなくなった人間達が爆発的に
数を増やし
ついにはそこそこ大きなウィナリス島ですら抱え切れないほどの大
人口となってしまったのだ。

多すぎる人間は住む場所を求めて争い始めるようになった。
敗北した者達は実りのない小さな離島に追いやられ、勝ち残った者
達もまた新たな同胞から狙われる。
泥沼の戦争が続く中、とある人間達が行動を起こした。
大した計画ではない。彼らは他者より抜きん出た力を用いることで
自治都市の乱立する形となっていたウィナリスを完全に統一しよう
としたのだ。

彼らは自分達と協力関係にあったエルフ達を頼り、計画に必要不可
欠な強大な力を得る。
そのエルフ達が他の同胞より優れていたのは
何らかの行動を制限する空間を作り出す『結界』の魔法と
意思なき人形――ゴーレムを作り出す『傀儡』の魔法だった。
それらを組み合わせ、エルフ達は戦闘用ゴーレムとでも称すべき兵
器を作り上げたのだ。

大人が二人肩車をしたほどの巨体を誇るそのゴーレムは
常に自らの周囲に『結界』の魔法を用いることで、信じられないほ

どの防御力を実現する。
当時の製鉄技術で作られた武器では角を欠けさせるのがやっと、
有効なのは魔法による攻撃だが、それでも破壊には大量の魔力を打ち込まなければならなかったと言われる。
もともと力が弱いエルフの雑用をこなすために作り出されたゴーレムだ、膂力は折り紙つきである。

ミスリルと名付けられたそのゴーレムを用いた一団は次々と領土を広げていったが
それでもミスリルの性質が有名になれば、対処法も考えられてしまう。
作られた当初こそ絶対無敵の戦士と恐れられたミスリルも、だんだんと常勝不敗を名乗れなくなってきた。
事態を重く見た人間達は、エルフ達に今よりももっと強い、新たなミスリルを作るよう要請する。
もともとかなり無理をしてミスリルを完成させたエルフ達はその要請を受けるのを拒んだが
背に腹は変えられず、最終的には製作に取り組み始めた。
自分達がウィナリスを統一すれば、それだけ大きな顔ができるのだ。

エルフ達が考えたのは、当時の魔法技術の最高峰であるミスリルの巨大化である。
既存のゴーレムを大きくするだけなら、難しいのは魔力と材料の確保のみだ。
小山ほどもある巨人と相対する恐怖を考えてもらいたい。ミスリルを大きく作り変えれば、それだけでミスリルは強力になる。

だが、それは間違いだった。

エルフ達の誤算は、本当にそのままミスリルの全てを巨大にしてし

まったことだ。
岩石の体は大きくなり、自ずとその器に込められた魔力も大きくなった。
そして強大になった魔力は、ミスリルの思考能力までも強大にしてしまったのである。
その結果、元は簡単な命令を理解できる程度の知能は
ある程度の自我を持つまでに進化した。しかし、エルフ達はそれに気付かない。
ミスリルは実験のために見ず知らずのエルフ達の命令を聞き続ける毎日を送り、

「そしてある時、ついに溜まったストレスが爆発したんじゃ」
それも当然じゃの、とフェンネルは皮肉っぽい笑みを浮かべた。アイナも頷く。
いきなりある程度の知能を持って生まれたのだ、
同じ前後不覚にしても生まれたばかりの赤ん坊というよりは、記憶喪失者に近いものがあるだろう。
何でここにいるのかがわからないまま、自分より明らかに矮小なエルフ達に命令される日々。誰が耐えられると言うのか。
「暴走したミスリルは周りにいたエルフ達を薙ぎ倒し、人間も潰し、二ヵ月もの間、ウィナリスで暴れ続けた」
「二ヵ月も……」
「おかげでウィナリスの人口はいきなり減ったらしいの、正確なところは知らんが。
皮肉にもミスリルは確かにウィナリスの人口問題を解決したわけじゃ。
この事件が起こったのは四百年前、私が六十くらいの時じゃな。
さすがによく覚えておるよ」
「でも、私達にとっては伝説です」

「そりゃ仕方ないわ、時間の感じ方が違うからの。
……エルフ達はミスリルを止めるのに総出で戦い、その大半が死に絶えた。
生き残った者達も傷を負い、まともに動けるのは少数じゃった」
「それで、人間達に故郷を追われることにも無抵抗だったんですね」
「そういうことじゃ。ミスリルの一件――今で言う戦争が終わって以来、
エルフは人間達から危険な種族として迫害され、住みにくい離島に逃げざるを得なかった」
「恩知らずだったんですね……昔は助けてもらってたのに」
「同じだけ、私らも助けてもらってたんじゃ。もともと容姿に優れて不老長寿のエルフをひがむ者も少なくなかったし
時代も発展して個人の利害という概念が生まれ、昔のような思いやりは薄れてきておった。
私のエルフびいきも入っておるしの。あまり気にすることはない」
「……はい」
「で、最終的に封じられたミスリルを、オニバスが復活させようとしていたわけじゃ。ウィナリスを壊滅させるためにの」
「そうだったんですか……でも、そのためにどうして私が必要だったんでしょう」
「ミスリルの封印を解く鍵はの、生物の命だったんじゃよ。
一人や二人では駄目じゃ、大量の命が必要じゃった。そう簡単には解けんようにの。
私が知ってるのはそれだけじゃ。オニバスは封印の構造についてよく調べたようじゃから
おんしでなければ駄目な理由があったとして、それを知っていたのかも知れん。
……生贄に捧げるのは若い美少女じゃと、相場が決まっておるじゃろ？」
フェンネルがけたけたと笑ったが、アイナはくすりともしなかった。

笑える冗談ではない。
「それで船を沈め続けていたんですね、人間の命でミスリルの封印を解くために。
　同じところで船が沈んだのはそこにミスリルが封印されていたか、何かそこでなければ駄目な理由があったからで、
　最期は自ら生贄になったわけですか」
「そういうことになるの。馬鹿な奴じゃよ、生涯若造じゃった」
つぶやき、フェンネルはランプの灯かりを弱めて
代わりに自ら『光源』の魔法を構築した。部屋が一気に明るくなる。
「？」
「いや、バンダナをなくしたからの。新しいのを作らんと……
　おんしがパンティを作って欲しいなら、何を差し置いてもそちらを優先するけど、どうするかの？」
「黙って部屋の隅でバンダナ作っててください」
「何じゃと、冷たいのお。頼んでくれたら形状はTバック、多少無理してでもフリルをつけてやろうかと思ったのに」
アイナはぷいとフェンネルに背を向けてしまった。
壁際に寄せた荷物からカードを取り出すと、いそいそと半分をアポロンに配り始める。
「さっきの続きをしましょう、アポロンさん。二度もジョーカーは引きません」
「え、あ、ちょ、シカトか！？　おい、アイナ！」
「シカトですので、おとなしく無視されててください」
「答えたらシカトになってないじゃろ！　冗談じゃ、悪かった！せっかくじゃから私も入れてくれ、一緒に遊ぼう！」
「いえいえ、お構いなく。私はアポロンさんと愛を育んでおりますので」
手札で口元を覆っても隠し切れないアイナの悪戯な笑顔を向けられ、
アポロンはごりごりと頬を掻く。
アイナを挟んだ向こうで騒ぐフェンネルを見、

アポロンはしばし思考を巡らせ、スネる寸前に構ってやれば良いかと大きな手で小器用に手札を整理し始めた。

第十一話「胎動」

某日早朝、ウィナリス。
その存在に最初に気付いたのは、海に面した小さな村の住民だった。
朝とは言えまだ薄暗い中、いそいそと漁の準備を始めていた男達が、
誰からともなく海を指差して騒ぐ。
「おい、ありゃなんだ？」
海面が輝いているのだ。海の中でランプが光っているかのように、
揺れる水面が光を放っている。
ときおり発光する習性のある生物がやってきたりすることはあるもの
の
今はそんな時期ではなかったし、その光り方も違っていた。
「なんだなんだ、何かいるのか？」
そう言って波止場から海を覗き込んだ男を、光り輝く巨大な手が掴
んだ。

ざばあっ――

「へ……」
間抜けな声を上げた男は、一瞬で握り潰された。そのままの形で残
っている足先と頭を除けば、ハンバーグの材料のようである。
手の持ち主――小山のように海水を盛り上がらせて立ち上がったの
は、見上げるような一つ目の巨人だった。
何故か右足と左腕がついていない分、ひどく長い右腕を杖代わりに
突いてバランスを取り
大人が十人肩車をして頭に手が届くかという巨体から、潮臭い水を
滴らせて仁王立ちしている。
全身が油のようにゆらゆら揺れる七色に輝いていた。海面の発光は、

この巨人が潜っていたからに違いない。
ウィナリスの人間は、この巨人の名を忘れて久しい。
「フランネルは、どこだ？」
一つ目で人間達を見下ろした巨人がたどたどしい発音で言の葉を紡ぐも
それを聞いている人間など一人としていない。漁師達は我先にと逃げ出してしまっていた。
「フランネルは、どこだ？」
先ほどよりも大きな声で巨人は叫び、片足でバランスを取りながら拳を振り上げた。そして下ろす。

――ごっ……ずううううんっ！！！

叩き付けた拳は猟師を数人まとめて赤く潰し、自らの体を大きく傾がせた。
無様とも取れる姿勢で頭から倒れ込んだ巨人の巨体が、波止場に係留されていた漁船を押し潰す。
舗装された港にもたれかかってうつ伏せに倒れていた巨人は、顔だけを前に向けて叫んだ。
「フランネルは、どこだ！？」
怒声が空気を震わせ、寝坊していた海鳥を強引に覚醒させた。
飛び立っていく鳥の影を浮き彫りにするように、七色の一つ目巨人は立ち上がる。

彼女らしくもない慌てた足取りでタラップを駆け下りたアイナは
目の前に広がる町並みを正面に見据え、少しだけ涙のにじんだ瞳を

こすった。
ウィナリスは一つの国家ではなく、自治都市の集まりだ。移動や商売こそ自由なものの、互いの政治には不干渉を貫いている。
そんな都市の中でも一番の繁栄を誇っているのがこの港町『スタルト』だった。
広い外海を正面に臨み、主な収入源は漁と貿易。
大陸との安定した交易ルートを築いている数少ない都市の一つである。収入に比例して、文化レベルも高い。
「ほー……ここがアイナの故郷か。海が近い」
潮の香りが苦手なフェンネルが唇を尖らせた。背中では白いローブにくるまったアポロンが、船員に奇妙な目で見られている。
「我慢してくださいよ。大丈夫です、港を離れれば気にならなくなります」
「そいつは助かる。それじゃ、まずはどこに行くんじゃ？」
「もちろん、二ヵ月ぶりの我が家です」
アイナがにこりと微笑んだ。

町を行き交う人々の好機の視線は、耳を隠したエルフであるフェンネルの美貌と
アポロンの奇怪な出で立ち、そして巨体に向いていた。
そんな個性的な二人と一緒に歩いているアイナまでもが好機の視線の対象となり、少し居心地が悪い。
「アポロンさんの格好、もう少しどうにかならなかったんですか？」
「これ以上はどうにもならんわ」
人間の数に目を奪われているフェンネルが、町のあちこちを見渡しながら言った。
「しかし意外じゃの。最悪、アポロンの正体がばれて一悶着という展開も覚悟しておったんじゃが」
「アポロンさんの体付きが変だからって、いちいち追求してくる他人はいませんよ」

「じゃがの、エルフとゴーレムはこの島を潰しかけたんじゃぞ」
「四百年も経てば、どんな戦争も昔話になります。
ゴーレムの存在に至っては知られてすらいませんよ、私達はもって百年なんですから」
「当時を知る人間は存在せぬわけか。おんしら、嫌になったりせんか？」
「何がです？」
「生まれた瞬間に宣告されたようなもんじゃろ。『あなたは、あと百年しか生きられません』」
フェンネルが面白そうに語り、アイナが苦笑した。
「私なら気が狂いそうじゃな、余命が百年なんて」
「私に言わせれば、二千年も生きろと言われるほうが気の狂いそうな事態です」
「なあに、おんしなら大丈夫じゃ」
「どういう意味ですか……あ、見えてきましたよ」
アイナが指差したのは、二頭立ての馬車が二台並べるほどの幅の広い橋だった。

「スタルト川にかかる橋です。他にもいくつかあります」
「川があるのかの？こんな街中に？」
「正確には、物品を輸送するための船が通る運河なんですけどね。
本流の名前を取って、そのままスタルト川と呼ばれています」
「ほう……」
フェンネルは小走りに橋へと向かうと、欄干の下を覗いてみた。
アイナの言う通り緩やかな流れに浮かべられた小船が、大きな箱をいくつか積んで運河を下っていく。
船の端に立った船頭が小器用に長い棒を操り、水底をつついて速度と方向を調整していた。
「ずいぶん幅があるの。これで運河か」
「本流はこれの三倍くらいありますよ。この川のおかげで、スタル

トは水には困りません」
「ほお、そいつはぜひ見てみたいのお」
「私の家の前を通ってますよ、そのとき見せますね……フェンネルさん、すっかり観光モードですね」
「実際、観光じゃからの。おいアポロン、おんしもよく見とけ」
言われたアポロンが同じように欄干から運河を覗く。肩を並べる二人の様子が微笑ましくて、アイナは静かに笑顔を作った。
この二人とずっと一緒にいたい。できればここで暮らしたいが、ここがウィナリスである限りそれは無理だろう。
ならば、この二人の旅についていくしかない。しかしそれもフェンネルに禁じられるはずだ。
「……」
しばらくして、アイナは考えるのをやめた。今はこの瞬間を楽しむことにする。

「あれが、私の家です」
アイナが指し示した建物を、フェンネルとアポロンが感心したように――アポロンの表情は変わらないが――眺めた。
雄大なスタルト川を背に建つ屋敷は、町で見かけたその他の屋敷と比べれば規模が小さいものの
それでも小柄さゆえの造詣の見事さがあり、品格を感じさせるたたずまいをしていた。
赤いとんがった屋根と赤レンガで組まれた屋敷は、さながら王族の城のミニチュア版のようである。
「ずいぶん人里離れたところにあるんじゃな？」
「せめて町外れって言ってくださいよ。……父は広い交遊をしない人なので。
本人が言うには、にぎやかなのは戦場で飽きたと」
「そう言えば、元は傭兵だったんじゃったな。今は仕事何やっとる

んじゃ？」
「町の自警団の訓練をしています。有事になれば団員のほとんどを指揮する権限があるそうです」
「ほお」
相づちを打ちながら屋敷の概観を見ていたフェンネルだったが、隣のアイナがそわそわしているのを見て
「じゃあ、中に入れてくれるかの？」
「あ、はい」
気を利かせてアイナをうながした。いつかはフェンネル達と暮らしたいと言ったこともあったが
アイナは十四歳の少女である。生まれ育った家を前にすれば、家族も恋しくなるだろう。父しかいないと言っていたが。
いそいそと歩いていくアイナの背中を追い、フェンネルはやや唐突に言った。
「あ、しまった」
「どうしました？」
「……いや、なんでもないわ。もう遅いからの、気にせんでいい。それより、おんしの家族は今家にいるのか？」
「あ、はい、軍事教練が終われば、父は家の机で仕事をしていますから」
「そうか、なら顔を見せてやれ。心配しとる……というか、もう死んでおると思っておるかも知れんぞ？」
「そうですね。下手をすれば、自分の墓参りに行けそうです」
苦笑するアイナに笑顔を返しつつ、彼女に聞こえないだけの声量でフェンネルは言った。
アイナには聞こえていないが、アポロンには聞こえている。
「……まずったかの。オレガノが相手では、バレるのではないか？
私の顔は割れておるし、運良く気付かれなくともおんしがおっては」
アポロンはローブの中で静かに首を横に振る。

「なるようになれ、か。確かに他に選択肢はないが……まずいのお」
フェンネルは舌打ちし、運悪くそれをアイナに聞きつけられた。
どうしたのかと問いかける少女を適当にあしらいつつ、遠い目をするフェンネル。
「のお、母さん。面倒なことを押し付けてくれたもんじゃな。楽しいがの」

そっとドアを押し開けると、ちょうどそこを清楚な衣装に身を包んだメイドが通るところだった。
「ただいま帰りました」
恐る恐る、といった様子でアイナが口を開く。
体は半分扉に隠れたままだった。メイドはアイナを見つけ、しばらく硬直した後、みるみる顔を崩していく。
「あ、アイナ様！？ご無事で！」
あっという間に泣き顔になったメイドが駆け寄ってきた。
その甲高い悲鳴を聞きつけたのか、なんだなんだと屋敷のあちこちから使用人達がやってきて
アイナの顔を見るなり、何らかの形で感極まりながら群がって来る。
アイナ自身も目の端に涙を溜めていた。使用人の視界には入っていないフェンネルがぼそりとつぶやく。
「泣いても良いと思うがの？」
「父に会うまではこらえておこうと思います」
「やはりおんしはテクニシャンじゃな」
頷くフェンネルの脇をすり抜け、アイナは使用人の輪の中に飛び込んでいった。
成り上がりの家の出身で、友達が少なかったと聞く。だとすれば話し相手は家の中の人間だけだったに違いない。
久々に再会した仲間達との会話の中アイナが見せていた笑顔は、フェンネルやアポロンには見せたことのないそれだった。

「寂しいか？」
フェンネルがからかうように言うと、アポロンは彼女の細い背中をローブ越しに小突いた。『馬鹿なことを言うな』とでも言っているようだ。
「……あ、そちらの方々は？」
ひとしきり騒いでいた屋敷の人間は、しばらくしてアイナの後ろに立っている二人に気がついた。
フェンネルもアポロンも普段の態度を崩さず、アイナだけが「ほら来た」という顔をした。たらり、と冷や汗が頬をつたう。
「ああ、この人達は……ええと」
「大丈夫よ、アイナ。初めまして、フェリシアと言います。
　こちらは兄のイプシロンです」
しどろもどろになるアイナをごくごく自然に背中へと押しやり、フェンネルは恭しく礼をした。
いつもの気安いへらへらとした雰囲気は微塵もない。その変貌ぶりにアイナは愕然とする。
「フェリシアさんと……イプシロン、さん、ですか？
　兄君さんは、その、えーと……」
「いえ、いいのです。――この身の丈を見てもらえればわかると思いますが
　兄は昔から体が大きく、顔付きも恐ろしげでありました。
　そのため、皆をいたずらに怖がらせないよう、このような格好をしています。お許しください」
「ああ、いえ……そういうことなら」
皆は顔を見合わせながらも頷いていた。どんな理由であれ、納得させてしまえば勝ちだ。
使用人達の隙を見て、フェンネルがビッと親指を立てる。当然のようにアポロンが親指を立て返した。
「しかし、無口な方ですなー」
「それが、兄は声も雷が鳴るかのごとき大きなものでして」

年齢からくるのだろうフェンネルの説得力とアポロンの圧倒的な体格がなければ信じてもらえない
果てしなく嘘くさい説明を適当に聞き流していたアイナの目に、玄関から遠ざかった位置に立つ男が映る。
「……」
アイナの目がみるみる潤んでいった。

どうも玄関が騒がしい。が、それもそのはずだと納得する。
「アイナ？　アイナか？」
オレガノ・コンフリーは使用人達に囲まれている娘の姿を見、思わず走り寄っていた。
短く刈り込んだ濃い茶の髪とヒゲ、がっしりした肉体が貴族らしくなかったが、元傭兵らしくはある。
腰に下げていた剣も実戦本位の無骨なものだった。衣装がそれなりに豪華であるゆえ、かなり浮いている。
「お父様ぁっ！！」
呼ぶまでもなく抱きついてきた娘を厚い胸に受け止め、オレガノは何も言わずにその頭を撫でた。
予定の日にも帰って来なかった客船、その航路にエルフの領海が含まれていたから心配だったのだが
アイナはこうして無事に帰ってきた。父親として何よりの幸せである。
「お父様……お父様……」
「……良く無事でいてくれたな」
「はい……怖かったです……船が襲われて、みんな焼かれて……」
「詳しい話は後で聞こう。良かった、本当に良かった」
涙を流しながら父の顔を見上げたアイナが、泣いたまま意地悪な笑顔を浮かべてみせる。
「使用人さんほどに、喜んではくれないんじゃないですか？」

娘の笑顔を真正面から受け止めたオレガノもまた、悪戯な微笑みを浮かべて言う。
「俺はエルフの領海を生き残った男だぞ？　お前が死んだなど、これっぽっちだって信じていなかったさ」
大きく頷くアイナを優しく抱きながら、未だ人込みの消えない玄関に目を移す。
「あの方達は――」
そして絶句した。言葉を失った父を、アポロンの巨体に驚いたものだと取ったアイナが説明する。
「ああ、私を助けてくれたフェン……フェリシアさんと、イプシロンさんです。
　ええと……イプシロンさんのほうはたまたまあんなに大きく生まれてしまった方でして、でも優しい人です」
「……ん、知っているよ」
どうしてもしどろもどろになってしまうアイナの説明に、オレガノは笑って頷いた。
その言葉の意味を計りかねたアイナだったが、
「お前を助けてくれ、なおかつここまで連れて来てくれたんだ。優しくないわけがないさ」
それで納得した。オレガノは自分が金持ちであることを自覚していないふしがあるから、
アイナが貴族だと知って向こうが金をふっかけてくるという思考は働かないようである。
「挨拶をしてこよう、お前は久しぶりの部屋でも見てきたらどうだ？」
微笑を浮かべるオレガノに促され、自室へと向かうアイナ。
彼が実際に考えていたことは、アイナの予測の範疇を超えていたが。

「さあ、もういいだろう。仕事に戻るんだ」

手を打ち鳴らしたオレガノの声に弾かれるように、使用人達がわらわらと散っていく。
残されたフェンネルとアポロンに――警戒を隠さない歩法で――近寄ったオレガノは、友好的な笑みを作りながら言った。
「コンフリー家当主、オレガノ・コンフリーです。この度は娘が大変お世話になりました」
フェンネルもまた微笑みながら、差し出された手を握り返す。アポロンも軽く頭を下げていた。
「フェリシアと、兄のイプシロンです。――なんて偽りは、おんしには必要ないかの？」
オレガノの右手を離したフェンネルの極上の笑顔が、ふいに残虐な色を持った。
宝石のような瞳に浮かんでいたのは明らかな激情であった、
しかしそれは怨恨と称するには何か邪悪さの足りない、例えるなら嫉妬の延長上とでもするべき複雑なものだ。
「しかし老けたのお、オレガノ。十五年前はなかなかの美男子だったおんしが、
今やヒゲの良く似合う紳士となっておるとはな」
「そういうお前は本当に何も変わらないな、フェンネル。まさかお前とここで再会することになるとは思わなかったよ」
言いながらオレガノは指摘された顎ヒゲを指でしごいた。
アイナと同じ色をした瞳が放つのは緊張、そしてわずかばかりの恐怖の光である。
歴戦の傭兵である彼の腕を持ってしてさえ倒せないほど、フェンネルは強いのだ。
しかも彼女の後ろにはアポロンが控えている。ローブの中からくぐもった音――石の擦れる音、アポロンが拳を握った音は
『フェンネルに手を出すなら、即座に殴り潰す』という彼からの警告だった。
この二人の性格と実力を、オレガノは十分に心得ている。やや低い

声で言葉を紡いだ。
「……俺を殺しに来たのか？」
フェンネルもアポロンも――後者は当然だが――何も言わなかった。
「俺はどうなっても構わないが……だが、せめてアイナがこの家を――いや、財産を継ぐまでは待ってもらえないか？
あいつが一人前になって、一人で生きていけるようになるまでは待ってくれ」
「安心せい。おんしを殺すつもりがあったら、十五年前にそうしておるわ。
おんしを恨んではおらんよ、安心してアイナを育てれば良い」
「なら、目的は何だ？アイナか？あいつに手を出すことは絶対に許さんぞ」
「そう喧嘩腰になるでない、本当に他意はないんじゃ。私はアイナを届けに来た……それだけじゃよ」
そんでもって、しばらくはここに泊めてほしいんじゃがなー、とけたけた笑うフェンネル。オレガノは深くため息をついた。
「断ると言ったら？」
「アイナとの約束じゃ、おんしが駄目と言うならアイナに頼む」
「……安心してくれ、そんな必要はない。部屋を用意させるから、好きに使うといい」
「さっすがオレガノじゃ、話がわかるのお！」
フェンネルがオレガノの肩をべしべし叩き、オレガノが力なく笑う。
アポロンに向かっておどけたように肩をすくめた後、背中越しにフェンネルを見やった。
「――アイナに」
「うん？」
「アイナに、本当のことは話したのか？」
「まさか。たかだか十四歳の小娘に話す真実ではなかろうよ」
「そうだな。……面倒は重なるようだ」

オレガノは頷き、億劫そうに旅荷物を抱え上げるフェンネルと
反射的に手を貸そうとし、素肌をさらすことを恐れて思い留まるア
ポロンを一瞥して天井を見上げる。フェンネルのバンダナに包まれ
た耳がぴこんと動いた。
「なんじゃ？面倒とは失礼じゃな、娘を連れて来てやったと言うに。
何かあったのか」
「ああ、とびっきりの面倒を処理しきれずに困っていたんだよ。
――アイナがお前に助けられていたなら、もう一ヵ月くらいは向
こうで一緒に暮らして欲しかったものだ。贅沢だがな」
「何だと言うんじゃ？久しぶりに戦争か？」
「それならば、もう少し話は楽だったさ。
……何だか知らないが、七色に輝く巨人が島の反対側から現れて
通り道にある集落や都市を潰しつつ、一直線にスタルトを目指し
ているんだそうだ。
他の都市からの早馬が言うところによると、隻腕に片足、おまけ
に一つ目の大巨人で」
アポロンを顎で指し、オレガノは吐き捨てた。
「腕が長くて足が短い、ちょうどそこのゴーレムに酷似した体形を
してるらしい」
「何じゃと……？」
フェンネルが目を剥く。

伝承でもそう伝えられていたし、彼女自身、四百年前に実際に見た
のだから間違いない。
全身が七色に輝き、一つ目で、立っていて地に手がつくほど腕が長
く、逆に足は短い大巨人。
それらはすべて、かつてウィナリスを壊滅寸前に追いやった戦闘用
ゴーレム――ミスリルの外観に一致していたのだ。

第十二話「復活」

久しぶりの故郷に帰って、一週間が過ぎた。

「ん……」

アイナは自室のベッドからもぞもぞと這い出た。

薄手の白いパジャマは寝起きで多少乱れていたが、寝癖は見当たらない。髪が薄いせいか。

鏡の前で衣服を着替える。質の良い布を使った白いブラウスと紫のスカートは

町の仕立て屋ではなく、フェンネルの作だった。どうしても作らせてくれときかなかったのだ。

彼女は「何故繕うのか。そこに布があるからじゃ」とか言っていた。

「よし」

くしで整えた栗色の髪にリボンを結び、アイナは鏡の中の自分に微笑んだ。

楽しい一日の始まりである。

顔を洗い終えてリビングに向かうと、数人のメイドが朝食の用意をしていた。

焼き立てのパン。薄切りのハムとスクランブルエッグに色鮮やかな野菜を合わせたプレート、

温かなコーンポタージュに、よく冷えたミルク。デザートには果物が用意されていた。

メイド達の手によりテーブルに並べられていくメニューを、じっと睨み付ける者がいる。アポロンである。

「あ、おはようございます、お嬢様」

「アイナ様、おはようございます」

「おはよう」
メイド達はアイナの姿を見るや、安心したように寄ってくる。歩みが早足になっていた。
どうしたのか、と一応聞いてみるが、答えは予想できている。
「え……あ、いや、あの。……イプシロンさんです」
一人が声を潜めてそう言った。思わず苦笑してしまう。
「笑い事ではないですよ。あの方、私達より早く起きたかと思えば
ずっとキッチンで朝食の用意を眺めてるんですから」
「その間、一言もしゃべりませんし」
「お腹が減ったのかと思ったのですが、フェリシアさんに『兄に食事は必要ありません』と念を押されていますので……」
なるほど、客観的に見れば確かに奇怪であるが、
アポロンの正体や性格を知るアイナからすれば、思わず微笑んでしまうような話である。

彼は夜になると崩れる代わりに、朝はまだ薄暗いうちから活動を開始する。もともとゴーレムはエルフのお手伝いとして作られたらしいし
しかもアポロンの役目はただでさえ朝の早いフェンネルの身の回りの世話である。朝が遅くては話にならない。
キッチンに居座るのは、ウィナリスの料理を勉強しようとしているからなのだろう。
彼は字も読めなければ言葉も話せない。料理を自分一人で覚えようとするなら、見よう見まね以外に方法はなかった。
「その……失礼ですが、気味が悪くって」
「やっぱりそう見えちゃいますか。でも、本当はいい人ですよ。ちょっと――いや、かなり無口なだけです」
アイナは苦笑いを浮かべながら言った。嘘は言っていないはずだ、正確には無口なのではなく、しゃべれないのだが。
「アポ……イプシロンさんは料理が好きなんですよ、ウィナリスの

料理を学ぼうとしているだけだと思います。
　人付き合いが下手な方ですから、変に見えるかも知れませんけど、いい人なのは間違いないです」
これも嘘ではない。間違っているのは、アポロンが人であると断言してしまっているところだけだ。
それでもどよめいているメイド達に、アイナは軽く後ろを示しながら続けた。
「イプシロンさんが何を言っているかは、彼女に聞けばわかりますから」
背中に聞こえてきた足音はフェンネルのものである。そう断言できるのは、彼女が豪華な食事を楽しみにするあまりリビングまでスキップでやってきてしまうからだ。もっとも、アイナやアポロン以外の目があるところでは、丁寧な態度を通すのだが。
「あら皆様、おはようございます」
案の定、フェンネルは部屋に入る寸前でスキップを止めて気品さえ感じさせる足取りで軽く頭を下げた。
メイド達がようやく普通の人間を接待できる安堵に胸をなで下ろす後ろで、笑いを必死にこらえているアイナとアポロンがいた。

「そうか……わかった、指示は追って出すから
　今は捜索を続けてくれ」
オレガノが言うと、若い男が短い返答とともに敬礼し、待たせていた馬に乗って走り去る。
若い男は馬上鎧と剣に身を固めた戦士だ、自警団関連の人物であることは容易に想像がついた。
くまを浮かせた目元をこすり、オレガノは青い空を見つめる。自宅の玄関から見る空には入道雲がもこもこと立ち昇り
いかにも夏真っ盛りといったふうである。アイナが大陸に旅行に行

こうとしたときにすでに初夏、
二ヵ月を過ぎた今ともなれば暑さは和らいでも良いはずであったが、太陽が音を上げる気配はない。
「こんな日は、泳ぐのが一番ですよ……あ、お父様」
つま先を地面でとんとんしながら顔を出したのはアイナだった。
服装こそいつもと変わらないが、手には大きめの巾着袋を持っている。
それは水が染みないよう加工された皮袋で、彼女がこの時期になると引っ張り出す水着入れだった。
「どうした？」
「フェリシアさんとイプシロンさんと一緒に、川に泳ぎに行って来ます」
久しぶりだなー、とアイナは笑った。いつもならしょっちゅう泳ぎに行く時期にいなかったのだ、
彼女は夏日が続いていることを素直に喜んでいるだろう。
「そうか。……しかし、イプシロンさんは泳げるのか？ローブを脱げないそうじゃないか」
「ええ、どうしても駄目みたいで。見てるだけらしいです」
「なるほど、同情するよ。行っておいで」
「はい！」
オレガノがぽんとアイナの頭を叩くと、愛娘は紫のリボンをなびかせて走り出した。
その後を追ってアポロンが身を屈めながら玄関をくぐり、彼女の後に続く。
少しして、やはり皮袋を肩にかけたフェンネルがひょっこりと顔を出した。オレガノに気付き、左手を振る。
「おお、死にそうな顔しとるの。ちゃんと寝とらんじゃろ？」
「その通りだよ。あまり人の上に立ち過ぎるのも苦労が増えて嫌だ」
「じゃろうの。どうしたんじゃ？」

フェンネルの問いに、オレガノは気だるそうに首を振った。
「あのゴーレムを見失ったらしい」
「ミスリルを？　おんしらの目は節穴か？」
オレガノの答えに驚きを隠さず目を丸くしたフェンネル。ときおり見せるこういう仕草が、彼女の年齢からくる風格を押し隠している。
「あんなドでかい化け物を見失ったじゃと？
　おまけに奴は全身が光っておるんじゃぞ。すぐ見つかるじゃろうが」
「そのはずだが……行方が知れないのは事実だからな。
　今までずっと真っ直ぐスタルトを目指していたはずだが、この間いきなり姿を消したんだ」
そう行ってオレガノは懐から地図を取り出す。がざがさと広げると、フェンネルに手渡した。
バンダナで耳を隠したエルフがそれを受け取り、中を覗き込む。
「どの辺じゃ？」
「トワロフだ。地図だと……ここだな。隣の都市ではあるが、山間部を挟んでいる」
オレガノは地図上に指で円を書いた。山の高低差とスタルト川の支流が線で描かれており、
中には容易に歩を進めることはできないだろうという険しい地域もあった。フェンネルが眉をひそめる。
「なるほどの。ミスリルがどこかに隠れたとしても何の不思議もなく、
　人間の手では捜索しにくい場所ということじゃの。おまけに近い」
「ああ。まったく、厄介なことになったよ」
肩をすくめるオレガノ。疲れをこれっぽっちだって隠せていない、生ぬるい笑みを浮かべていた。
自警団長とはいえ、自宅まで部下が押しかけてくるという事態がそもそも異常だ。疲れないはずがない。
さすがのフェンネルもかける言葉を選んでいると、オレガノのほう

が口を開いた。
「……もし」
「ん？」
「もし、俺に何かあったら……アイナのことを頼めるか？」
「縁起でもないことを言うでない。アイナの父親はおんししかおらんのじゃぞ。
　さすがの私も代わりはできんわ」
「わかっている、言ってみただけだよ」
ほんの少しだけ焦りの色が感じられたフェンネルの声に苦笑し、
オレガノは彼女の手から地図を取り、たたんで懐にしまう。
「さて、川に行くんだろう？　アイナが心配する、行ってやってくれ」
「そうさせてもらおうかの」
出勤の用意をするのだろう、とぼとぼと玄関に消えていく男の背中を見送り
フェンネルは面倒くさそうに薄い髪をかきむしり、ため息をついた。

スタルトが海に面しているとは言っても、それはほとんどが岩肌を剥き出しにした絶壁であり
砂浜などは数えるほどしかない。崖の固い地盤は港を作るのに都合が良かったため、
昔からこの街に海水浴場などというものは作られなかった。
大陸との交易が盛んなスタルトでは、海は大型船舶の出入りが激しい危険な場所である。
この街の人間の避暑地と言えば、海ではなく川なのだ。

夏がやって来たなら、スタルトの本流は暑さをしのごうとやってくる人々でいっぱいになる。
人でごった返す河川敷の一角に防水布を敷き、大きな日傘を立てて陣取っていた大男は
ある人物の帰りを今か今かと待ちわびていた。
この暑い中、白いローブで全身をすっぽり覆った姿は、他の客から少なくない好奇の視線を向けられている。アポロンだ。
先ほど捕まえてきた川ガニ数匹とデコピンで戦っていると、その背中に柔らかな重みがかかった。
アポロンは軽く肩を落として振り向く。
「あーぽーろん」
意地の悪い微笑みを浮かべて、彼の背中にしなだれかかっていたのはフェンネルだった。
黒い水着の上から若草色の半袖シャツを羽織っている。頭には同色のバンダナを巻いて耳を隠していた。
「そんな風にカニなんぞと戯れていて楽しいか？　私らと遊べば良かろ」
ぷいとそっぽを向いてしまうアポロン。元来ウブな彼だ、女性の水着姿を直視するのは恥ずかしいのだろうか。
フェンネルもそれを知ってからかっているに違いない。水着の胸元をくいと引っ張って笑った。
「ほれほれ、角度によっちゃ絶景が眺められるぞ？……ん？」
しかし、アポロンだって黙ってはいない。声なき声で反撃する。とたんにフェンネルが真っ赤になった。
「や、やかましいわ！　女は胸の大きさじゃないじゃろが！
　仕方ないじゃろ、種族的なもんなんじゃよ、この体形は……うるさい！個人差なんて金輪際口にするでない！」
「何騒いでるんですか？」
ふいに割って入ってきた少女にフェンネルがわめくのを止め、アポロンが表情を変えずに目を輝かせた。

無論、アイナだ。いつもの紫を基調とした衣服は傘の下に畳まれており、
今は濃紺の水着を身につけている。ビキニタイプの露出の多い水着は、意外とアイナに良く似合っていた。
うんうん頷くアポロンの横で、目ざとく彼女の持つ食べ物を見つけたフェンネルが問う。
「それ、なんじゃ？」
「スイカです。夏になると食べられる果物……いや、野菜なのかな？とにかくどうぞ」
アイナが盆に乗せていたのは、赤い果肉の果物だった。切り分けられているが、皮の形状から元は丸い形であると予想できる。
防水布の上に盆を置くと、アイナは身の色に反して緑色の皮の部分を持って食べ始め、フェンネルもそれに習った。甘くて美味しい。
「うまいもんじゃの。……いやー、来て良かったわ。毎日美味い物が食える」
「何なら定住します？」
「うおお、誘惑するでない。その気になってしまうじゃろが、世界旅行も終わってないのに」
「ふふ……」
フェンネルが大仰に頭を抱え、アイナがそれを見て笑った。
「食べ終わったら泳ぎましょう……何だかアポロンさんに悪い気がするなあ」
「気にするでない」
表情は苦笑いであったが、口調には本当に罪悪感のにじみ出ているアイナの言葉に
フェンネルは笑顔で首を横に振り、アポロンも合わせて頷いた。
「俺はアイナの水着姿が見れただけで満足だ。だそうじゃ」
大真面目な顔のままフェンネルが断言し、アイナが空々しい笑みを返す。アポロンがのそりと立ち上がった。
「もちろん、ビキニときたらポロリしかないだろう。期待している

から、早く泳いできてくれ。とも言っておる」
「やっちゃいなさい、アポロンさん」
アイナが満面の笑顔でフェンネルを指差すと、アポロンも『合点承知』とばかりにびっと敬礼して
軽々とフェンネルを頭上に抱え上げる。「目標は川です」とのアイナの命令に、こくりと頷いた。
「おおっ！？」
そして周囲の人々が岩の腕を確認する暇も与えず、電光石火の所業で川へと投げ飛ばす。
「のおおおーーっ！！！？？？」
しかし力加減を間違ったのか、はたまた狙ってやったのか、フェンネルの体はほとんど垂直に上昇を続けて空の彼方に消えてしまった。
「あー」
アイナが間抜けな声とともに頭上を見上げて数秒後、再び青空にフェンネルの姿を確認する。
落下の軌道から見るに、どうにか川に落ちることができそうだ。
「……地球は青かったーーっ！！！！！」

――どぼおおおおんっ！！！

河川敷に人々の悲鳴が轟く。
水面から立ち昇った水柱を無表情に見つめていたアイナの頭上にアポロンがすっと日傘を差し出し、自分もその下に納まる。
一瞬遅れて雨のように落ちてきた水玉達が傘に受け止められた。
「しばらく、こうしてますか」
アポロンがこくりと頷く。ぼたぼたと鳴り響く雨音の下、川でフェンネルが大ブーイングを食らっているのが見えた。

「で、フェンネルさん、地球って何なんですか？」

「さてのお。何となく口走った言葉なんじゃが」
ほとぼりも冷め、アイナとフェンネルは川の冷たい水に浸かっていた。
アイナの平泳ぎが、その何気ない表情に違和感さえ覚えるほど速い。
最初こそ夢中になって追いかけていたフェンネルも
今はすっかりあきらめて、温泉にでも入っているかのように突っ立っているだけだ。
「もう競争はしないんですか？」
「勘弁してくれ、これ以上痩せたら骨と皮だけになってしまう。
しかし速いのお。さすが鍛えておるだけあるわ」
「鍛えているから速いわけじゃないんですけどね。
どちらかと言えば、速いから鍛えあがったんです……あれ？」
「川で遊んどるうちに泳ぐのは速くなって、体は鍛え抜かれたと言いたいのかの？」
「ああ、そうそう、そういうことです。夏になると毎日のように来てましたから」
「なるほどの」
すぐそばにいるアポロンが無言の圧力をかけているため
フェンネルの美貌に釣られて寄って来る男もいない。からかって遊ぶ相手はいなかった。
ため息とともに濡れた髪をしぼるフェンネルへ、アポロンが何事か話しかける。
「違うわ、別につまらないわけじゃないぞ。じゃがの、まさかここまで速いとは……計算外じゃった」
「楽に勝てるとでも思ってました？」
それを聞き付けたアイナが勝ち誇ったように腕を組んだ。応えるようにフェンネルも口元を吊り上げる。やや引きつってはいたが。
「違うの。楽に勝てると思っとったわけじゃない。実際、楽に勝てるんじゃ」
「今まで負けてたじゃないですか」

「花を持たせてやってたんじゃよ。十本泳いで八本負けただけじゃ。まだ負けとらん」
アポロンが投げやりに裏手ツッコミの仕草をすると、フェンネルが振り返り様に「うるさいわ！」とツッコミ返した。

「だいたい、ゴールラインに到達するのが数秒遅かっただけじゃろう？　そんなんで勝ったと言うのは早とちりが過ぎるぞ」
「世間一般では、人はそれを『勝った』と表現します」
「ええい、アポロンと同じことを言うでない！行くぞ！」
ばしゃばしゃと水を掻き分け、スタート地点まで泳いでいくフェンネル。行って来ます、とアポロンに笑いかけ、アイナが続いた。
対岸は遠すぎるので、スタート地点は川の中ほどだ。同時にスタートし、足のつく浅瀬まで先に辿り付いたほうが勝ちというのが先ほどから用いているルールである。提案者はフェンネル。
この時点ですでに背の低い、すなわち水底に足のつきにくいアイナが不利だと言うのに、フェンネルはなかなか勝てずにいる。
すでに抜かれているフェンネルを眺め、アポロンはのそのそと尻の位置を直した。
周囲のざわめきが強くなった気がする。また自分の姿を見て驚いた人間がいたのか。
鬱陶しい視線を振り払おうとざわめきの方へ目を向けたアポロンは、自分が勘違いをしていたことに気付いた。

水面が輝いている。アイナ達が競争に興じているところを見て、ぎりぎり視界の端に捉えられるかという距離の水面が
油を垂らしたように虹色に光り輝いているのだ。避暑を楽しんでいた人々は、光る水面を見てざわめいたのだろう。
泳いでいた者のうち、数人が水に潜って中を確認し、すぐに慌てた――否、怯えた表情を浮かべて我先にと岸辺を目指す。

ごっ――！！

虹色の光の正体を悟ったアポロンが苛立ったように地面を殴り飛ばし、ローブをびりびりと破り捨てた。
轟音にアポロンの方を見、その岩石の体を目撃してしまった人々が悲鳴を上げて逃げ惑い始めるが
当のアポロンはそんなことなどまるで気にしていない。どうせすぐに自分のことなど気にならなくなるのだ。
普段の鈍重な動きからは想像もつかない速さで走り出すアポロン。人込みを挟んだその向こうで、光る水面が山となっていた。

「ぬおー、ぬお、まーたーんーかー、ぬおー……おおっ？」
前すら確認せずにアイナを追いかけていたフェンネルの体が、ふいに持ち上げられた。
腹部を掴むごつごつした感触は、アポロンの右手である。見ればアポロンはローブを脱ぎ捨ててしまっていて、
自分と同じようにアイナも捕まえられ、肩に乗せられているのが確認できた。
「あ、アポロンさん！？」
「お、おいアポロン、何をやっとるか！」
フェンネルがアポロンの頭を小突くと、アポロンは面倒くさそうに右方を視線で示した。
ざぶざぶと川を突き進むアポロンから振り落とされないようしがみつき、何事かとそちらを見やれば
「……」
一生で最も見たくなかったものを見てしまった。フェンネルはぽかんと口を開け、一瞬遅れて歯を食い縛る。
そこに立っていたのは、油のにじんだ虹色に全身を輝かせた大巨人。小山のようなその体から、幾筋もの滝が流れ落ちている。足元で泳

いでいた人々が、大波にさらわれてもがいている。
左腕と右足がなくなっていることは妙だったが、それは四百年の時を経た今も変わらず
フェンネルの脳裏に恐怖の象徴として刻み込まれた兵器の姿だった。
「……冗談ではないぞ、ド畜生がァッ！！」
これ以上ないほど歪めた顔を掻きむしり、頭に巻いたバンダナを投げ捨てる。

予想することは、自分には不可能ではなかったはずだ。予想できたはずだ。
地図には谷に囲まれた巨大な――ミスリルが潜って進むことが可能なほど深い――川や運河がいくつも記入されており、
しかもその川は下流でスタルト川と合流する。
奴が『彼女』の気配を嗅ぎ付け、川の流れに沿ってスタルトを目指すというのは予想できたはずだ。
オレガノ達人間には予想できなかっただろうが、自分にはできたはずだ。

「迂闊じゃった、迂闊じゃった……！くそ、アポロン！」
珍しく狼狽しながら叫ぶフェンネルに言われるまでもなく、アポロンは水を掻き分けて岸に上がると二人の服を掴んで走り出す。
予想はできたはずだ。自分は、人間達の知らない情報を知っていたのだから。
奴の目的は。ミスリルの目的は、恐らく――
「……フランネル？」
ミスリルと名付けられた大巨人は、自分より遥かに小さい巨人を見てつぶやいた。口はないが、確かにしゃべっている。
アポロンのそれと良く似た――しかし大きさはまるで違う――宝石が見つめていたのは
自分のミニチュアのような石の巨人、アポロンではなく、

かつて自分を造っておきながら封印した身勝手なエルフの血族、フェンネルではなく、
「フランネル……」
「え？」
「見つ、けたぞ、よ、うや、く、見つけたぞ、フランネル……」
ミスリルの一つ目が見つめていたのは、アポロンではなく、フェンネルではなく、
未だ事態を飲み込めずに大巨人を見上げる少女だった。
目を見開く少女――アイナ・コンフリーの遥か上方で、ミスリルは巨大な拳を固く硬く握り締める。
「よう、よ、ようやく、ようやくぅ！！ようや、く、見つ、け、たぞ、見つけた、ぞ！！ようやく見つけたぞ！！！フランネルぅぅぅぅぅッッ！！！！」

ぐらあっ――

巨体が傾いだ。ミスリル本人は殴りかかっているつもりなのだろうが、下のアイナ達には倒れ込んでくるようにしか見えない。
「な、何……！？」
「あれがミスリルじゃ！」
走り続けるアポロンの肩の上を身軽に渡り歩き、アイナをその薄い胸に抱き止めたフェンネルは
同時に右手で素早く印を切っていた。見えない糸を編むように動いていた指が、空気中から何かを引っ張り出すような仕草を見せ、
きぃぃぃぃっ……　ばちゃあああああっ！！！
フェンネルの右手が突き出されるが早いか、ミスリルの傾いた体が再び持ち上がった。
持ち上がったと言うよりは、弾んだと形容するほうが正しいかも知

れない。
『結界』の魔法だ。あらゆる物体を拒む見えざる盾が、ミスリルを弾き飛ばしたのである。
よたよたと後退するミスリル。フェンネルは一人安堵していた、何も考えずに吹き飛ばしたが
もしあそこで尻餅でも突かれていては、間違いなく川で泳いでいた人間に被害が出ただろう。
振り落とされないよう必死にフェンネルにすがっていたアイナが怒鳴る。そうしないと聞こえなかった。
「み、ミスリルって、船の中で話してもらった、あの！？」
「他にミスリルという単語の意味を知っとるなら、今すぐに教えてくれんか？」
そう言ってフェンネルは笑う。引きつった端正な顔は、どうひいき目に見ても笑顔には見えなかった。

「さて、どうする？」
「どうするって……」
「断言するとの、奴の狙いはおんしじゃ。おんしが逃げる方向に奴はついて来るぞ」
「え……」
あまりに唐突に提示された事実に絶句するアイナ。
説明をすっ飛ばされても、理屈が飲み込めなくとも、フェンネルの真剣な表情を見ればそれが真実だとは理解できた。
露骨に表情に出るアイナの混乱。自分ではパニックを起こしかけているはずなのだが、
「……下流に逃げましょう、これ以上上流に向かうと、町に突っ込んでしまいます！
とにかく町から遠ざけないと！奴にスタルトで暴れられるわけには行きません！」
口をつくのはとても今まさに我を忘れようとしている少女の提案と

は思えない、冷静で筋の通った逃走ルートだった。
フェンネルも半ばそういう性格を見越して聞いたのだろう。頷き、疾走するアポロンの頭をぺちりとやった。
「アポロン、聞いたな？下流に向かって走れ！人の多いところや町は避けるんじゃぞ！」
主人の命令に頷き、アポロンはやや前傾姿勢を取ってペースを上げる。

ずんっ！！ずんっ！！ずんっ！！ずんっ！！

体長二メートルを超える石巨人アポロンの足音を掻き消す、ミスリルの轟音。
片足が根元からないため、腕を杖代わりに地面に突いて歩いている。
動作自体はひどく遅いのだが
とにかく歩幅に差がある上、ミスリルには障害物と呼べるようなものが存在しない。
大昔に存在したとされる巨大な肉食トカゲと人間が戦う安小説のワンシーンをアイナは思い出す。
あまりに現実感がないせいか、恐怖と混乱はきれいに消え去っていた。
それは尻の下で響く頼もしげな振動と、ずっと自分を抱いてくれる温もりのおかげでもある。
「いずれアポロンさんが走れなくなったら、少しまずいですね」
「問題ないぞ。アポロンはいくら動いても疲れないからの、永遠に走れる」
アイナが驚いて肩越しに背中を見やると、フェンネルは意地悪く笑っていた。
「……日が出ている限りはの」
「ダメじゃないですか！」

「そう言うな。アポロンが謝っとる。今度はホントじゃぞ」
「あ、ごめんなさい、アポロンさん！アポロンさんが悪いわけじゃないですよ……って、そうじゃなくて！」
「暴れるでない、落ちたら拾ってやれんぞ」
「暴れたくもなりますよ、何とかしないと……どう何とかすれば……」
「そう一人でしょいこむな。おんしはまだ子供なんじゃから、できないこともあるじゃろ？」
言いながらフェンネルは親指で後ろを示した。
猛スピードで横に流れていく緑の土手。アイナが体を入れ替えてそちらに目を向けると、たくさんの人が群がっているのがわかる。
「そういうときは、大人に頼ってもいいんじゃぞ」
大半が知らない男だったが、その中に良く知っている顔が一つだけあった。
「……銃士隊、放てぇ！！」

――ずだだだだだだだっ！！！

火薬が絶え間なく爆発した。
煙い大合唱に弾かれて飛んでいったのは、球形に整えられた小さな鉛（なまり）。
ウィナリス島都市国家スタルト自警団における最新兵器、ライフル銃を構えた男達は
油断なく第二射の用意を整えながらも、地を揺らして突っ走ってきた石巨人の姿に驚きを隠せずにいる。
そればかりか水着姿のエルフが肩から降りて来たとくれば、彼らが銃口をフェンネル達に向けても無理はなかった。
思わず身構えるアイナと、気負いなく立つフェンネルとアポロン。
「待て！」
ふいに鋭い声が響いた。銃を持った男達を掻き分けて現れたのは、

古びた鎧と剣で武装した顎ヒゲの男――オレガノ。
「お父様！」
「アイナ、無事だったか……良かった。他に生存者はいないか？」
「もう少し川のほうに行けば、まだ人はいたと思います」
「そうか。……総員、このまま進め！」
上司であり、今となっては数少ない実戦を経験した戦士であるオレガノの言葉を聞き
ただただエルフとゴーレムを凝視していた自警団員が、目の前の脅威に向き直る。今はどう考えてもミスリルを倒すのが先だ。

「……しかし、あまり効いてはいないようだな」
足並みを揃えて進んで行く男達の背中と、何かに慌てているらしいミスリルを見やり、オレガノは緊張した面持ちでつぶやく。
戸惑ってこそいるが、それは明らかに銃弾を受けたダメージによるものではない。そもそも、撃った弾の大半が届いていなかった。
ミスリルが大きな動きに出ないのは、おそらく町の四方八方から接近して来る自警団の対処を考えているからなのだろう。
足元に大量の虫がぞろぞろ寄ってくれば、誰だって気味悪く思う。同じことだった。
「今のがライフルとかいう武器かの？見たのは初めてじゃ、なかなかの迫力じゃの」
「あの巨人が迫力だけで倒せれば、楽だったのだが」
「人生そう甘くはないじゃろ。……まあ、間違った作戦ではない」
遠くミスリルから視線を外さず、フェンネルが続けた。
「今の武器、弓矢などよりよっぽど効果的じゃ。四百年前ならともかく、今の技術で製造された武器なら
奴にダメージを与えることも十分可能じゃろう」
「直に見た奴の話は重みがあるな」
「二度と見たくない奴じゃったがの。――とにかく、正面から接近戦をするでないぞ。

おんしほどの腕前がなければ、ミスリルの力に真っ向から挑むのは無謀もいいとこじゃからな。
数と素早さで引っ掻き回すんじゃ。あと、港の船に大砲がついとるじゃろ。あれを持って来るのもいいかも知れん」
「言われるまでもない、今ありったけの大砲を部下に準備させているところだ。スタルトの底力を見せてやるさ」
「その意気じゃ。……生き残れよ、オレガノ」
「ああ。……すまないが、アイナを頼むぞ！」
オレガノは腰に帯びていた二振りの剣のうち、片方をフェンネルに投げ渡した。
かなり細身であったが、フェンネルにはまだ重いくらいである。しかし、ないよりはましだ。
部下に追いつこうと走り出すオレガノの背中は、勇ましく、物悲しげで、少しだけ楽しそうに見えた。

「とにかく、今のうちに着替えておくかの」
フェンネルが落ちていた皮袋をアイナに放る。アイナはそれを無言で受け取って、そのままでいた。うつむき、足元に目を落としている。
「どうした？」
「お父様……奴と戦うつもりでしょうか」
「じゃろうの。それが奴の仕事なんじゃろ？」
「……勝てる、でしょうか」
「多分の」
気のない返事を返すフェンネル。にらんできたアイナに肩をすくめてみせた。
「ミスリルの手足がぶっ壊れとるのは、こっちにとってはかなりのプラスじゃ。動きも鈍いし、隙も大きくなる。
奴の攻撃をかわして、その隙に集中攻撃すれば、魔法がなくとも

ミスリルを倒すことは可能かも知れん」
「ですが……」
「おお。ミスリルが倒れた時、この町がどうなっているか、おんしの父さんがどうなっているかは保証できん」
フェンネルがはっきりと言い放った。
慰めならいくらでも思い付いたことだろう。だが、アイナがそれを望んでいないから、言わなかった。

アイナはしばらく冷えた体を突っ立たせていた。しばらくして、着替えの入った袋に手をかける。
「逃げようって顔じゃないの。どうする気じゃ？」
「戦います」
小さな声だったが、つい先ほどのフェンネルよろしくはっきりした声だった。
アポロンが思わず手を伸ばしたが、隣のフェンネルがそれを片手で止める。生気すら感じられないほどの無表情だった。
「四百年前にの。数多くのエルフが奴と戦い、そして死んだ。
ウィナリスは完膚なきまでに破壊され、再興にかなりの時間がかかった。
この島の造船技術や文化レベルが大陸より低いのは、そのせいじゃ。一度無に還されたせいで、の」
「……」
「そんな化け物と戦う気か？」
「父がいなければ、今の私はありません。この町がなければ、今の私はありません。
今の私には使いものになる力があります。魔法が使えるのは私だけですから。
ミスリルの体に一番効果的なのは、魔法なんですよね。なら、私が戦えば勝率は上がるはずです」
「なるほどの。じゃがな、魔法を使えるのはおんしだけじゃなかろ

う？」
眉間にしわを寄せたアイナに、フェンネルはけたけたと笑って自らとアポロンを交互に指差した。
「……は？」
「私もおる。アポロンもおる。生粋のエルフと超上級のゴーレムじゃ、これ以上の戦力はあるまい？」
「で、でも、あなた達は……」
「おんしは思い付きで今みたいなことを言う奴ではないし
絶望的な戦いに挑む自分に酔うようなタイプでもないじゃろ。
戦う覚悟があるのなら、私らは何も言わんよ。一緒に奴を倒すぞ」
フェンネルが言い終わるのを待たず、アポロンはひょいとアイナを抱え上げて肩に乗せた。
自ら飛び乗ったフェンネルの位置を調整した後、二人の着替えを持って走り出す。
「あ、アポロンさん、どこへ……」
「おんしのメイスを取って来なければなるまい。
できる限りの準備をするためにもの、とりあえずはおんしの家に帰るべきじゃ。
……町人の注目を浴びるのは、この際じゃから我慢せいな？
フェンネルが笑ったのと同時に、ミスリルに追われていたときの全力疾走に比べればだいぶ楽な振動が伝わってきた。
ぽかんとしてアポロンに揺られていたアイナは、時が経つごとに潤んでくる瞳をこすりながらつぶやく。

「……一つだけ、聞いてもいいですか？」
「何じゃ？」
「どうして、そんなに気遣ってくれるんですか？守ってくれるんですか？
クロノガルデニアにいたときからずっと思ってたんです。同胞から疎まれてまで、命を賭けてまで、どうして」

数秒の沈黙を挟み、フェンネルはやや低い声で返す。
「おんしがあまり美味そうだったもんでのお」
「はあっ！？」
「嘘じゃ。まあ、乗りかかった船ってやつじゃよ。細かいことは気にするな」

「すげえ……」
自警団の一人が、他人事のようにつぶやいた。

「来るぞ！どっちでもいい、横へ飛べ！銃士隊は撃ち方用意！ぼやぼやするな、潰されるぞ！」
巨人と――正確には巨人の左足と対峙する男達の中に、オレガノの声が響き渡る。
ミスリルは足元に群がる人間達を一掃しようと右拳を振り上げている。ものの数秒もしないうちに、それは地面へと突き落とされるのだろう。
慌てて左右に散らばる戦士達に送り出されるようにして、オレガノがミスリルへと突っ込んだ。
「お、オレガノさん！？」
「団長、下がって、団長っ！！」

ぼがっ――！！！

ミスリルの虹色の拳が大きく地面をえぐった。遠間から一部始終を目撃した男達が顔を背け、
すぐにその心配が杞憂であったことに気付き、新たな心配の必要性にも気付かされた。

「マジか！？団長ーっ！！」
地面にそびえ立ったミスリルの右腕へ、オレガノが駆け上がっていく。
「む、う……」
さすがのミスリルも驚いたようだった。四十手前の精悍な顔立ちに闘志を秘めたオレガノは
近所の階段でも上っていくかのように、いともたやすくミスリルの顔面へと到達してしまう。
「おおおっ！！」

ぎぃんっ――！　ぎんっ――！！

何のひねりもない、それでいて確かな技術に裏打ちされた豪快な太刀筋がミスリルを襲った。
顔面の宝石に数本だが深い傷を入れられ、いよいよ怒り始めたミスリルが鬱陶しいハエを払うように右腕を振り回すものの
オレガノは始めから相手の行動がわかっていたかのように飛び上がると、大きさに似合わない速度で動くミスリルの手の甲に着地、
上手く膝で衝撃を殺しながら空中にその身を投げ出す。
自警団の部下が上げた悲鳴を遠く聞き流しつつ、オレガノは派手な水飛沫を上げて川に転落した。
「……こら、何をしている、お前達！　敵から目をそらすんじゃない！」
鉄鎧を着ているにも関わらずあっという間に水から上がってくるや、呆然としている戦士達へ怒鳴り飛ばし始める。
「ぼさっとするな、死にたいのか！　俺達がやらなければ、スタルトは終わりだ！
　手放したくない宝が一つでもあるなら、それを守るために剣を振れ！銃を撃て！鬨を上げろ！力の限り戦え！」
たった今一騎当千の働きを見せた男の言う言葉には、絵空事ではな

い重みがある。
皆の武器を取る手に力がこもったのを感じ、オレガノはにやりとした笑みを浮かべて叫んだ。
「銃士隊、砲士隊、指示を待つな！準備ができた奴からぶっ放せ、ただし味方に当てるなよ！
槍士隊は敵が倒れ込んだところを狙え！巨人が立って動いているときには無理をするな、頭に攻撃を集中させろ！
剣士隊と俺で奴をかく乱する！剣士隊各員、俺に続けぇっ！！」
うおおおおおおっ！！！
死闘には似つかわしくないと思える青空に鬨の声を響かせ、男達は自らの十数倍の巨体を持つミスリルへ襲いかかる。
細々とした生物の予想外の猛攻に怒り、わなわなと震えていたミスリルは
右腕を突いて大きく体を持ち上げ、足で戦士を踏み潰しにきた。再び見切ってゴーレムの弱点――頭の宝石へ斬りかかろうと
腰を落として身構えたオレガノの小脇を身軽に駆け抜ける影が二つ、足音重く駆け抜ける影が一つ。
「……な、何っ！？」
その正体を悟ったオレガノの顔が驚きに歪められた。影のほうもそれに気付き、オレガノをかばうように立ち止まる。
「お父様、私も戦います」
「つーわけじゃ。百万の援軍を得たと思っておれば良いぞ。……行くぞ、アイナ！」
「はい！」
三つの影――アイナ、フェンネル、アポロンが走り出した。

ミスリルの足裏が日の光と空を覆い隠す。
放っておいたら間違いなく圧殺される状況下で顔色一つ変えず
フェンネルは両手の指をそれぞれ複雑に揺らしながら叫んだ。
「止めろ、アポロン！フォローはしてやるからの！」
アポロンがこくりと頷くと同時に、石と金属がぶつかり合うくぐもった金属音が轟いた。

ぎしいいいっ――

フェンネルの『鋼鉄化』で、一時的に石巨人から鉄巨人となったアポロンが
伸ばした両腕でミスリルの足を受け止めている。
もちろん、普通にそんなことをすればアポロンが土にめり込んでしまう。
こんな芸当も、右手の『鋼鉄化』と同時に放たれた左手の魔法『重力変化』の恩恵があればこそだった。
今ミスリルは、本来の数分の一程度の重量に軽量化されているのである。
「さすがに二つ同時はしんどいの」
「私がやります、制御に集中してください」
「助かる」
アイナが右手の鉄棍棒を握り締めつつ、先ほどのフェンネルと似通った動きを左手にさせる。
その間にアポロンは本来よりだいぶ軽くなったミスリルを力いっぱい押し上げていた、
もともと不安定な姿勢でしか立ち上がれない大巨人は、足の裏からの予期せぬ圧力に耐え切れず、尻を地面についてしまう。
響き渡った鈍い音に顔をしかめながらも、その頃にはアイナの魔法も完成している。

きいいいいいい……！！

「……行けえっ！！」

アイナは自らに『重力変化』の魔法をかけて体重を極限まで減らし、座り込んだ姿勢でなお町の建造物を見下ろすミスリルの頭へと跳び込んだ。

文字通り身軽に着地すると魔法を解き、裂帛の気合とともにメイスを高々と振りかぶる。

メイスは途端に光を放った。下でフェンネルが構築した『光源』の魔法がアイナの得物を光らせたのだ、

ミスリルの体は、魔力を帯びた武器のほうが破壊しやすい。魔力を付与するだけなら、簡単な魔法で十分だった。

「はあああああっ！！！」

――っがあん！！

輝くメイスがミスリルの顔面にひびを入れ、わずかだが破片を飛び散らせる。

「わっ……」

勢いあまってバランスを崩し、うっかり足を踏み外してしまったアイナだったが

フェンネルが腰から剣を抜きつつかけてくれた『重力制御』で、何の衝撃もなくアポロンの両手に収まる。

「怪我はしとらんな？」

「はい、ありがとうございます」

油断なくミスリルを見つめつつ、三人は改めてそれぞれの武器を構えた。

アポロンが拳を握り、フェンネルが右手に何気なく剣を提げ、アイナがメイスを正眼に固定する。

「フランネル……」
器用に右腕一本で立ち上がったミスリルが正面に立つアイナを見下ろし
こころもち顔を近づけて怨嗟の声を上げたが、アイナはひるまずに叫び返す。
「フランネルゥゥゥゥゥゥッ！！！！」
「人違いですよ、私はアイナだ！」
アイナの靴底が、草とともに土を掘り返した。

第十三話「光明」

きいいいいい……！

「食らえ！」

彼女の弓が下手なのは、あくまで本物の弓を使った場合に限るらしい。

フェンネルが放った光の矢は、狙い違わずミスリルの頭部――ゴーレムの弱点である核を目指して飛んでいく。

――がきっ！

が、矢が刺さったのはミスリルの頭ではなく手の甲だった。大きいくせに素早い。

「――ええい、食らえと言っておるじゃろうが！」

「さすがにできない相談だと思うのですが」

「わかっとるわ！」

虹色に光り輝く手の一部がぽろぽろと欠けたが、さしたるダメージではなさそうだ。

そもそもゴーレムというのは核さえ無事なら他の部位は好きなように復活させられるらしい。

アポロンと二ヵ月強をともに過ごしたアイナは、彼らに痛覚が存在しないことも知っている。

ミスリルを倒すには頭部を破壊するしかないということだ。

「……手強いですね」

「ああ。じゃがの、四百年前の奴はこんなもんじゃなかった」

フェンネルは右手の剣を握り直しながら言った。

考えてみれば、まだエルフの血族がこの地に住み付いていた四百年

前に
あの巨人はウィナリスを壊滅させてみせたのだ。
本当なら、魔法を使える者が一人や二人いた程度で勝算の出る相手ではない。
アイナはミスリルの手足が不充分なのを心から感謝した。
「よし、アポロン」
二人を背中にかばってミスリルの動向に注意を払っていたアポロンは主人に名を呼ばれて振り向いた。
「私らで囮をやるぞ。続け」
「囮！？」
「ああ、おんしが考えておるような囮じゃないから安心せい」
囮という言葉に思わず『犠牲』というニュアンスを感じ取ってしまったアイナだったが
フェンネルは笑って肩をすくめただけだ。
「私が皆の勝利のために自分の命を捨てるようなタイプに思えるかの？」
「思えません」
「またきっぱりと言い切りおって……まあ、いいわ。
良いか、私とアポロンで奴の攻撃を引きつける」
剣先で倒すべき相手の姿を示しながら、フェンネルは続ける。
「奴は隻腕で片足じゃからの、殴っても蹴っても、必ず攻撃の後にはバランスを崩す。
そこでアイナ、おんしの出番じゃ」
「……私が、ミスリルの頭に攻撃するんですか？」
「相変わらず飲み込みが早いの」
笑っているのはフェンネルのみ、アイナは当然不安そうな顔をしていて
アポロンも納得がいかなそうにフェンネルの肩をつついている。
「これが妥当なんじゃよ、いくら剣腕と度胸があったところで、アイナは実戦経験がほとんどないからの。

奴が反撃できないところで一撃離脱をするだけなら、失敗しても攻撃ができないだけで済むが
囮役に失敗すれば、あっという間にぺしゃんこじゃ。リスクがでかすぎるじゃろ」
「でも、それはフェンネルさんやアポロンさんだって同じじゃないですか？」
「アポロンは核さえ破壊されなければ、いくらだって復活できるからの。仮に核を潰されたところで、破片があれば修復も可能じゃよ。
そして私は魔法が使える。『鋼鉄化』なり『重力操作』なり、保険にできる魔法はいくつもあるでのお」
言いながらフェンネルはふらふらと手首を揺らし始めた。
それに合わせて動く指が魔法を構築し、アイナのメイスを輝かせる。
「ゴーレムの核を砕くには、それで十分じゃ。おんしは武器に魔力を込める心配はせんでいい。
――私らが奴のバランスを崩す。奴が倒れ込んだら、おんしはその時を逃さずに突っ込め。いいな？」
「……はい！」

怒鳴り調子で自警団員達に命令を下すオレガノの隣に、フェンネルが並んだ。
アポロンは周囲の男達が驚くのにも構わず、すでにミスリルへと突っ込んでいる。
「フェンネルか」
「状況は芳しくないようじゃの」
「……数人だが、死者が出ている。打開作はないか？」
沈痛な表情をしたオレガノの肩越しに、うつ伏せに土にめり込んだ男の死体が見えた。
「遠距離攻撃ができない者はさっさと下がらせろ。市民の避難誘導に回すんじゃ。

この騒ぎで火事場泥棒も多くなっとるじゃろうしの」
「だが、それでは戦力が――」
「私とアポロンが囮になる。大砲とライフルで援護してくれれば良い」
「囮……？」
オレガノは眉をひそめたが、ミスリルの攻撃を回避することに専念しているアポロンとやや後方で光るメイスを構え、戦況をうかがっているアイナの姿に全てを察したようだった。
「娘を信用してやれ。私などよりずっと、アイナの強さは理解しているはずじゃろう？」
「……当たり前だ」
「うむ。――大丈夫、死なせはせん！つーわけで手伝ってくれると助かるんじゃがの！」
「任せろ！」
二人が同時に地を蹴った。

近付くにつれ、ミスリルの巨大さが恐怖として感じられてくるが今更そんなものに恐れをなすフェンネルではない。オレガノもアポロンも同様だ。
「剣士隊、槍士隊、退け！銃に持ち替えろ！
余った者は市民の避難経路を確保するんだ！銃士隊、砲士隊は引き続き援護射撃！」
走りながら指示を飛ばし続けるオレガノと、やや困惑しながらも命令に従って機敏に動く優秀な団員を横目にフェンネルはアポロンのすぐ脇で止まった。そしてすぐさま横に飛ぶ。

――どごおおおおおんっ！！

彼女らの影を押し潰すようにミスリルの左足が落ちてきた。轟音も手伝って、見る者に雷のような印象を抱かせる。
「おー、怖いったらありゃしないの！」
膝を折って地面に手を突きバランスを取るミスリルに、フェンネルとオレガノが飛び付いた。
魔法で空を飛べるフェンネルはともかく、オレガノは膝から頭を目指して自分の足で駆け上がっている。
超人的という他ないバランス感覚だ。フェンネルは口笛を吹いた。
「おい、こいつの弱点は頭で良かったんだったな！？」
「良く覚えとったの、大正解じゃ！」
オレガノが右肩に上がるや剣を振りかぶり、フェンネルは左肩に着地して魔法の構築を始める。
「おおおおおっ！！」
「はあああああっ！！」

ばちいいいいっ！！！

オレガノのフルスイングがミスリルの核に食い込むと同時に、フェンネルの魔法が音高く炸裂した。
ためらいなく飛び降りた二人の前で顔を押さえ、悲鳴を上げて悶絶するミスリル。気が狂いそうな高い声だった。
「……やかましいな」
「じゃから、早く倒そう」
二人は『重力操作』でゆっくりと落下しながら言葉を交わす。他人事のようだが、口調は真剣だ。
そして着地するなり走り出した。かく乱のため、立ち尽くすミスリルを取り囲むように円を描いて地を蹴る。
「相手の動きに注意しろよ！」
「わかっとる！」
片足で器用に立つミスリルが、指の間から一つ目を光らせた。

大巨人が放つ威圧感が微妙に強まったことを感じて立ち止まったオレガノの前で
ミスリルが高々と拳を突き上げる。胸が下を向いている、このまま叩きつけてくる気だ。
「フェンネル！アポロン！来るぞ！」
「だからわかっておるわ、そう心配するでない！」
このエルフとゴーレムがオレガノほどの警戒を抱いていないのは、やはりただ実戦を経験しただけの者と、戦場で生きてきた者との差だろうか。
彼からすれば今のミスリルは明らかに雰囲気が異なるのだが、それは彼以外の者からしたら微妙な差異ですらない。
振り下ろされた拳はフェンネルを捕らえずアポロンを捕らえず、再び地面をぶん殴ってクレーターを作る。
フェンネルは大きく間合いを外していたが
アポロンは四つん這いに――正確には二つん這いになったミスリルの懐に上手く飛び込んでいた。
「っし、行け、アポロン！」
主人の期待に応えんとアポロンが拳を握り締め、自らと同じ一つ目の顔を表情なく睨み付ける。

――がしいいいいいっ！！！

渾身の右拳がミスリルの顔面を突き上げた。
アポロンの拳が、自らのバランスすら崩しかねないほどの勢いを持ってミスリルの顔面を抉る。
飛び散るミスリルの核の破片。自惚れというものに縁遠いアポロンであっても、自らの勝利を確信した一撃だった。
ひびだらけの宝石を輝かせながら、ミスリルはゆっくりと地に倒れ伏せ
「……アポロン、逃げろぉっ！！」

ない。背中を風が吹き抜けていくような感触を覚えて振り返ったアポロンは、オレガノの絶叫の意味を知る。
ミスリルの左膝が高々と持ち上がっていた。
拳を突き立てた反動を利用して下半身を振り上げていたのだ、
恐らく最初の拳がかわされることは想定内だったに違いない。
ミスリルの胸板の下に収まっていたアポロンに、不意打ちの一撃をかわすことはかなわず

ご、しゃっ――！！

どんな金属より硬い膝で貫かれ、胴体を粉々に砕け散らせてしまった。
「――アポロンっ！？」
吹き飛ばされたゴーレムの破片にたまらず駆け寄るフェンネル。
胴体の損傷が激しかったが、四肢は無事であったし、核も無傷だった。すでに再生が始まっており
大は岩ほど、小は砂粒ほどの破片がかたかたと震えながら集まり出している。
ほっと一息つくが早いか、フェンネルはその端正な顔を怒りに歪めて立ち上がった。
「やってくれたの……！」
魔法を構築する高音を響かせ、フェンネルが飛翔する。素早く立ち上がるミスリルは、しかしその巨体のせいで
のろのろと起き上がっているようにしか見えなかった。
「いい加減にくたばらんか――」

きいいいいいいいっ……

宙を舞うフェンネルが何度目かすらわからない魔法の構築を始めた。
が、今までのそれとは明らかに違う。浮いていることを利用して手

足を振り乱し、全身で魔力を紡ぎ上げていく。
織り上げた魔力の機織物を虚空から引っ張り出し、フェンネルは叫んだ。正面切って睨み合うミスリルが、右手を顔の前にかざす。
「――この木偶の坊がァ！！！」

ご――じゅあああああああっ！！！！！

ガードにもまるで頓着せず叩きつけられた魔法は、火など通用しない体であるミスリルの巨体を焼き尽くし始めた。
エルフの社会において『発熱』の魔法は本来、燃やすもののない場所で暖を取るような目的で使われたものだが
フェンネルの手にかかれば、それは余波で周囲の温度を上げてしまうほどの凶悪な熱風と化す。
仮にアイナの乗っていた客船を沈めたのがフェンネルであったなら、アイナは骨も残らず空気の一部と成り果ててしまっていたはずだ。
それだけの魔力が――防御されてなお、ミスリルの前腕を中ほどまで吹き飛ばすだけの魔力がフェンネルにはある。
「……浅いか！」
変な匂いのする白煙の中、フェンネルの眼はミスリルの核がそれでも無事であることを見抜いていた。
右手の剣に魔力を宿らせながら、止めとばかりに急降下して
アポロンと同じように、背後から漂ってくる異様な気配に後ろを返り見た。
「何じゃと――っ！？」
迫り来たのはミスリルのつま先だ。
フェンネルの魔法に体を傾がせたのは間違いないのだろう、しかしそれすらも利用してミスリルは後方に宙返りし
サッカーでいうところのオーバーヘッドキックの要領でフェンネルを蹴り潰しにきたのである。
アポロンよりは機敏に動けるということか、制御をしくじってきり

もみしながらも、すれすれでミスリルの足をかわすフェンネル。
眼下でミスリルは仰向けに倒れ込み、面白いように河川敷の地形を変えていた。
川の水は流れをせき止められて溢れ、林は薙ぎ倒され、大地はへこんでいく。
「いよいよ本気でキレ始めおったな、木偶が……！」
呆れたようにかぶりを振り、フェンネルは倒れたミスリルの頭めがけて一直線に突っ込んだ。
これ以上奴を暴れさせれば手遅れになる。河川敷を滅茶苦茶にされるくらいならばまだいい、
街中に川の水を引っ張り込まれることも有り得ない話ではないのだ。
瞬く間に大洪水が起きるだろう。
最終的にミスリルを倒せたとしても、アイナの故郷を潰されては負けたも同じだ。何としてでも今のうちに叩かねばならない。
まだ被害が少ないと言える今のうちに。
「叩くっ！」

立体パズルを組むように補修されていくアポロンのそばに
そんなことをして何が変わるわけでもないだろうが、アイナは寄り添っていた。
「大丈夫ですか？」
心配げな言葉にアポロンは頷く。胸から上はすでに復活しており、
あとは四肢が繋がるのを待つばかりとなっていた。
やや表情を和らげたアイナは、少し向こうで駄々をこねるように暴れているミスリルを見やった。
ひびだらけの核に操られる七色の体は、左腕と右足を持たない。
妙だ。アイナはそんなことを考えていた。いかにアポロンが意思を持つ高度なゴーレムであるとはいえ
アポロンと同じ体付きをしている――つまり、アポロンと同程度の技術を持って製造されたと考えられるミスリルが

あそこまで損傷した体を放っておくだろうか。事実、先の小競り合いでフェンネルに破壊された前腕は
ゆっくりとだがすでに自己再生を始めている。相手に回復能力があることは間違いない。
「それなら、何故――」

背骨を砕こうと弧を描く蹴りは、余裕を持ってかわされた。
「奇襲が二度続けて通じると――！」
思うな、という言葉は自らを襲う重力に呑み込まれた。
フィギュアスケート選手もかくやという華麗な舞いを披露しつつ左にスライド、すぐに進行方向を前に戻し
螺旋を描いて突き進むフェンネルの目標は無論、ゴーレムの弱点である頭の核である。他を破壊しても、どうせ修復されてしまうのだ。
ヘッドスプリングで跳ね起きたミスリルの頭突きを、前方宙返りしながらの急上昇で回避する。
「ちっ、思ったよりも身軽じゃの！」
ミスリルのつむじ――ミスリルに毛は生えていないが――の辺りを逆さに浮いたまま見据えたフェンネルが毒づく。
片足でバランスを取らねばならないという制約はあるが、片方の腕が使えない今の状況において
これより速く立ち上がる方法はそうそうないだろう。
フェンネルがけん制の魔法を放とうとした途端、振り向く勢いを乗せたバックナックルが眼前をかすめていく。
「のわっ――」
『重力操作』を持続させるための集中を保ちつつ他の魔法を使うというのは神経を使う、
そんな高等技術を用いている真っ只中、視界をさえぎるほどの巨大な質量を目の当たりにし
さすがのフェンネルの集中も途切れた。ものの数秒だけにしろ、本

物の重力に引かれて落下する。
どうにか持ち直したフェンネルが次に見たのは、倒れるコマのようにバランスを崩すミスリルの巨体だった。

ばきゃ、ばきゃばきゃばきゃ、ずぅ――んっ……！！！

川の水をぶちまけ、木々を押し潰し、逃げ遅れた自警団を圧殺して受身を取り
機敏にも背中で転がり、巨人は再び身を起こす。
模型のように小さな本物の景色。いびつに潰れた地面の上で、ぐちゃぐちゃに潰れた屍肉が濁った流れにさらわれていく。
「――畜生がァァァーッ！！」
裏返った絶叫とともに放たれた光の矢を、ミスリルはいとも簡単に突き出した手で捕らえて握り潰した。
自ら射った魔力を追うように加速するフェンネルを叩き落とそうと腕を振りかぶり、無造作に下ろしてくる。
「ちっ――　　っ！？」
空を掻き回した平手が湿った大地に手形をつけた。その手に飛び乗り、身軽に頭部を目指す男の姿をフェンネルは見る。
オレガノだ。彼の身軽さは賞賛する他ない、自ら突っ込みつつもその動向を見守るエルフの下で
男手一つで娘を十四まで育て上げた父親が、今また娘を守らんとミスリルの腕を駆け上がる。
が、その腕がぐらりと傾いた。
「っ！？」
ミスリルは強引に腕を持ち上げていた。振り下ろした勢いに負けない力で振り上げられた右の腕は
その衝撃に耐え切れず、肘を妙な方向に曲げさせてしまっているがゴーレムには痛覚もなければ折れる骨もない。ミスリル自体には何の問題もなく、

今危険にさらされているのはその腕の上にいたオレガノの命である。
彼はちょうど肘の付近を走っているところだった。関節に挟まれる
ことを避けて宙に逃げた判断は見事であったが
その後の状況は絶望的である。翼のない人間に、空を間近に感じら
れるこの高度からの自由落下は死を意味した。
「……フェンネル、すまんっ！」
投げ出されたオレガノの叫びが聞こえた。
先に逝くかも知れないことへの謝罪か、フォローを頼むことへの謝
罪か。彼も彼女も、前者の可能性はまるで考えなかった。
「任せろ！死なせんぞ！」
正中線で旋回しながら上昇、ミスリルをまたぎ越した弧の頂点で一
瞬だけ速度を緩めたかと思えば
次の瞬間、フェンネルははるか下方のオレガノへと急降下している。
「ぐぅ――」

ずざぁ――っ

猛烈なGに耐え伸ばした両腕にオレガノのフルプレートアーマーを
抱き止め、
足の位置を戻しながら滑空、砂利を蹴散らし靴底で平行線を引きな
がら着地したフェンネル。
鋭く一つ息を吐き、何か魔法でも叩き込んでやろうと振り返れば
ほんの数メートル上にミスリルの握り拳が迫っていた。
「へ」
隣のオレガノを突き飛ばす猶予もない。何もできずに棒立ちとなっ
たフェンネルには
やけにゆっくりと時が流れているように感じられた。緑がかった虹
の拳のところどころが欠けていることも、
その横から何か灰色の物体が接近していることもはっきりと見える。
死んだ。有無を言う権利を無視してうっかり覚悟を決めてしまった

彼女の右横に
どごおおおおっ！！！！
ミスリルの拳骨が直撃した。すぐ真横が大地震の震源地であったかのような衝撃に吹っ飛ばされるオレガノとフェンネル。
呆けたような意識の中で反射的に身をかばう二人の目には、自らの肩を砕きながらの特攻で
どうにか拳の軌道を逸らすことに成功したゴーレムの姿があった。
「アポロン！」
戦線復帰したフェンネルのどちらかと言えば忠実なる僕は何か言いたそうに無言で天を指した。
示されるままに空を仰いだ二人は、まだ未熟な『重力操作』で飛翔するアイナを見つけ、
「「！」」
すぐさま自分の役割を理解する。

風を切る気持ち良さが薄れるのを感じつつ
アイナは握ったメイスの感触を確かめた。バック転して飛び上がったその下に、ミスリルの後頭部がある。
足裏を地面に向けながら、大上段に得物を振りかぶる。下ではフェンネルとアポロンがミスリルの足元へ駆け寄り
オレガノが何やら愛剣を輝かせているのが見える。
「お願いしますよ」
肩に力は入れない。最初は武器の重みに任せて振り下ろし、なめらかに最高速まで加速させ、打突の瞬間に全力を込める。
「――いやあああああっ！！！」
がきいいいっ！！

基本通りの打ち下ろしがミスリルの後ろ頭をぶん殴った。
痺れる腕に顔をしかめたアイナの足元で巨体が傾いだのは、打撃の威力というよりは、むしろ驚きのためだろう。
もともと地面に叩きつけていた腕に体重を預けて倒れるのをこらえたミスリルは、しかし立つことを許されなかった。

ごおおおっ！！

ミスリルの一本足が爆発した。ただでさえ体重が腕に寄っていたところに
フェンネルの魔法とアポロンの体当たりで向こう脛を打ち抜かれ、支えを失ったミスリルはうつ伏せに倒れ込んでしまう。
ミスリルは見た。自らの頭がつくであろう位置に、光る剣を構えた男が立っているのを。
「お父様っ！」
「オレガノ！頼むぞ！」
アイナとフェンネルがそれぞれの場所から声を張り上げた。アポロンの思いも同じだっただろう。
万有引力に逆らわず逆らえずやってくる巨人の頭に、オレガノは裂帛の気合と光刃をぶつけてやった。
その結果はすぐに知れることとなる。核ごと真っ二つに割られたミスリルの頭が、オレガノの左右にずんと落ちた。

「……」
「やったか……！」
オレガノは何も言わずに口元を吊り上げ、フェンネルが疲れ切った笑顔を浮かべてその場に崩れる。
アポロンは傷だらけの両腕を突き上げて喜びをアピールした。
頭を割られたミスリルはぴくりとも動かない。壊れているか、死んでいるか、どう表現すべきかは難しいところだ。

「倒した……」
『重力操作』でふわふわと降りてきたアイナは、真下にいたアポロンの手の上に着地し
礼を言う暇もなく、タックル気味に走ってきたフェンネルに抱き締められた。
「アイナ！アイナ！勝ったぞ！ミスリルを倒したんじゃ！」
「え、ええ――」
「どうした、浮かない顔をして」
オレガノも剣を納めながらアイナへと歩み寄ってくる。刃はすでに光っていなかった、フェンネルが魔法を解除したのだろう。
「まあ、実戦だったからな。良く頑張ってくれた、アイナ。父として誇りに思うぞ」
「――そう、ですか。ありがとうございます」
珍しくべたべたしてくるフェンネルに頬擦りされ、傷だらけの父の手に頭を撫でられ、ようやくアイナは笑顔を見せた。
犠牲者は出た。スタルトに被害が出なかったとは言えない。だが自分は確かに倒したのだ。あの化け物を。
そう自らに言い聞かせ、倒した敵の亡骸をもう一度見やったアイナは、
「やっぱり……逃げて！早く！」
叫びながら走り出した。いきなり抱擁を拒まれた三人が何事かとアイナの視線を追い、
「――んなっ！？」
「……馬鹿な！？」
立ち上がったミスリルを見た。

頭は割られた。それは間違いない、すでに虹色の輝きを失い
ただの岩として落っこちていた。だが、体のほうは生きているよう

だった。
頭が――否、目がないせいで周囲の状況を把握できていないようだったが
とにかく近くにアイナ達がいるものだと思っているのだろう、無茶苦茶に手足を振り回している。
実際にはアイナ達や自警団は、すでに遠くに避難してしまっているのだが。

「……ゴーレムとは、頭部を破壊されれば死ぬのではなかったのか？」
オレガノが苦虫を噛み潰したような面持ちで問う。
「……そのはずなんじゃがな」
フェンネルが仏頂面で頬を掻く。
何にせよ、放ってはおけなかった。理由はともかくミスリルはアイナを殺そうとしていた。
だからこそアイナがいる河川敷にとどまって暴れていたのである。
しかし、今のミスリルがアイナを確認する手段はない。
視界を失ったミスリルが、暴れながら街中に進むとも限らないのだ。
事態は一刻を争う。が、倒し方がわからないのでは止めようがない。
八方塞だった。
「私は『傀儡』の魔法を完璧に使えるわけではないがの……理論は知っとる。
魔力とは万物や大気に内包される力じゃが、人や亜人の精神力を削った力でも代用が利くんじゃ。
自らの魔力と外界の魔力を併用し、擬似的な精神を構築して宝石に込める。
ゴーレムはこの宝石――核に宿る擬似精神に基づいて物事を判断、そして擬似精神を削って魔力とし、それを用いた魔法で石や鉄を動かして自らの体とする」
「それが本当なら、核を破壊されたミスリルは動けないはずだろう」

「わかっておるわ」
腕を組んだフェンネルの脇で、オレガノがため息をついた。
自警団の兵士達もほとんど初めての実戦であり、仲間の死やミスリルを倒せなかったことで士気が落ちている。
辺りに暗い空気が満ちていた。
「……あの、フェンネルさん」
だからこそ、アイナの控えめの挙手に全員が注目したのである。
思わず身を縮こまらせたアイナに、フェンネルがどうしたのかと視線で聞いてきた。
「少し考えたんですけど、いいですか？」
「何じゃ？」
「ミスリルには、アポロンさんと同じように
壊れたところを修復する力があるんですよね」
「そうじゃろうの。私が吹っ飛ばした腕も再生しとったからな」
「だとしたら、ミスリルが自分の左腕と右足を直さないのはおかしいと思いませんか？」
それを言われ、数人がミスリルに向き直った。体に目立った傷はないが、やはり腕と足が片方ずつなくなったままだ。
自警団の皆の気持ちを代表してオレガノが言う。
「確かに……もし修復機能が備わっているなら、斬った頭だってすぐに復活するだろうしな」
「それは私もおかしいと思ったが、どのみちこちらに有利な要素じゃったからな。深く考えておらんかったわ。
――それで、それがどうしたんじゃ？」
「自分なりに推理してみたんですが――あの腕なり足なり、いつ壊れたのかはわかりませんが
壊れた部分を直せるのに直っていないのは、直さないか直せないかのどちらかです。
この場合、直さないと言うのは有り得ないと思います」
「じゃろうの」

「だとすれば、ミスリルは手足を直せなかったとしか考えられません。
ではどうして直せなかったのか。可能性はいくつかあります。
第一に、ミスリルには腕と足を直すだけの余力がなかった」
「……それはないな」
アイナの仮説を否定したのはその父のオレガノだ。自警団の頭の回る数人も同じ結論に至ったようで、うんうんと頷いていた。
「仮に四つの四肢全てが破壊されていたとして、復活されられるのは二本だけだったとするなら
俺ならば腕一本足一本より、足二本を取る。あれだけの巨体なら、殴るより踏み潰す方がはるかに効果的だろう。
それに、奴は戦闘中に吹き飛ばされた腕や細かな傷も修復していた。余力は十分にあったと見るべきだ」
「私もそう思いました。……次の仮説ですが、ミスリルの復活は不完全で、腕と足がまだ封印されたままである」
「残念じゃが、それも間違いじゃの」
フェンネルがやれやれという調子で肩をすくめたが、表情は本当に残念そうだった。
封印や復活うんぬんという会話は、アイナ、フェンネル、アポロンの三人のみに通じる会話だったが
他の者達もミスリルが今までずっと封印されていたということはどうにか理解しているようだった。
「封印についてあんまり詳しいことは知らんがの、
別にゴーレムの体の材料は、前と同じでなければならないというルールはないんじゃ。
たとえばアポロンの核以外をこの世から消滅させたところで
アポロンは何か代用品を見つけて体を作れるぞ。ミスリルも同じじゃろ、
腕と足が封印されたままなら、何か代用品で新しいのを作ればいい」

「ええ。私は詳しいことはわかりませんけど、封印の除去が不完全だったとは思えません。
……何百年と人の命を奪い続けていたんですから」
実際には封印解除はまだ不完全であり、だからこそミスリルは自分の手足を切り捨てて動き出したのだが
そんなことをアイナ達は知る由もない。
「他に仮説はないのか？」
「これが最後です。第三に、ミスリルの核は頭にはなかった」
「それも外れじゃ。核はゴーレムの感覚器官じゃぞ、どこか外から見てわかるところについてなければならん。
でないと外が見えんじゃろが、あれは目であり、耳なんじゃからな」
今度こそ呆れた様子でフェンネルが首を横に振る。
「前に話さなかったかの？」
「あれはミスリルの核ではなく、ミスリルの頭の核であったとしたら、どうでしょうか？」
フェンネルの動きが止まった。自警団がざわめき出し、オレガノが静かにするよう求める。
「……どういうことじゃ？」
「ミスリルが一体のゴーレムではなく、複数のゴーレムの集合体だったとしたらどうでしょうか？
ミスリルがミスリルの頭、ミスリルの右腕、ミスリルの右足……と言ったように
それぞれの役割を分担して受け持っていたゴーレムの集合体としたらどうでしょうか？」
「つじつまが合う」
オレガノが即答し、続ける。
「ミスリルが複数のゴーレムの集合体であるなら、
左腕と右足が直らないことにも説明がつく。
それぞれの部位にそれぞれの核があり、他の核では他の部位の破

損に対応できないのだろう」
「ええ、フェンネルさんの話したエルフの伝承が正しいなら、あのミスリルはあくまで試作品です。
そういう状況に対処できていなかったとも、そういう状況が想定されていなかったとも考えられますし
そうでなくとも、頭を破壊して油断した相手を暴れて仕留めることくらいはできるでしょう。
エルフが山ほどいた四百年前の当時なら、ゴーレムの仕組みも知れ渡っていたでしょうから」
「……加えて、開発も楽になるだろうの。無茶苦茶に強い核を構築するのは骨じゃが
ある程度強い核数個を連動させるだけなら、前者より恐ろしく簡単な作業になるわ」
「だが、それが間違いないとして、どうやったら奴を倒せる？
核が何個もあるのなら、それをしらみつぶしに破壊していくしかないのか？」
オレガノの質問に、アイナはかぶりを振ることで答えた。
「いえ、この仕組みを採用するなら、恐らく全身を統括する脳の役割を果たす核があるはずです。
それを破壊すれば、ミスリルは活動をやめるはず」
「じゃが、核が複数個ある事実は変わらんぞ。
もしその脳を破壊できたとして、他の核が活動を続けたらどうする」
「全身を統括する機能を持った核があるのに
他の核に意思なんて持たせませんよ、下手をすれば頭の言うことを体が聞かずに暴走してしまうかも知れません。
核が破壊されると役割が切り替わる可能性もありますが――
それなら、頭が破壊された時、代わりに目となり耳となる核が用意されているはずだと思います。予想ですが」
「なるほど。……では、その核がどこにあるかわかるか？」

「体内にあるのは間違いありません。遠隔操作のできるような場所があるなら
四百年前に暴走したミスリルを止めることははるかに容易だったはずです。そこを壊せばいいんですから。
――防御力の高いミスリルの、さらに狙われにくい場所。
それは真っ先に弱点と判断される頭でも、反撃の際に破壊されてしまうかもしれない手足でもないはずです。
だとすれば、残るは」
全員がミスリルに向き直った。頑丈な鎧であるミスリルの肉が最も厚く、かつ誰も弱点だと思わない部分。
「胴体……！」
戦士達は誰からともなくそうつぶやいた。

第十四話「根源」

弱点は胴体と予想できたはいいが、それを突くことはそう簡単ではないだろうと思っていた。
が、それもまさかここまで難しいことだとは思いもしていなかった。

相手の弱みがどこにあろうと、結局は近寄って戦って倒すしかない。
自警団達の援護を受け、アイナ、フェンネル、アポロン、オレガノの四人は
仰向けに寝転がって体をとにかく無茶苦茶に動かしているミスリルへと襲いかかった。
背泳ぎでもしているかのように振り回されては地面を削る腕をかわして上半身に飛び乗り
アポロンが左の手の平をミスリルの胸に押し付けて右拳を引き絞る。
「うおっし、行けアポロン！」
叫んだフェンネルが左手を振ると同時に、アポロンの拳が『光源』の呪文を受けて輝いた。
言われるまでもないとでも言いたげに左手を胸から外し、

がぁんっ！！！

次の瞬間には、ちょうど左手のあった位置を輝く拳が抉っている。
鉄棒で殴って傷がつくかつかないかというミスリルの体にめり込んだのだ、凄まじい威力には違いないが
胴体にあるという核を突き破るには至らなかった。
拳は三分の一ほどをうずめて止まっている。
「アポロンの馬鹿力でも無理か……っとに面倒な相手じゃの」
「手数で押してみるか？　フェンネル、俺の剣にも魔法をかけてく

れ」
「む、任せろ」
可聴域を超えそうな高音とともに光を放つ刃に目を細め、
オレガノは腕や足のある部分を迂回し、軽い足取りでミスリルの胸に上がる。
胸の上ではアポロンがあきらめずに同じところを殴り続けていたが、成果はさほどでもないようだ。
「アポロン、退いてろ」
背筋を使って剣を振り上げたオレガノが言い、短い吐息を漏らして腕を叩き下ろす。

ぎん！がぁんっ！

一度目と二度目で違った感触に眉をしかめるオレガノ。
悔しそうにかぶりを振り、状況を見守っているフェンネルとアイナに向かって声を張り上げた。
「駄目だ！どうも中心に近付くに従って硬度が上がっているらしい」
「なるほど、そう来たか……」
悔しそうな顔をするフェンネルの横で、ふむと鼻を鳴らし腕を組むアイナ。
先ほどの戦いより余裕が見えるのは、自軍の圧倒的有利を確信しているためだろうか。
手足を失ってなおあれだけの強さを見せ付けたさっきのミスリルを思えば、今のミスリルは弱々しく映って当然かも知れない。
「じゃあ、そいつの力をそのまま利用するのはどうじゃ？」
「どういうことだ？」
「おんしら、ミスリルの拳をぎりぎりでかわせ。そしたら勢い余って自分で自分の胸をぶん殴るじゃろ」
「自分でやれ、そんな危険な……っ！」

ごぎゃんっ！！！

男組が飛び退った空間をミスリルの拳が駆け抜けていった。薙ぐような軌道で、胸を殴ったりはしていない。

「ち、おしい」

「他人事だと思って！」

拳圧に暴れる髪を押さえながら着地したオレガノが、指をぱちんと鳴らしたフェンネルに叫ぶ。

どこか微笑ましいやりとりを完全に無視して、アイナとアポロンは目の前の敵を凝視した。

「何……？」

ごぎゃんっ！！ごぎゃんっ！！ごぎゃんっ！！！

上半身を起こしたミスリルが、自分の拳で自分の足を壊し始めたのだ。

人間で言うなら太ももだが、しかしすねより細いミスリルの大腿部が木材をハンマーで殴るようにへこみ、やがてひび割れていく。

「何じゃ、イカレにイカレてとうとう自傷行為に及んだのかの？」

「黙っててください」

アイナのこめかみから冷たい汗が一滴、まだ丸みを帯びた顎を伝って地面に落ちる。

「……いえ、警戒してください。そろそろ、絶対、いえ、おそらく」

「アイナ？」

「余裕でいられるのは、ここまでかも知れません」

ご、がしゃああっ！！

ついにミスリルの太ももが砕け散った。

膝関節に寄った部位が割れて破片を散らし、すねとももとを分断し

てしまう。
切り離されたすね及び欠片が未だ虹色の光を放っているのは、ミスリルの左足の核が無事な証拠だった。
しかし、その核も外殻が砕けたことで露出してしまっている。
コンクリートの中に紛れ込んだ小石の一角が顔を出すかのように、虹色の岩石から青色の宝石が覗いていた。
「あれが足の核か、アイナの推理は合っていたらしいな」
「よし、胴体を射んと欲するなら、まずは足からじゃ！アポロン、続け！」
フェンネルが左手で魔法を編みながら走り出し、その背中を追い抜いてアポロンも拳を握る。
自分達も戦おうと得物を構えたコンフリー父娘が、
「……ふらん、ねる」
その一言を聞いて戦慄した。
それはアポロンの声ではもちろんないし、アイナの声でも、オレガノの声でも、フェンネルの声でもない。
付け加えるなら、その場にいた全ての生物が、この声の持ち主では有り得なかった。
「――フランネルゥゥゥゥゥッッ！！！」
岩場を駆け抜ける突風のような高い声は、今までの彼の声とは似ても似つかなかったが
その声はミスリルの左足の核が微細に震えながら絶叫する、ミスリルの声に他ならなかった。
「ミスリル！？」
「やっぱり……！」
他の三人のような華麗な身のこなしは少々荷が重いのか、
アイナは必死に走ってミスリルの倒れ込んで来るような一撃を避けた。飛び散る泥と砂利に顔をしかめながら言う。
「頭の役割をする核が切り替わったんです！」
「何……！？」

うつ伏せに寝転びながらも繰り出された次撃は、攻撃目標がオレガノに奪われたことによって外れた。
左脇に娘の細い腰を抱えた父の視線を受けてアイナは頷き、娘の顔を覗き込んだオレガノが歯を食い縛る。
アイナの言う通りならば、ミスリルの視覚、聴覚、嗅覚――味覚と触覚はもともとない――は復活したことになる。
そしてその予想は恐らく間違ってはいない。ミスリルの攻撃は明らかに敵を――アイナの位置を認識した上でのそれだ。
「ち……どうする、フェンネル！」
「どうもこうもないわ！頭と引き換えに足はなくなっとるんじゃ、奴もそう簡単には」

ひぅんっ――

「動けな……？」
怒鳴ったフェンネルの頬を何かがかすめた。なでてみるが、とくに異常はない。
指の力加減にくすぐったさを覚え、彼女が白い肌に爪を立てると、

ぷしゅっ。

爪が肌に突き刺さった。それと同時に、鋭すぎて開かなかった傷口が一直線に血を噴き出す。
驚いて振り向けば、少し離れた位置で様子を見守っていた自警団員がぶっ倒れている。
いわゆる『どてっ腹に風穴があいた』状態だった。苦しそうにもがき、何が起こったかわかっていない周囲は手当てもしていない。
「な、何じゃあ？アポロン！」
命令に従い、主人を守ろうとミスリルとの間に割って入ったアポロンの全身に、大小入り混じった穴ぼこができた。

「そっ……総員、伏せろ！撃たれるぞ！」
泡を食ったオレガノの指示が青空に響いた。
弾かれるように地面に倒れ込んだ彼らの頭上を、虹色の弾丸が駆け抜けていく。ミスリルの破片だった。

先ほど砕けた足の破片がふよふよと宙に浮いたかと思えば、尻に火がついたような加速で一直線に特攻してくる。
七色の光を引きずって飛び交うその姿はまさしく弾丸である、「撃たれる」というオレガノの警告はひどく的を射たものと言えるだろう。
水の溜まった足元に伏せ、下着に泥水が染み込んでくる不快な感覚に顔をしかめたアイナの眼前に

ぼがっ！

拳大の岩が突き刺さった。幼い少女は青ざめる。
「ひっ……な、何なんですか、これは！」
核の換装を予見していたアイナも、この反撃は予想外だったのか涙目になっていた。
「言ったじゃろ、奴は核の魔力を利用して体を動かしていると！」
瞠目すべき反射神経でピーナッツほどの散弾をかわしたフェンネルが答える。
「魔力さえあれば、奴の体はどうとでも動くんじゃ！
その気にさえなれば、体の一部を飛ばすことだって可能なんじゃよ！」
「どうして今までそれを言わなかった！？」
「まさか本当にやるとは思わなかったんじゃ！見てみい！」
フェンネルが剣先で指し示したミスリルの欠片は、虹色の光が消えかけていた。
よく見れば飛ばした破片は一様に光が弱くなっている。もし今この

状況を上空から眺めることができたなら、
ミスリルの本体から遠ざかった破片ほど、弱々しい光しか放てなくなっていることに気付けたはずだ。
「核から離れれば離れるほど、制御は困難になる！アポロンが普段人の形を崩さないのもそのためじゃ！
　思った通りに動かせなくなるわ、加えられる力は弱くなるわ、いいことなんて何もない！攻撃範囲が広くなる以外にはの！
　ましてや、自由に動けない今なら尚更じゃ！」
「それなら、どうして！？」
「自分の体なんぞどうでも良くなったんじゃろ！」
叫び返したフェンネルの顔がやや険しさを増した。
死を覚悟した者がどれほどの力を発揮できるか、彼女は良く知っている。
今のフェンネルの脳裏には、ミスリルを復活させるために命を賭したエルフの青年の姿が浮かんでいるのだろう。
「ゴーレムの体というのは、限られた材料を必要とするわけではないんだったな？
　だとしたら、ミスリルは周囲のありとあらゆるものを発射してくるのか？」
「魔力が物質に浸透するまではかなりかかる。
　――じゃが、できんとは言わん。そして実行されたら、防ぐのは今よりずっと難しくなるの」
その時間をオレガノは問い、フェンネルは一言「わからん」と答えた。
周囲では地に埋まってしまっていたミスリルの欠片が再び上昇を開始している。
「今のうちに聞いておくかの」
フェンネルはいやに無表情なままつぶやいた。それに気付いたアポロンが体を起こしながら視線を向ける。
「アポロン、母さんに何か言伝はあるか？オニバスにでも良いぞ」

アイナやオレガノには聞こえない、小さな声だった。アポロンは少しだけうつむき、やがて首を横に振る。
「そうか。……叱ってはくれんのか？」
フェンネルとアポロンとの会話は、周りからはフェンネルが危ない人のように映るだけだ。
何事か言われたらしく、エルフは静かに笑った。
「心配するでない、そこまで軽く見てはおらん。……じゃがな？」
音もなく浮き上がっていく虹色の弾丸。フェンネルは目を細めて言った。
「私にはの、私やおんしが奴を倒している姿が想像できんわ。おんしはどうじゃ？」
アポロンは微動だにしなかった。

――がががががががっ！！！！

刹那、直上から降り注いでくるミスリルの体。
決死の形相で振りかざしたフェンネルの指が『結界』の屋根を構築し自分とアポロンを守り抜く。背中のオレガノはいくつかを剣で受け流し、アイナは運良く直撃を免れていた。
それより後ろに飛んだ破片には目立った動きはない。自警団の体の心配をしなくていいのは幸運だった。
「こんのおおおっ！！」
数メートルだけミスリルに接近し、泥水の中に倒れる。少しの間だけ直立したブロンドの中を弾丸が駆け抜け
細い金髪がはらはらと風に散り飛んだ。
口の中の土を吐き出した上に穿たれる、サッカーボール大の穴。
「……ちっ！」
すぐに浮上していく虹の岩をフェンネルは苛立ち紛れに払い落とすや左手で『重力操作』を放ち、細い肢体を空へと跳ね上げた。
ミスリルの狙いはあくまでアイナであり、視界から消えた敵を無理

に追ったりはしないとの判断だったが
その予想に反してミスリルの欠片は急上昇してくる。狙いはもちろんフェンネルだ。
「う……」
ミスリルが自分の命を度外視する覚悟を決めたのは事実なのだろうが、
だからと言って自暴自棄になったわけではないことをフェンネルは理解した。
アイナを殺すという目的は忘れておらず、目的を果たす前に自分が動けなくなっては無駄死にだということも知っており、
そのためにまず邪魔なフェンネルを先に倒す、という手順を考えられるだけの冷静さは失っていなかったのである。

ぼっ――

フェンネルの右肩がこそげ取られた。声にならない悲鳴を上げて、フェンネルは真っ逆さまに地を目指す。
「フェンネル！？」
「フェンネルさぁんっ！！」
痛みを想像できる鈍い音とともに落下したフェンネル。撃ち抜かれた肩からは鮮血が溢れ、ぬかるんだ黒土に赤みを加えていた。
駆け寄ろうとするも、足元に突き刺さる破片が動きを止める。
「くそっ、くそっ……え？」
珍しく汚い言葉を使ったアイナを制したのはアポロンだった。
いつだって表情のない一つ目の顔は、しかし並々ならぬ憤怒と闘志、そして覚悟が感じ取れる。
長い腕の石巨人は、倒れた主人と目が合ったのを合図に走り出した。
煙のようについてくる虹色の弾丸が体を穴ぼこにするのも頓着せず
周囲の土ごとフェンネルを拾い上げ、やや乱暴にアイナ達の元へと連れて帰ると

自らは『フェンネルを任せた』と言わんばかりに独り反撃を開始した。
いや、反撃と言うよりは、むしろ手当てをするための時間を稼ごうとしているようにも映る。正しいのは恐らく後者だ。

ががっ、ががっ！！

弾丸をかいくぐる必要はない、少々の傷はたちどころに治る。
偶然にも主人と同じ右肩を吹き飛ばされたアポロンは
それでも闘志が萎えないところを見せつけるがごとく、地面に落ちた右腕を拾って投げ付ける。
右腕はミスリルに届かず、失速して地面に落ちたが
アポロンが拳の間合いに接近するまでの盾にはなった。
右腕とその破片を光にたかる蛾のように呼び寄せつつ、左拳を引き絞る。
そして殴った。数発殴り、手応えが変わってきたところで今度は不格好な蹴りを放っていく。

がちっ！！がつんっ！！

直った右腕も戦線に加え、あらん限りの力を込めてミスリルの肌を削り取っていくアポロン。
「いける……？」
よたよたと『治癒』の魔法を構築するフェンネルを気遣いながらも、思わずアイナはつぶやいてしまった。
アポロンはそれだけの活躍をしている。フェンネルを傷付けられた事実とは、こうもアポロンを狂暴にさせるらしい。
しかし、そんなアポロンの猛攻を止めるのにミスリルが用いた戦力は、ただ一発の弾丸でしかなかった。

――びきゃあっ！！

正拳突きを繰り出したような姿勢でアポロンがぴたりと停止する。
非情な現実だった、決死の反撃をあざ笑うかのように突き刺さった、氷柱のようなミスリルの破片は
アポロンの青い瞳――核の中心を貫き、その機能を停止させてしまった。
風に吹かれた人形のようにぐらりと仰向けに倒れ、その衝撃で体を作っていた岩石がばらばらと散らばる。
フェンネル宅で何度か目撃した、アポロンが眠るときによく似ていた。むしろ同じことなのだろう。永眠であることを除けば。
「ッ――！！」
止血に使っていた血染めのハンカチを放り出し、アイナは傍らのメイスを引っ掴んで走る。
核の破片があればゴーレムは復活できる――その事実は知っていても、彼女は実際にその光景を目にしたことはない。
逆に、核を壊されればゴーレムが死ぬというのは、目の前の虹色の巨人が不完全ながら証明してくれていた。
死んだ人間は生き返る。そんなことを聞いて、本気にする者が何人いるだろうか。
だからアイナは走った。巨人の恐怖を、友達を殺された怒りが上回ったのだ。逆上とも言う。
「よせ、アイナ！」
「行け、オレガノ……！私は大丈夫じゃ、アイナを死なせるな」
「すまん、そうさせてもらうぞ！」
柔らかな光の中で塞がっていく傷口を一瞥し、オレガノがアイナの足跡を踏み消すように続いた。
少ししてフェンネルも歩き出す。失血と鈍痛で足元がおぼつかなかったが、ここまできて負けるわけにはいかなかった。

走り出してから己が選んだ行動の危険さに気付いたが、下がりはしなかった。
倒れたアポロンの無念を思えば、頬をかすめていく弾丸の恐怖にも耐えられる。仇を討つのだ。
『重力操作』で距離を詰めようと、両手で握っていたメイスから左手を離す。

ぐぁんっ！！

「えっ！？」
その瞬間、ミスリルの破片がメイスの中ほどに食らいついた。
宝石を埋め込んだアクセサリーのような外観になってしまったメイスが、その衝撃をアイナの右手に伝える。
凄まじいものだった。手がしびれるとかそんな次元ではなく、握った指ごと持っていかれそうな――
「……あんっ！」
驚きに足がもつれたが、父に叩き込まれた体術が彼女の身を守った。
前受身で衝撃を殺し、そんな場合ではないのに地面に寝転がって荒い息をつく。殺し合いは異常なほど体力を使うものだ。
鼻の奥がつんとしてくる。潤む視界に、逆さの青空とミスリルの一つ目。
「死ね、死ね、し、ね、死ね、死ねフラ、フランネル……！」
表情がなくともわかる。自分を睨んでいる。容赦のない殺気に体が震え出す。ただひたすら怖い。
ミスリルを取り囲む蜂のように飛び交っていた破片がぴたりと静止し、その状況が意味するところに身を縮こまらせたアイナを
「アイナっ！」
オレガノが救い出した。脇の下に手を差し入れるように小さな体を放り捨てると、そちらへと自らも飛ぶ。

――だだだだだっ！！

文字通りの間一髪だった。ごろごろと転がったアイナの長髪を、ミスリルの弾が撃ち抜いた。
アイナは誰でもホールインワンできそうな穴だらけの地面に呆然とした後、思い出したように父の姿を探す。
「お父様……」
果たして、父は負傷していた。
うつ伏せにうずくまり、腹を押さえて震えている。呼吸ができないのではないかと心配になるくらい地面に押し付けた顔から尋常でない脂汗が滴っていた。そしてじわじわと広がってくる血だまり。
「お父様！？しっかり！」
以前に教えられていた介護術の基本も忘れ、力任せにオレガノの体をひっくり返したアイナが唾を飲み込む。
オレガノは左脇腹を撃たれていた。弾は貫通しているようだったが、出血がひどすぎる。
傷口を塞ぐ真っ赤な指の間から、何か――朝食でマスタードをつけて食べる腸詰のようなものが顔を出していた。
「アイナ、ぐ……無事か」
「しゃべらないで下さい！だ、誰か――」
「うらあっ！！」

ばちゃああっ！！

二人に飛来した弾丸を『結界』で弾き返したのはフェンネルだった。
青い顔をして宙に浮いている。
「大丈夫か！？」
「ふぇ……フェンネルさん、お父様が！アポロンさんが！」
「わかっておる！ジタバタするな、とにかくオレガノから離れろ！」

言うなりフェンネルはアイナの手を掴み、引きずるようにオレガノから遠ざける。
ミスリルの狙いはアイナなのだ、戦場においては死んだも同じ、戦えなくなった人間をどうこうするとは思えない。
怪我人をアイナから遠ざけるのは、もっとも安全な怪我人のかくまい方だった。
「ど、どうしましょう……どうすれば」
「私に任せろ」
そう言うフェンネルの目は、面白くもない漫才を見るように座っていた。
「おんしはよく頑張った、もう逃げるんじゃ」
「フェンネルさんは……？」
「とりあえず、まだ負けは認めん。奥の手を使う。……できれば、明日の朝日を拝みたかったもんじゃな」
ぼそりと吐き捨て、フェンネルは飛んだ。アイナが何か言うよりも先に、彼女の声が聞こえないはるか上空まで。

エルフの魔法というのは、もともとは便利に生活をするために考え出されてきたものだった。
物体にかかる重力を支配する『重力操作』は、重い物を持ち上げたり、空を飛んだりするために、
『発熱』は厳しい冬を乗り切るために、『光源』は暗闇から己の身を守るために。
こと人間はエルフの長所ばかりをうらやましがるが、エルフとて致命的な生物的欠陥はある。
筋力はかなり低い。脂肪がつきにくく、寒地では生き抜くのが難しい。少しの体調不良が死に直結することも珍しくない。
魔法はそれを補うための技術だ。

しかし、例外もある。
人間達と交わるようになり、必要以上に敵と戦う機会の増えたエルフ達は
自ずとそのための魔法を編み出すようになった。
自衛のために必要な力の限度を、生きるために必要な破壊の限度をはるかに超えた
『より多くの物体を破壊し、より多くの生物の命を奪う』ための、純然たる戦闘用魔法。
フェンネルもそのいくつかを知っていた。その危険さもよく知っていた。

ある程度の高さに体を留めたフェンネルは、両腕を大きく振り回して魔法の構築を開始した。
『発熱』を放った時はより多くの魔力を取り込むために全身を使ったが
今回の場合は少し違う。この魔法は全身を使わねば構築できない。
戦闘用魔法にはその乱用を防ぐため、時のエルフ達によって制約が課せられていた。
その制約とはすなわち『一人では使えない』というもの。
個人が強すぎる力を持つことを防ぐためである。戦闘用魔法は、十数人のエルフと莫大な魔力を必要とするのだ。

フェンネルはその掟を破り、たった一人で戦闘用魔法の構築を始めていた。
構築に必要な人数は全身を使うことで代用し、必要な魔力は自分の体と周囲から搾り出す。
ありあまる才能の上に数百年の修練を重ねたフェンネルだからこそできる荒業だったが
だからこそそれは術者の身を苛んだ。魔法を編み上げるフェンネルの皮膚が裂け、血管が小さく爆発する。

しかし、フェンネルの顔に苦痛の色はない。
生き残るつもりがないのだ。この魔法を使った後は、壊れたアポロンと一緒に土に還るつもりでいた。
これでミスリルを倒せる保証はないが、時間は稼げるだろう。
今の奴なら、移動するのにはかなりの時間を要するはずだ。この魔法で時間を稼げれば、アイナ達は海上にでも逃げられる。
後のことは思い付かなかったが、オレガノやアイナが何とかするだろう。オレガノはまだ致命傷ではなかったと思う。
「あの若造には、向こうで会えるのかの……？」
四百六十年強、思えば短い人生ならぬエルフ生であったが、それなりに悔いはなかった。
満足だ。敬愛する母親と同じ地で眠ることができる。

きいいいいい……！！

魔法を使いこなせるわけではないアイナにも、そこに集まった魔力の凄まじさは感じ取れた。
『光源』を使うまでもなく発光する魔力は天空のフェンネルを中心に、毛糸玉のような流れで球体を描く。
輝く球体はやがてフェンネルの右拳に集中する。かざした玉の直径は、術者のフェンネルよりも大きい。

やがて、玉の一部――ミスリルの核の延長線上の部分が、引っ張られるように伸びた。
シャツのたるみを引っ張ったように尖っていく先端と、それに従って細くなっていく玉。
そしてアイナは魔力の玉が何を象っていたのかを理解した。
それは槍だった。創世神話にて主神が用いたという巨大な投げ槍を思わせるそれは
静かな威厳に満ち、見る者に優雅ささえ感じさせ、しかし絶対的な

破壊の象徴であることを頑なに主張し続ける。
それはフェンネルが自らの命と引き換えにして構築した大魔法の姿だった。
銘を『破壊』。あまりにストレートすぎる命名ではあるが、この魔法にこれ以上の名はない。

フェンネルが何かを叫んだ気がした。
肩の回転を用いず、渾身の力でダーツを投げたような姿勢。数秒遅れて、光の巨槍が動き出す。
かたつむりにすら劣るかも知れない速度だった槍は、やがて歩く人を追い越す速さを得、馬車すら足元にも及ばぬ加速を見せ
足を失い、とっさに動けずにいるミスリルへと飛翔した。
体をかばうように置かれた右手を障子紙のようにやすやすと貫き、突き刺さった槍から暴力的な光が溢れ、そして、

気がつくと、アイナは青空を見上げていた。
まず目の前が真っ白になり、何か波のようなものに全身を叩かれ、耐え切れずに吹き飛ばされたところまでは覚えている。
「……戦いは……皆は……」
かぶりを振りながら体を起こすと、そこは先ほどよりだいぶさっぱりしていた。
川のあるべきところに、湖ができている。中に溜まった泥水は、川を流れていた水に違いない。
アイナの知るところではなかったが、オニバスはフェンネルの魔法を「円形闘技場が一つ出来上がる」と称した。間違いはなかった。
数千とはいかなくとも、千と数百人なら入れそうな大穴だ。それでいて、周囲の林などへ被害が出た様子はない。
「自警団の皆は……」
気絶しているだけだろうが、背中でばたばたと倒れていた。頭を抱

えて震える者も多い。
「お父様……」
オレガノは傷を押さえてうめいていた。気を失っていないのはさすがだったが、早く手当てをしなければ。
「アポロンさん……」
アポロンはあの衝撃で破片の位置が変わっていた。散らばる岩のところどころに、青い光が見える。
「フェンネルさん……」
フェンネルの姿が見当たらない。どうなったのだろう、まさか自分の魔法に巻き込まれたのか。
茶色い水の溜まった湖の周囲を、小走りに見て回る。しかし、金髪のエルフの姿はどこにもない。
アイナが見付けたのは、その代わりとしてはあまりに酷な物体だった。
「……ミスリル」

湖は、さして深いものでもなかったらしい。
洗面器の中に石けんが浮かんでいるようだった。ミスリルの胴体が、湖の中に鎮座している。
胴体は食べかけのリンゴのようにいびつな円柱形だった。その歯型にあたる部分に、見覚えのある青い宝石が埋まっている。
「核……！」
しかし、アイナの叫びに気付いたわけでもないだろうが、宝石は一回りだけ小さくなった。
瞬きをする度に、数センチずつ。ゆっくりとだが、確実に核を虹色の岩石が覆っていく。まだ死んでいない。終わっていない。
じゃぽっ。
不自然な水音を聞きつけ、足元に視線を落とす。薄汚れた布切れの

ようなフェンネルが、岸で荒い息をついていた。
「フェンネルさんっ！」
「……アイナ？」
全力で自ら引っ張り上げて座らせたが、すぐに寝転んでしまう。上半身を支えておくこともできないらしい。
「おんしが……どうしてここにおる？」
「え？」
「私は死んでいないのか？」
死んだ目をしたフェンネルの、今にも消えそうな問いかけ。アイナのこぼした涙がフェンネルの肌に白い線を引いた。
「生きてます！生きてますよ、大丈夫です！」
「大丈夫なはずがあるか……！この土壇場で、死に切れなかったのか、私は……！」
悔しそうに涙を流し始めたフェンネルの物言いで、ようやくアイナは理解する。
あれだけの魔法だ、彼女は死ぬ気で――否、本当に死ぬつもりであの槍を放ったのだろう。命を魔力の足しにしたに違いない。
「……ミスリルは？」
「え……」
「ミスリルは？奴はどうなっておる？」
「……」
アイナは少し悩んだが、言われるがままにフェンネルの体を抱き起こし
その目にミスリルの胴体を映してやった。フェンネルの泣き顔がいよいよ歪んでいく。
「おのれぇ……まだじゃ、まだ……！」
口ではそう言うが、彼女の体は指一本たりとも動かない。動けない。動かせない。
アイナは再びミスリルへと目をやった。核である宝石はほとんど完全に保護されてしまっている。

あと十秒もしないうちに、核は胴体へと封じられてしまうはずだ。
そうなればもうミスリルを破壊できる者はいなくなる。
今が絶好の勝機であり、これを逃せば勝機はなかった。だが、その勝機を掴むのは誰だというのか。
彼女しかいない。彼女以外にまともに動ける者はいないのだから。
ウィナリス島の命運が、年端もいかぬ十四歳の少女――アイナ・コンフリーの双肩に託されたのだ。

涙は止まった。足の力が抜けた。ぺたりと湿った地面に膝をつくと、妙に温かな液体が下着を濡らす。
たった一人であんな化け物を倒せと言うのか。いや、倒さねばならない。今すぐに。もうじき核が見えなくなる。
今ならあるいは、自分でも倒せるかも知れない。ミスリルは瀕死といっていいところまで追い詰められているのだ。
だが、もしそれに失敗したらどうなるか。失敗した者は周りにたくさんいた。
失敗したらどうなる。
オレガノのように、深い傷を負って苦しむのだ。
失敗したらどうなる。
フェンネルのように、立ち上がることもできない疲労困憊を味わうのだ。
失敗したらどうなる。
アポロンのように、死の直前まで追い詰められるのだ。
失敗したらどうなる。
自警団の戦士のように、一思いに人生を終わらせられてしまうのだ。
失敗したらどうなる。
死ぬのだ。

「……死んだら」
美味しいご飯も甘いデザートも食べられない。川で泳ぐことも、雪

遊びもできない。
読みかけの本の続きも気になる。本格的に釣りの勉強もしたい。魔法だって使えるからには使いこなしたいと思う。
ウエディングドレスにも興味はあったし、キスの一つもしてみたい。剣術にしても、まだ父を倒したことがない。
オニバスに襲われさえしなければ実現するはずだった、離島への学習旅行だって幻に終わる。
生きてやりたいことは山ほどあった。挙げればそれこそキリがない。死にたくない。絶対に死にたくない。何が何だって死にたくない。
しかし、逃げ出すことはできなかった。どれほど強く生への渇望を自覚したところで
父への恩義や親友達への友情を切り捨てて自分の命を長らえるには、アイナは優しすぎた。
一歩も動けない状況とは、このことを指すのかも知れない。
「戦えないのかしら」
「……当たり前です」
「なら逃げなさい。フェンネルはそのために『破壊』を放ったのよ」
「無理です……皆必死に戦ったのに、私だけ逃げるなんて、そんなことは……」
「でも、戦えないのでしょう」
「……わかっています」
アイナが自分の両手で頭を抱えた。幼い頃の炎症の痕を掻きむしる。そこには荒れた肌と耳の穴だけがあった。
「戦えない……けど、逃げることもできない……
どうすればいいんですか。私はどうしたらいいんですか？どうしたら」
「自分のことくらい自分で決めなさいな。オレガノもそう言っていたでしょう」
「どうしてですか！どうして！――どうしてなのよ！どうして私がそんな決断をしなきゃいけないのよ！」

ぬかるんだ土に拳を叩きつけてアイナは叫んだ。何度も何度も打ち付ける度に、白い手が泥で汚れていく。
「普通の子供だったら！十四歳の女の子だったら！こんな状況に陥るはずがないじゃない！
ここは大陸の紛争地帯じゃないのよ？平和なウィナリス島なのよ？なのになんで！？なんでなのよ！？」
「私のせいよ」
その声に、唐突に拳は止まった。
「全て私の責任よ。申し訳なく思ってる。……そうね、私は多くの人々に迷惑をかけてきたわ。
フェンネルにも辛い思いをさせたし、その彼女を守る役割は、アポロンに押し付けてしまった。
ミスリルが復活しても何をすることもできず、その尻拭いはあなたのような幼い子供に任せている。駄目な奴よ」
「……」
「全て私の責任よ。だからオレガノに無茶を言って、立ったまま眠らせてもらった。
でも、そんなことが償いになるとは思えない。だから、あなた達は私を恨んでくれていいわ。
フェンネルと、アポロンと、ミスリルにも伝えて。あなた達の不幸は、全て私のせいなのよ」
「……あなた、は」
「ごめんなさい。あなただけでも幸せにしてあげなければ、守ってやらなければいけなかったのに。
私にはそれができなかった。本当にごめんなさい。
だからせめて、この瞬間だけでも力にならせてほしいの。私のせいでやってきた災難に――」
きいいいい……

アイナの周囲をシャボン玉のような薄い膜が取り囲む。
それはフェンネルが用いていたのと同じ『結界』の魔法であり、
今のアイナでは逆立ちしたって使えない高等な魔法だった。
「――私が背負わせてしまった不幸に全力で立ち向かうあなたに、
せめて戦う力を与えてあげたい。
　勝手だとは思うけれど、守って欲しい。私の愛したこの島を。夫
を。子供達を」
「いいんですか？ミスリルだって――」
「いいのよ、楽にしてあげて。幸いなことに、あの子は私以外を恨
んではいないようだから。
　きっとあなたのことは許してくれるはずよ」
「……わかりました」
放り出していたメイスを拾い、アイナは立った。その足取りに疲れ
た様子はなく、その瞳に戦いへの恐れはない。
「あの……。あなたに会えて良かったです」
「ありがとう。――では行きなさい、アイナ。私の愛しい娘よ」

倒れたままのフェンネルは、それでもアイナが『結界』で全身を覆
うところを見ていた。
その間、彼女はうつむいて微動だにしていなかった。フェンネルの
知る魔法というのは、
何かしらの行動を起こさなければ構築できないはずだった。が、現
実にアイナは『結界』を使っている。
ありえなかった。もしアイナが何らかの方法で体を動かさずに魔法
を使えたとしても
アイナに『結界』を教えた覚えはない。見よう見まねで構築したと
ころで、膨大な魔力を消費して倒れてしまうだろう。
初めて使う魔法というのは、精神に極度の負担を強いる。魔法とは、
それを繰り返すことで使いこなせるようになっていくものだ。

こっそり練習していた可能性を切り捨てるなら、他の何者かに構築してもらった公算が高い。
だが、自分以外に『結界』を使える者がこの場にいるはずがない。
この島に存在するエルフは自分一人だけのはずだった。
「……」
そこまで考え、フェンネルは思い留まる。もう一人だけいた。そのエルフなら、アイナに『結界』を使ったのも頷ける。だが。
「……馬鹿馬鹿しい。死人が何をしてくれると言うんじゃ」
死者は生者に何もすることができない。逆がそうであるように。
口でそう言い、頭でそう考えながらも、フェンネルはその思い付きを捨て去りはしなかった。
アイナと出会えたのも、今こうして自分が生き残れたのも、もしかしたら全ては――
見上げた青空の上を、『重力操作』でアイナが跳んでいった。
苦笑したフェンネルの瞳は、自分達の勝利をこれっぽっちも疑っていないように見えた。

第十五話「真実」

わけもわからずこの世界に放り出された俺に、その人は優しく接してくれた。
自分を道具としか見ないエルフ達の中にあって、その人は精一杯俺を気遣ってくれた。
透き通るような長く薄い金髪と、周りのエルフよりやや低めの背丈。
名前はフランネルというらしい。

フランネルがいたから、辛く苦しい実験生活にも耐えられた。
周りのエルフ達から何を言われても我慢することができた。
フランネルが大好きだ。恋愛など許された体ではなかったが、そういうものではなかったと思う。
たぶん、俺はフランネルを母親のように思っていたのだ。

それなのに、フランネルは俺を裏切った。俺を暗い海の底に封じた。
俺はフランネルを守ろうとしただけなのに。それなのに。
許せなかった。フランネルだけは、この手で殺してやると思っていた。そう思い続けて暗闇の中を過ごした。

そのフランネルが今、目の前にいる。
髪の色や背丈が変わっていたのは妙だったが、あれは間違いなくフランネルだ。
殺してやる。今こそ恨みを晴らしてやる。
お前だけは許せないのだ。どうして俺を裏切ったのだ。どうして俺を封印したのだ。
いや、その理由はわかっている。フランネルは俺に情を移していたのだ。殺したくなかったのだ。

だからこそ封印した。あのまま俺を放っておいては、俺はいずれ死ぬからだ。

しかし、それに納得して憎しみを捨てることなど、ミスリルにはできなかった。

この戦闘だけで、だいぶ『重力操作』のコツがわかってきた。
アイナは自らの体にかかる重力を百八十度変え、物凄い速さで空へと舞い上がる。
手にはメイスがあった。『光源』はフェンネルの集中が途切れでもしたのか、効果を発揮したりはしていないようだった。
「……フランネルゥゥゥゥゥっ！！！」

がっ！ががががががっ！！

無数の破片が一直線に迫ってきたが、自分に触れる寸前で全てが弾かれたように方向を変える。
いや、実際に弾かれているのだ。アイナを包む半透明の球体が、虹色の弾丸から少女を守り抜いていた。
「……皆、お願い」
アイナが傾いた。立てた鉛筆が倒れるように回転した華奢な体は水に飛び込む競泳選手に近い角度で静止し、ミスリルの方向へと落ちていく。
「私は全力で戦うから」
激しい戦闘でいつの間にかほどけていた靴ひも。動きやすく頑丈に作られた革製の靴が、アイナの左足から脱げ落ちる。
「全力で守るから、だから――」

脱げ落ちた靴が、ふわりと浮かび上がった。無論、本当に浮いたわけではない。目の錯覚である。
靴は重力任せに地面を目指していた。浮かんだように見えたのは、靴のすぐそばにいたアイナが
重力加速度をはるかに超える速さでミスリルへと突っ込んでいただけのことだ。
「――だから、守って！」
アイナは目をつぶらなかった。目の前で弾丸が弾けようと、常軌を逸した速度で景色が近付いてこようと、風圧に涙がこぼれようと、少女は絶対に目を閉じようとしなかった。ただ倒すべき敵――ミスリルの核を睨み付けた。
「フランネルゥゥゥゥゥッ――」
濁った湖の中心に鎮座するミスリルの胴体が目前に迫る。
核はすでに外皮に覆われ、その青を少しだって目にすることはできなかったが
アイナは構わずに落下速度を増す。
つい先ほどまで核が外気にさらされていた位置に、アイナを守る半透明の結界が激突した。

ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃっ――！！！

のこぎりで岩石を引っ掻き回すような、そしてそんなものより何十倍も大きな音が空間を支配する。
『結界』とミスリルとが接触している位置で、赤い火花が噴水か何かのように暴れる。
空すらひび割れそうな大地震の中、アイナとミスリルは絶叫する。
愚かな生物達の行いを天界から見下している神の鼓膜さえ突き破りそうなその叫びは
しかし誰の耳にも届くことなく、轟音の中に掻き消えた。

島に静寂が戻り、風が白煙を押し流し、太陽が戦いの結末を照らす。
ミスリルは『結界』の魔法を打ち消していた。だが、そのために虹色の岩石は砕け散り
子供が膝を抱えた程度の大きさの宝石を再び外気にさらす結果となった。青く滑らかな表面が、恨めしそうにお天道様の光を反射している。
そんな核を足元に見下ろし、アイナは静かに呼吸を整えた。
細かな裂傷に彩られた全身は痛々しかったが、弱々しくはない。砕けたミスリルを足場に、両手でメイスを振りかぶる。
「恨みたければ恨んでくださって構いません。呪いたければ呪ってくださって構いません。
ただ、もう苦しむのはやめてください。四百年……苦痛を味わうのはもう十分でしょう」
ミスリルは何も言わなかった。あるいは言えなかったのかも知れない。
アイナはしばらく足裏のゴーレムの返事を待ち、それがいつまで経っても来ないことを察し、静かに言った。
「――お覚悟を」
甲高い音とともに、アイナのメイスが輝く。

普段、俺の部屋には誰も入れないようにしているから、
これが読まれているということは、俺はもう死んでいるはずだと思う。
俺は明日――これを書いている次の日、フェンネルからあの少女を奪い

古の巨大兵器『ミスリル』を復活させる計画を実行に移す。
もし成功すれば、復活したミスリルは怒りに任せてウィナリスの大地を粉々にするはずだ。
あとは俺達の魔力を持って、ウィナリスをエルフの楽園として再興すればいい。
ただ、この計画は恐らく失敗に終わるだろう。
俺達が束になってかかろうと、フェンネルは倒せまい。あいつはそれだけの強さを持っている。

手を抜くつもりはないが、勝てる確率はゼロに近い。
もしかしたら俺はフェンネルに殺されるのかも知れない。
今だから書くが、俺はフェンネルを愛している。あいつに殺されるなら悔いはないが、長としてはそうもいかない。
そしてあいつも、俺を殺したりはしないだろう。
俺を殺さなければ自分が殺される、フェンネルにそう思わせられるほど俺は強くない。悔しいことに。

だが、フェンネルが俺を殺さずとも、俺は死ぬことになるだろう。
生き残れたなら、俺は俺の命をミスリルに捧げるつもりだ。
おそらく復活は不完全に終わる。だが、それでいい。いや、そうでなくてはならない。
いくらフェンネルだろうと、五体満足のミスリルと戦っては分が悪いはずだ。
あいつがあの少女を守ろうというなら、ミスリルとの戦いは避けられない。
しかしミスリルを倒せば、凄まじく強い魔力が手に入る。ミスリルを動かすために使われていた魔力が解放されるのだ。
フェンネルならば、きっとその魔力を俺の望むようにしてくれる。
俺の望みのために使ってくれる。
ついでに、その理由が俺への愛だと……なお嬉しい。

必要なことはこれで全部だが、意外と紙が余ってしまった。何を書こうか。
せっかくだから、この世への未練でもつづっておこうかと思う。
これを読んだ奴が俺を笑っても、その嘲笑は俺には聞こえないから安心だ。

思えば、どうしてこんなことになってしまったのだろうか。
フランネルは自分のせいだと言っているらしいが、
十人や百人ならいざしらず、ウィナリス諸島に住まう全ての命の運命を変えることなど
一人のエルフに過ぎないフランネルにどうして可能だろうか。
彼女一人が悪いのではない。住む場所を求めて争い始めた人間、それに荷担したエルフ、全てが悪いのだ。
その全てが――つまらない戦争が俺の運命を滅茶苦茶にしてくれた。
今更恨んだりはしないが、迷惑な話だ。
今は航海技術が進み、ウィナリスから大陸に移り住むことも容易になっている。
あとはクロノガルデニアさえどうにかできれば、しばらくウィナリス諸島は平和でいられるだろう。
俺の計画さえ成功すれば、それも不可能ではない。俺のようなエルフの長は、しばらく生まれないに違いない。良かった。

俺は俺の生き方を後悔してはいない。
唯一心残りと言えば、フェンネル。あいつに一度でいいから、もう少し真剣に『愛してる』とでも言わせてみたかったものだ。

オニバスの遺品を整理していたエルフの一人は、神妙な面持ちでその文面を見つめていた。
部屋のゴミ箱に丸めて入れてあったものだ。
捨てようとひっくり返したとき、くしゃくしゃになったタイトルの『遺書』を読み取れたのは幸運だった。
「……」
涙は出なかったが、紙を持つ手がぶるぶると震える。とにかくこれを誰かに伝えようと立ち上がり、ドアを蹴破って外に飛び出す。
「お、おーい、みんなー……って、あれ……？」
そして気付いた。里の皆がそろって空を見上げていることに。見上げた空が虹色に輝いていることに。

「さっき、何かしてましたよね。何してたんです？」
「なーに、大したことじゃないわ。手向けはバンダナ一つじゃ足りんからの」
「は……？」
「クロノガルデニアに、ミスリルの魔力を送ってやったんじゃよ。言ったじゃろ、魔力があれば、地質改善は容易い。クロノガルデニアでも麦と野菜が作れるようになれば
奴らだってウィナリスに攻め入ろうなんて考えは捨てるじゃろ。
……あの若造もこれを望んどるはずじゃ」
フェンネルはそう言って笑った。少しだけ悲しげな微笑だった。
午前の日が射し込む温かなコンフリー家の屋敷。オレガノの寝室に四人は集まっていた。
エルフがいる特権か、アイナとフェンネルの傷は全快していた。『

治癒』の魔法を使ったのだ。
オレガノにも使ったが、傷が大きいほど回復には時間がかかるらしい。
「どうせ治ったらまだまだ後始末に追われるんだ。もうしばらく寝かせてくれ」
本人はそう言っていた。
アポロンもフェンネルの手によって復活していた。ばらばらになっていたアポロンが元の人型に戻り、
感極まってアイナが抱き付き、もも辺りに顔面を打ち付けて鼻血を出したのもいい思い出だ。

ミスリルとの死闘から、二週間が過ぎていた。

戦いの傷跡は癒え去りつつある。オレガノはまず真っ先に遺族への保証を済ませ、
次に建築家や上流貴族との交渉を行い、街の復興の手はずを整えた。
もともと被害は少ない、すぐ終わるはずだ。
もちろん、クロノガルデニアのエルフ達がこの件とは無関係であるという情報も流し終えている。
最も、情報操作にはもう少し時間がかかる。あんな化け物を作れるのも魔法あればこそだ、エルフへの疑いはそう簡単には晴れまい。
川が潰れてできた湖には『ミスリル』という名がつけられるという線が有力である。
オレガノの傷が治り次第、今度は近隣諸国への援助が行われるという話だ。まだまだ父は忙しい。

「……で？　何の話じゃ？」
フェンネルは怪我人のオレガノをこれっぽっちも気遣わずにベッドに腰かけ、面白そうに言った。
アポロンはいつものローブを脱いでいる。人々の前に姿をさらした

今、もう隠す意味がないことも理由の一つだが
この部屋がオレガノによって人払いされていることが一番の理由だ。見られる心配がないなら、隠れる必要もない。
「わざわざ人払いまでしたということは、重要な話なんじゃろ？」
「はい。もうじき、フェンネルさんもアポロンさんも、この島を出るんですよね？」
「む、そん通りじゃ」
フェンネルは頷いた。ほとぼりが冷めれば、いくら自分達を救ってくれたとはいえ
エルフであるフェンネルとゴーレムであるアポロンの存在は騒がれ始めるだろう。
出て行っても騒がれるのは同じだろうが、いる者をいないと言い張るより、いない者をいないと言い張る方がはるかに楽だ。

「ああいうことになったからには、すぐにだって出て行かんとまずいからの。
前に話してた通り、世界一周旅行に出発する予定じゃ」
「それです。……単刀直入に言います」
「うむ」
「その旅に、私も連れて行ってくれませんか？」
「……」
フェンネルが何か言うより先に、オレガノがベッドの上で言葉を引き継いだ。
「俺も許した。もともと客船を沈められなければ、離島で社会勉強を行うはずだったからな。
この子には広い世界を見せてやりたい。となれば心配なのは身の安全だが……
お前達二人なら、全世界が敵に回ろうと勝てそうだ。そう見込んで、お前にアイナを頼みたい」
「簡単に言ってくれるのお……」

金髪をぼりぼりと掻き乱し、フェンネルがぼやく。
「大陸にはどんな強い奴がいるかわからんし、そいつらが敵に回らんとも限らんのじゃ。
いくら向こうではエルフにも市民権があるとはいえ、危険なことに変わりはないぞ。
本当にアイナの身の安全を考えるなら、しばらくはこの島に置いておいたほうがいいんじゃないかの？」
「でも、次に私が乗れるような船が出る見通しは立っていないんです」
「駄目じゃ、駄目じゃ。おんし、まだ十四じゃろうが。どうせあと四年もしたら、もっと性能のいい船ができて
大陸まで楽に留学できるようになるに違いないんじゃから。その時まで指折り数えて待っとれ」
「フェンネルさんやアポロンさんと、もっと一緒にいたいんですよ」
「そりゃ私らだって同じじゃ。じゃがの、おんしの安全を思えば、この島にいたほうがいいんじゃ。これは譲れん」
「連れて行ってくれないなら、勝手について行きます」
「そしたら、私らが守ってくれるとでも思っておるのか？甘ったれるでないわ」
「いいえ、あなたは絶対に私を守ります」
フェンネルはやや厳しい口調で言ったが、アイナはまるでひるまなかった。
いよいよフェンネルの表情が歪んでいく。怒っているのは間違いない。
「絶対に私を守ってくれます」
「は、何を言っとるか。そう断言する根拠を言ってみい、根拠を」
「自分の胸に手を当てて考えてみてはいかがですか？――姉さん」
含むようなアイナの言葉に、フェンネルの表情が凍り付いた。
二人が喧嘩を始めるのではないかとそわそわしていたアポロンもま

たぴたりと静止し、オレガノは静かに目を閉じる。
小さな丸椅子に腰を下ろし、アイナは真正面にフェンネルを見据えて静かに言った。
「……私は、人間ではないんですね？」

ウィナリスに戻ってきて一息つくと、クロノガルデニアでの一件について
いろいろと不自然な点があることに思い当たった。
「私が魔法を使えることです」
フェンネルには人間にもごく稀ながら魔法を使う才能を持つ者がおり、
実際に大陸では『超能力者』として有名であるという事実も知っていた。
「でも、おかしいんです。確かに超能力者と呼ばれる方々は実在します。
　ただ……その人達がやれることというのは、エルフの魔法には程遠いものなんだそうです」
調べてみたところ、大陸の超能力者の起こした奇跡というのは、簡単な手品と変わらないものであることが多い。
ある者は数秒間宙に浮いた、ある者は暗闇に小さな光をともした、ある者は指先でスプーンを曲げた。
大それたものを挙げても、せいぜい病人を治した程度だ。
「フェンネルさんでしたら平気で空を飛びますし、島一つを光らせ続けることも可能です。
　スプーンだってその気になれば曲げられるでしょうし、病気と言わず怪我だって治せます。ですよね？」
「そうじゃの。朝飯前じゃ」
「つまり、私がどれだけ魔法の才能があったとしても

人間であるからには決してエルフを追随することはできません。
習ったその日に『光源』を使えるようになったりはしないはずなんです」
「なるほどの……それで、自分が人間ではないといいたいのか？自分はエルフじゃと」
「そうです。そう考えると、オニバス……さんが私を付け狙ったことも説明できます」
「ほう？」
フェンネルは頬杖をついて言った。指先で細い顎を撫で回し、薄い唇をなぞる。
彼女がこうやって変に無表情になるのは、何かしらの感情がピークに陥った時だ。傍らのアポロンはそのことを良く知っていた。

「まず、ミスリルはどうして封印されたのかを考えてみます。
これは『倒せなかったから』に他なりません」
もし戦って破壊できるなら、そうしたほうが良い。
後の世に復活してしまうかも知れない封印という手法を用いるより、後腐れなく壊してしまったほうが安全だ。
それなのに四百年前のエルフがそうしなかったのは、倒すことは無理だったが、封印することは何とか可能だった、という状況にあったからではないだろうか。
「それならば、ミスリルに施す封印は
どうあっても二度と解かれないものでなくてはなりません。復活させる気なんてないんですからね。
そのためには何をすればいいか。最も簡単で確実なのは、封印を解く代償を求めて
さらにその代償を簡単には払えない大事なものにすることです」
百円の商品なら気軽に買えもするだろう。しかし、百万円の商品だとそうはいかない。
支払う代償が高ければ、人は行動を渋る。

「では、一般に人がどうあっても払えない代償とは何でしょうか」
「命、じゃな」
フェンネルが即答し、アイナが頷く。
「その通りです。命と引き換えにと言われれば、誰だってその行動を考え直します。
――四百年前のエルフは、ミスリルにそういう封印を施したんだと思います」
解く鍵が命である封印なら、まず破られることはないだろう。
エルフの基準で作った封印ならば、人間の一人や二人が命を捧げたところでびくともしないに違いない。
「そのことを知ったオニバスさんは、生贄にするためにエルフの領海に現れては
そこを通る船を沈めていたんでしょう。海の上なら数任せに返り討ちにされることもないですし、
人間にその行動を知られる心配もありません。
……ただ、それでも確実に気付かれないようにするために、あまり頻繁に船を襲うことはしていなかったようですが」
船に乗っている人間の数は、たいてい二十人に満たない。
仮に命を鍵とした封印が解ける基準を、生贄の寿命の合計が既定に達した時とした場合
一人につき四、五十年と考え、乗組員全員の寿命の合計は多くて千年となる。
「オニバスさんがどうやって私をエルフと判断したかはわかりません。
ただ、私がエルフであるなら、私は千年以上を軽く生きることになります。まだ十四歳ですからね。
生贄として、私以上の適役はいません」
彼女一人で、単純に考えれば船二隻を沈めたのと同じだけの鍵が手に入るのだ。
もちろん、命の質を寿命としたのは推論である。実際はそれ以上の

効果があったとしてもおかしくない。
事実、エルフのオニバスの命を捧げた途端、不完全ながらミスリルは動き出したのだから。

「私の耳がただれているのは、私がエルフだと勘付かれないために、耳を切り落として傷口を焼いたせいでしょう。
病気の名残だと教えられていましたが、今思えばどう見てもこれは火傷の痕です」
「……そーか。確かにそう考えれば、おんしがエルフであるとしたほうが自然じゃな」
フェンネルは腕組して頷いた。が、顔はまるで納得していない。
「まあ、百歩譲ってそれが真実としよう。じゃが、世の中にエルフなんてたくさんおるぞ？
私がおんしにお姉さん呼ばわりされる筋合いはないんじゃがな」
「フェンネルさん。あなたの母君の名前を聞いてもよろしいですか？」
「……」
アポロンが首を回し、心配げに主人の顔を覗き込む音さえ大きく響いた。
アイナは何も言わない。やがてフェンネルが観念したようにかぶりを振る。
「フランネル、じゃ」
「私の母も同じ名です」
「……ここで私が何を言っても、苦しく聞こえるんじゃろうな」
「別にこれが根拠というわけではないですよ。
まずおかしいのが、あなたの私に対する態度です」
そもそもクロノガルデニアのエルフ達は人間に住む場所を追われ、実りのないあの島に移住せざるを得なかったのだ。
いかに里のエルフと折り合いが悪かったフェンネルとはいえ故郷を追い出される原因となった人間という種族に、あそこまで親

切に接したりするだろうか。
「少なくとも、初対面の私にあそこまで気安く話しかけてはこないでしょう。
もしそうしたとしても、命を賭けてオニバスさんと戦ってくれるなんて……どう考えてもおかしすぎます」
だが、ときに人間やエルフは己の意思とは正反対のことをしなければならないこともある。
もしもフェンネル自身は人間を嫌っていても、目上の者から人間を大事にするようにと日頃教えられていたならどうだろうか。
「その仮説を採用すると、誰がフェンネルさんにものを教えられるかという問題が出ます。
フェンネルさんが頭の上がらない存在。私の知る中では、それはあなたの母親以外に考えられませんでした」
クロノガルデニアで、フェンネルは母の自慢話をすることが多かった。
娘を置いてどこかに旅立ち、死に目にも会わせてくれなかった迷惑な親だが、尊敬していると常々言っていた。
彼女がフェンネルに人間を嫌わないよう教えていたなら、フェンネルが渋々従ったとしても不自然ではない。
「なぜフェンネルさんの母君……フランネルさんがそんな風に教えたのか、その理由は後にします。
ここにも不自然なことがあります。どうしてフェンネルさんは、尊敬する母君をすでに死んだと決め付けているのでしょうか」
どんな生物にしたって、あまりに老衰すれば子供を作ることは難しくなる。
エルフがどのくらいの年齢で子供を産むのか、どのくらいの年齢でエルフが老いるのか、不明なところはあるが
少なくともこれだけ人間に近しい種族が、命の折り返し地点を遥かに過ぎてから子を産むということはあるまい。
「フェンネルさんの話をそのまま信じるなら、人間のそれに換算し

たフェンネルさんの年齢は、おおよそ二十代の前半。
人間なら充分に出産に耐えられる年齢です。フランネルさんもその歳でフェンネルさんを産んだと仮定して
今現在、フランネルさんの年齢は人間に置きかえて四十代後半から五十代の前半です。死ぬには早すぎます」
仮にフランネルが晩婚で、フェンネルを産んだのが千歳を過ぎてからだったとしても
今の年齢はせいぜい千五百歳弱。真っ当な生活をするエルフの寿命――二千年にはまだまだ足りない。
「私の母さんが真っ当な生活をしていたという証拠はあるかの？」
「フェンネルさんは時々人間の集落に行って、人間の食べ物を購入していました。
フランネルさんも同じことをしていた、少なくともフェンネルさんと同じ食生活をしていた可能性は高いです」
「反論はことごとく潰されるんじゃなあ。いいわ、続けてくれ」
「はい。――フェンネルさんはなぜ、自分の母がすでに死んでいると半ば決め付けているのか。
その理由ですが……フェンネルさんは、フランネルさんの死期が近いことを知っていたのはないですか？」
「どうしてそう思う？」
「ミスリルを封印したのが、フランネルさんだからです」
アイナの言葉はあくまで淀みがなく、隙もなく、しかし説得力に溢れていた。
あるいはこの説得力こそが彼女の本当の強さなのではないかと、フェンネルは唐突にそんなことを思った。
「私の主観ですが……フェンネルさん、あなたは強すぎます」
エルフであるフェンネルが『魔法とはエルフ独自の技術であり、奇跡を起こす魔法とは違う』と言っている以上
オニバスのいたエルフの隠れ里には様々な魔法に関する技術書、指

南書があったに違いない。
その証拠に、オニバスはミスリルの封印を解く方法を熟知していた節がある。
周囲の年上のエルフ――教師となりえるエルフとことごとく死に別れてしまったオニバスの境遇は確かにハンデだろうが
それにしたってフェンネルの強さは異常だ。
オニバスと一騎討ちを行ったあの夜、フェンネルはベストコンディションには程遠い状態だった。
他のエルフの戦意を削ぐべく島全土を光らせた『光源』、
彼らを威嚇するために使った植物を操る魔法、壊れたアポロンだって完璧に修復している。
そんな消耗しきった状態で、フェンネルはオニバスを倒したのだ。
もし互いに体力、気力とも満ち溢れた状態で戦っていたならば、フェンネルはもっと楽にオニバスを倒していたに違いない。
フェンネルの実力は、他から抜きん出ている。抜きん出すぎている。
「単純に考えれば、指導者が優秀だったのでしょう。傭兵だったお父様に私が教えてもらった剣術が実戦で通用したように、
フェンネルさんに魔法を教えたフランネルさんも、非常に優秀な魔法使いであっただろうことは想像に難くありません」
そのような優秀な魔法使いが、いくら女性とはいえ、四百年前の戦争に駆り出されないはずがない。
ミスリルの強さを考えれば、女であるという体裁はどうでも良かったはずだ。
「さっき私は、ミスリル復活の鍵は生物の命であると言いました。
私は魔法に関しては門外漢です、女ですけどね。けれども、解こうとした者に命を貢がせるような封印を
そんなにあっさり作れるはずがないと思うんです」
「では、母さんはどうしたというのかの？」
「自分の命を差し出したんでしょう。ミスリルを倒そうとしたフェンネルさんがそうしたように」

おそらく、複数のエルフが協力して作った封印なのだろう。
そのエルフ全員が、自分の命を魔力に注ぎ込んだ。命の代償は命で払え、そういう質の封印だったのではないだろうか。
「そう考えたなら、フランネルさんの死期が近くなっていたことも納得がいきます。寿命が縮んでしまったんです。
そして、フランネルさんがそこまでした理由……それが、彼女が人間を愛していたからだと思いました」
「そりゃ妙じゃの。ミスリルを倒したなら、人間からもそうじゃがエルフからも英雄扱いじゃぞ。
それがどうして人間のためだけに戦ったとわかるんじゃ？」
「もちろん、フェンネルさんのためでもあったでしょう。
……ただ、エルフのために戦ったのであれば、あなた達母娘がエルフの里から離れて生活していたのが気になります。
エルフのために命を賭した者に、あのエルフ達がそんな仕打ちをするとは思えません。
それで考えたんです。もしかしたら、エルフ達をクロノガルデニアに導いたのもまた、フランネルさんなのではないかと」
ウィナリスに伝えられている民話では、エルフの隠れ里があるのはクロノガルデニア一つだけだ。
他の離島にエルフが住んでいるという話は聞いたことがない。実際は住んでいるのかも知れないが、
それは人間にその存在を悟られないような小人数のエルフに限る話だろう。
そこまでクロノガルデニアのエルフが有名になったわけ、それは何者かが率先して大移動を行う手はずを整えたからではないだろうか。
「ミスリルの件で、人間とエルフの仲は険悪になったそうですね。
そんな状況下でエルフが故郷を捨て、実りのない小島に追いやられるよう計画し、実行したなら……
エルフからは嫌われて当然です。真にエルフのことを思った行動とも取れなくはないですが

それでしたら人間を皆殺しにする覚悟を決めても良いはずです。そうすることができるだけの力もあったと思います。
そうしなかったのは、少なからず人間を愛していたからです」
一息でそこまで言い切り、そこで初めてアイナは自信なさげな表情になって続けた。
「これは推測ですが……もしかしたら、フランネルさんはミスリルの開発にも携わっていたのではないかと思うんです。
それもかなり重要な地位にいたと思います。
フランネルさんが作ったというアポロンさんは大きさ以外はほとんどミスリルと同じ形をしていますし、
人間との確執の原因になったミスリル開発の第一人者とくれば、エルフの非難の矛先も向くでしょう」
床に座り込んでいたアポロンが、心なしか背を丸めたように見えた。ミスリルが意思を持つゴーレムの先駆けであるというなら、アポロンはその完成形と言ってもいいかも知れない。言葉は話せないが。

「話を戻します。こうしてフランネルさんとフェンネルさんが人間に親切に振る舞う理由を説明しました。
次に重要なのが、お父様の話です」
前振りのない指名だったが、ベッドの上で静かに目を閉じていたオレガノはとくに驚いたりせず
ゆっくりと体をアイナのほうに向けた。傷が痛むのか、ほんの少しだけ顔が歪む。
「お父様はエルフの領海から生きて帰ってきた、数少ない――いえ、現代ではほとんど唯一の人間です」
「ああ……その、オニバスと言うのか？そのエルフにやられたのだと思う。
俺は直接姿を見たわけではないが、気がつけば船は炎上し、戦友は焼き尽くされ、俺は身一つで海に投げ出された」
「私とほとんど同じ状況です。――では、海に落ちたあとの状況も

同じになって、何の不自然もないですよね」
オレガノはしばらく黙り込んでいたが、観念したように頷いて再び目を閉じてしまった。
「海には、海流というものがあります。周囲の島や海底の形に影響を受けて複雑になるそれは
十年や二十年であっさり変わるものではありません。
エルフの領海に落ちたなら、おそらく……いえ、確実にクロノガルデニアに流れ着きます」
あとのことは説明するまでもない。
クロノガルデニアに漂着したオレガノは、運良くフェンネルか、アポロンか、フランネル本人かに助けられ
フランネルと恋仲になり、アイナを産んだのだ。
「フランネルさんが言ったという『好きなことをして死にたい』というのは、お父様について行きたいということだったんでしょう。
――私の出した結論はこうです」

四百年前、フランネルというエルフがミスリルを開発した。
しかしミスリルは暴走、フランネルは自らの命をもってそのゴーレムを封印し
エルフ達と人間達が争わないよう、エルフが譲歩する形でウィナリスを去るように仕向けた。
フランネルはそのことでエルフの信用を失い、里から離れて生活することを余儀なくされるが
そのことが人間の食事を手に入れられる良好な生活環境に繋がり、フェンネルは栄養失調を起こすことなく成長した。

そしておおよそ十四、五年ほど前に、クロノガルデニアにオニバスにやられたオレガノが流れ着いた。
フランネル一家に助けられたオレガノは、そこでの生活でフランネルと恋に落ち

フランネルはフェンネルとアポロンを残してでも、オレガノについて行くことを決意する。
こうして二人はウィナリスに帰り、家庭を築き、アイナを産んだ。
その三年後、フランネルは死亡する。

アイナは十四歳まで成長し、客船による社会見学の旅に出発するもそこで父子そろってオニバスに船を沈められ、アイナはクロノガルデニアに漂着する。
あとのことは、経験した通りだ。

「ミスリルは、私をフランネルと呼んでいました。それだけ私は母に似ていたのでしょう。
実の娘であるフェンネルさんには、私がフランネルの娘――自らの異父姉妹であると気付いたはずです。
これは予測に過ぎませんが、エルフと人間が子を成した場合
エルフの血のほうが色濃く出てしまうのではないでしょうか」
フェンネルの話によれば、ウィナリスに最初に定住したエルフはただ一人だったはずだ。
そのような性質でも持っていなければ、現在までエルフの血が絶えることなく続いているはずがない。周りは人間だからだ。
「あなたは私をどう思っていたかはわかりません。もしかしたら、恨んでいたのかも知れません。
自分から母を奪った男の娘など、見たくもなかったかも知れません。
ですが、あなたは尊敬する母君の娘を見捨てることができなかった。だから私を守った。そうですね」
問いかけではなく確認である。アイナは静かに、しかしはっきりと断言した。
真正面から見つめられ、フェンネルは居心地悪そうに視線を逸らし、気だるげに前髪を掻き分けて天井を見上げ、

「……二つだけ、間違っておるの」
たっぷり時間をかけてアイナに向き直った。かくれんぼで見つけられてしまった子供のような、さっぱりした笑顔だった。
「母さんがミスリルを封印したのは、倒せなかったのも理由の一つじゃが
最も大きいのは、自ら殺すことができなかったからじゃ。母さんは一度情が移ったものは捨てられないタイプじゃった」
「そうですか……では、もう一つは？」
「私も、アポロンも、おんしが大好きじゃ。間違っても恨んだりなんかしておらんぞ」

たまには貝なり海魚なりをフェンネルに食べさせようとやってきていた海岸で、アポロンはアイナを見つけた。
確かにフランネルに似ているとは思ったが、髪の色が明らかに違う。他人の空似だと思っていたらしい。
しかし、フェンネルは気付いた。
「驚いたぞ。縁を切ったはずのお母様は、死んでから娘を頼ってきたわけじゃ。
妹をよろしく頼むー、とな。正直、呆れたがの」
「そこで見捨てないでくれたから、今私はこうやって生きています。ありがとうございます」
「うむ、敬うがよい」
フェンネルは冗談めかして笑い、尻を沈めていたベッドから反動をつけて立ち上がる。
そして、揺れるベッドの上で恨めしそうに顔をしかめるオレガノへと無遠慮に問いかけた。
「バレたからにはしょうがないからの、いい機会じゃし、母さんの墓参りに行ってくる。案内してくれ」

「アホか。怪我人を何だと思ってるんだ、お前は」
「柔な体しとるのお、アポロンなんか腹に穴が空いたくらいじゃぴくりともせんぞ？」
「ゴーレムと人間を一緒にするな。だいたい、ぴくりともしなかったらやっぱり死んでるだろうが」
苦しそうにつぶやかれたオレガノの突っ込みを盛大に無視し、フェンネルは背中からアイナの肩に手を置いた。
「それじゃあアイナ、案内してくれんか？　十五年ぶりなんじゃよ、一度くらい母さんに会わせてくれてもいいじゃろ」
「それはまあ、いいですけど」
「よし決まった。ほれ立て、アポロン」
のそりと起き上がるアポロンを苦笑まじりに眺めていると、フェンネルが耳元に顔を近づけてきた。
かかる吐息や金髪がくすぐったい。
「何です？」
「いや。さっきの推理は自分で考えたんじゃろ？　オレガノに教えられたわけじゃないんじゃな？」
「そうですけど、それが何か？」
「なーに、自分で考えたなら問題ないんじゃ。ほら、物事には訳だの理由だの大義名分だのが必要じゃろう？」
意味不明なフェンネルの言動に混乱しているうちに、アポロンもフェンネルも部屋を出て行ってしまった。
父に目でうながされ、丸椅子から立つ。長く座りすぎたか、痛む腰をさすって振り向くと
半開きのドアの向こうで、フェンネルがひょっこりと首だけを出していた。
「出発は三日後じゃ。それまでに荷物の準備をしておかんと、置いて行くからの」
「はあ？……って、まさか」
「そのまさかじゃ。名推理のご褒美ってことでよろしく頼むぞ」

期待に目を輝かせるアイナ。廊下に引っ込んでしまったフェンネルが、思い出したように大声で叫んでいた。
「大陸の土を踏むのは、三人同時じゃぞ！これだけは譲らないからのー！」
「もちろんですっ！ありがとうございます！」

ばたばたと慌ただしく愛娘が部屋を飛び出していく。
しばらくは会えなくなりそうだが、あの二人に任せておけば問題ないだろう。二年もすれば帰ってくるに違いない。
それに、たとえ二度と会えないことになろうとも、さして後悔はしないと思う。
同行を許されたときの、これ以上ない極上の笑顔。娘はすでに自分の手を離れた。そのあとの居場所は、彼女が自分で決めることだ。
オレガノはよたよたとベッド脇の窓を開ける。白いカーテンが風に弄ばれ、窓枠に切り取られた青空をバックに踊り始めた。
夏の日差しはまだまだ強かったが、じきに落ち付くことだろう。
「見ているか？いや、見ているんだろうな、フランネル……」
入道雲の立ち昇る空に、オレガノは自分を愛してくれたエルフの笑顔を見た気がした。

第十五話「真実」（後書き）

途中だいぶ間隔が開きましたが、朽ちた楽園のエルフ、これにて完結です。
まともに書き終えたのはほとんど初の連載作品だったのですが、いかがでしたでしょうか？
読んでくださった皆様に、心から感謝申し上げます。
次の作品で出会えることがありましたら、生暖かい目で見守ってくだされば幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5374a/

朽ちた楽園のエルフ

2010年10月11日18時11分発行